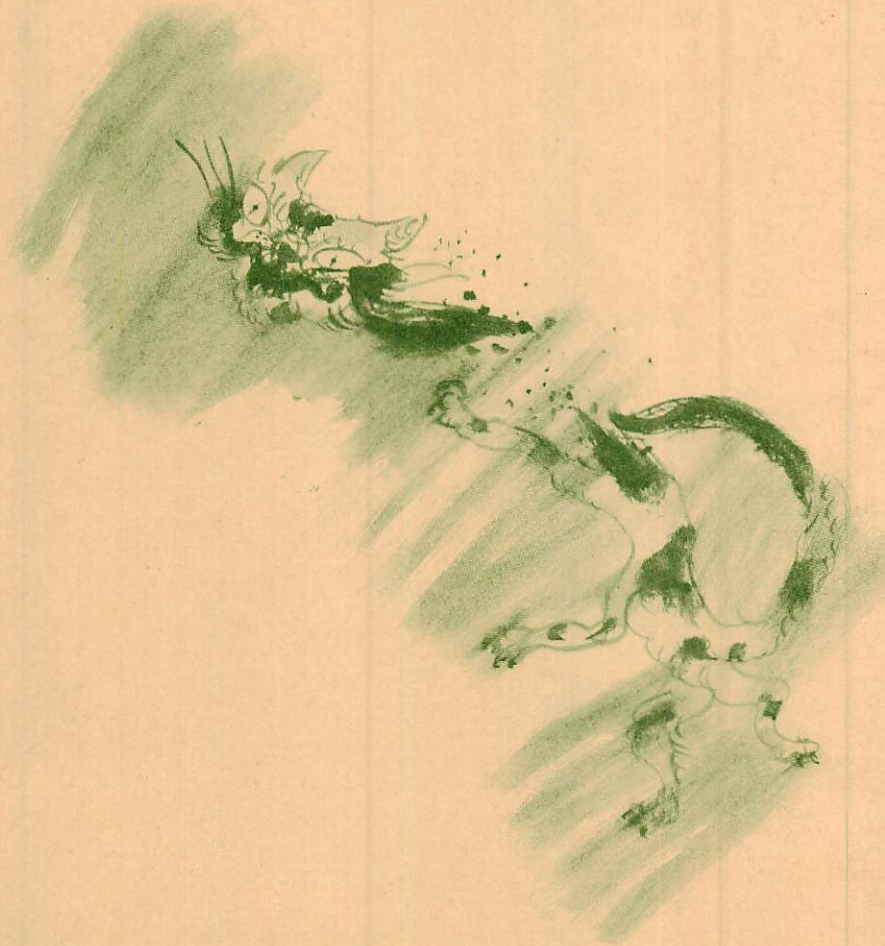
元禄秘帖

早乙女　貢



毎日新聞社

目次

元禄殺風　5
淫火麝香猫　85
秘帖盲暦　163
妖異猫一族　199

ブックデザイン　安彦勝博
カバー装画　村上　豊

元禄秘帖

——猫魔岳伝奇——

元禄殺風

1

犬が走ってゆく。

犢ほどもある大きなむく犬だった。

夕暮前の人の出盛る時刻である。金竜山浅草寺門前の混雑の中に、その犬はどこから走って来たのか。わっと、人々は、狼狽の叫びをあげて道をひらいた。

「お犬さまだ、寄るな寄るな」

「噛み殺されるぞ、ひゃわ、何か咥えているわえ」

広小路には、かっと強い陽が照りつけている。すでに七ツ下り——午後四時過ぎ、傾いて黄ろくなっているが、残暑の油照りだ。埃りが白く舞い上り、屋根の柿葺きが、かわききって、いまにも剝がれそうに反りかえっている。

その灼くような陽の、あくまで明るい中で、むく犬の咥えている異様なものが人目をひいた。

「首だ、人間の首だ」

目敏い男が叫んだ。

「首じゃア、女の生首じゃあ」

たちまち恐怖と好奇の声が増幅され、波紋をひろげていった。
目違いではなかった。犬の口先で揺れているのは正しく女の生首。
それもまだいま先、食い千切ったかのように鮮血の滴るやつだった。
どこへ向うのか、わき目もふらず、まっしぐらに走ってゆくそのあとに鮮血は点々として印されてゆく。いや、走りながら、顔を動かす度に、あたりにしぶく。
逃げ損ねた男の裾に、その血が飛んで、べっとりと附いた。
「わあっ！　血だあ」
どどっと雪崩た。広小路には晴天の日には植木屋が盆栽を並べて売っている。
人に押されてその台にぶつかった者が丹精の五葉の松を突き飛ばして転んだ。
「おっと危ねえ」
植木屋の老爺が鉢にあわてて手を伸ばす。が、台がぐらっと揺らいだと思うと、数十もの盆栽が鉢をぶつけ合い、先を争うようにして、つつーっと滑ってけたたましい音を立てた。
「うへえ、なんてえこった何百両の大損だ、やい、どうしてくれる」
鉢や台と一緒に数十人が将棋倒しになっている。大変な騒ぎだ。その悲鳴と叫喚の中を、むく犬はそ知らぬ顔でとっとと走って雷門へ。
名物の風神雷神が、門番よろしくかっと目を剝いているのも、このむく犬には、ただの木でしかない。女の生首を咥えたまま、雷門からまっすぐに参道へ走りこんでゆく。
浅草寺境内の陣笠大名よろしく、とっつきから鹿島明神の智光院、秋葉権現の正福院、妙味弁財天

の寿命院、出世大黒の長寿院と並んでいるのが東側。西側には、これまた大神宮、松の尾金比羅、不動明王と、それぞれ由緒ありげな客寄せの神様を同居させたお寺が並んでいて、その塀を埋めるようにして葦簀張りの小店がある。

鼈甲細工、櫛、笄、反物、袋物、紙入れから、絵草紙などを商っていて、いつもお上りさんの客が絶えない。

帰郷の土産にと、懐中と相談しながら物色している老夫婦から、公事で上って来たらしい頭丈作りの数人連れ。そうかと思うと、ここの櫛竹は安くて派手だからと、娘たちが買物にくる。

そんな人々で群れている中を、血まみれ首を咥えたむく犬が突っ走ったのだからたまらない。

お寺の境内といえば、いわば聖域だ。況んや、天下の名刹。そこを、まるで屠殺場か、投込み寺の墓守溜りでもあるかのように、我物顔に走ってゆくのだ。

群衆の悲鳴と叫びが、浅草寺境内にときならぬ騒ぎを巻き起した。

恐怖を感じた者も、悲鳴をあげた者も、財布を落した者も、一様に惹かれるように、犬のあとを追って走り出している。弥次馬根性はいつの時代も変らない。

「誰か、早くお役人に知らせろ」

「向こうへ廻れ、門を閉じて」

「いんや、どうでして境内から外へ追い出しちまったがいい、あとの祟りが大変だわな」

「えれェこった、とんでもねい、お咎め喰うぜ坊さん袈裟着てひっくり返らァ」

「腰を抜かしたら馬道にいい骨接ぎがあらァな、心配するなって」

むく犬は一体、目的があって走っているのか。群衆に追われての盲滅法の突っ走りか。

参道を錦袋円の前から二十軒茶屋、御手洗の手水鉢をちらりと見たのは、咽喉がかわいたのか、だが、寄り道せずにそのまま、仁王門をくぐって本堂へ。

まっすぐ猪のように、いや、狂犬さながらだ。動物にしてみれば、女の生首も、魚の頭も変りないだろうが、人間の眼から見れば、狂い犬としか見えない。

群衆がこれだけ騒ぎながら、誰も縄だ箒棒だ竹槍だと、武器を持ち出さないのは、お咎めが怖いからだ。

狂い犬でも〝生類〟だし〝お犬さま〟にちがいない。うっかり下手に手を出すと、自分の首が飛ぶ。

その女の生首は、お犬さまをひっぱたいた報いか、小便ひっかけられて小石を投げた罰か。

走っているから、生首の切口はわからない。刀で斬ったのか、犬の歯が食い千切ったのか。三尺に余る黒髪が、砂や埃りにまみれ、灰色になっているし、白い顔には血が飛び散って、白日のもとながら、凄惨そのものだ。

本堂に突き当ると、さすがに、お犬さまには賽銭箱は用がない。さっと左へ折れた。ためらう様子もなかったのは、やはり目的があるらしい。

本堂の西側にみごとな枝ぶりの勅使ノ松が涼しい日蔭を作っている。

大事な松だから、まわり三間四方に囲いがしてある。むく犬は平気でひらりと飛び越してその根方に走り寄ると、口をあけて、はっはっ、と息をついた。女の生首がごろりと重く転がる。

わっと、群衆は声をあげた。

「首を放したぜ、おい、なんと勅使ノ松だ」
「へえ、勅使ノ松と女の生首、こいつアなんの語呂合わせだえ」
「わからねえ、お犬さまに聞いてみねえ」
「生首をよく見てくんねえ、一体女は若いのか、きれえか、婆アか」
「眼を剝いてらあ、鼻筋が通って、唇が小さくてぞっとするような美い女だ、ああ抱いて寝てえ」
「じゃア、お犬さまの情婦かもしれねえ、見て見ろ、犬のほうだ。あのむく犬ア雄か雌か」
「よく見えねえが、ありや、へえ、へえ雄にちがいあんめえ、雌だとト一ハ一だ」
勝手なことをがやがや言っているのも、気にする様子もなく、むく犬はひょいと片足をあげた。
松の根方である。しゃアと、勢いよく奔しって、しぶきが上った。
「わあっ、お犬さまが勅使に小便ひっかけやがった」
「面白え、おれも一丁。さっきから、こらえていたんだ、そこどいてくんな」
「やいやい、やれるもんなら、やってみねえ、睾丸が腫れ上るぜ」
お犬さまには、神通力も勅使の御威光も関係ない。たまっていたのを排泄すると、また女の生首を咥え、ひらりと囲いを飛び越して、念仏堂わきから裏手へ。
裏の方には、護摩堂や、熊野権現の御社があるが、いわゆる千本桜。一目千本の桜の木が春日には参詣の群衆の目を楽しませてくれるが、いまは青葉が埃りをかぶっている。
ここのところ雨が少ないのだ。地面はかわいていて、この騒動のためか、五重塔も本堂の屋根も霞んで見えるくらい、埃りが舞い上っている。

閻魔堂や若宮稲荷の左右にずらりと茶店が並んでいて、赤前垂の女たちが客を呼び込んでいるし、あちこちに群衆の輪ができているのは、さまざまな香具師が、はったり口上で客を集めているのだ。いわゆる奥山である。

そのむく犬は、揚弓場の前をすっ飛んで、裏へ抜けるのかと思ったら、そうではなく、桜の大木の日蔭で、もっとも客を集めている長井兵助のところへやってきた。

むろん、騒ぎは聞えてきているし、狂い犬だ、生首だという喚きで、客たちも居合抜きどころではなく、わっと散った。転ぶ者もある。

転んだ子供に駈け寄る母親。それを止めようとする男。猪や狂犬なら、突っ走って来て、牙にかけたろう。馬ならば、蹄にかけている。牛なら角ではね飛ばしていたにちがいない。

ところが、このむく犬は、ひらりと、子供を避けて、長井兵助の方へ走り寄った。

居合抜きといえば、長井兵助。四尺もの長刀を腰をひねって抜く。むろん、刀を売るのではない。その奇妙技で客を集め、蟇の油など金創薬を売る。

見るからに豪傑という感じの巨漢だった。色褪せた紋服に紅絹の華やかな襷で袖を払い、袴の股立ちをとって、毛脛をむき出し、総髪に巾広茜の鉢巻をしめている。

「やあ、みなの衆、これからだぞ、これから二度と見れないワザを披露しようというのに、如何したことだ」

大声で呼び止めようとした。

その男に向ってむく犬は走って来たのだが三尺てまえまでくると、ひたと止った。

ぱっと口から、女の生首を放した。そのはずみで、ころころと転って、女の顔は空を向いた。
生きていれば美しい目鼻だちであろう。苦悶の表情が凄惨そのものだ。
両の目尻をひき吊らせ、虚空を睨んでいる。唇も歪み、きれいに揃った歯並びが見える。
色白の頬や、口のまわり、鼻梁などに、血が飛び散り、埃りがついて、正視にたえない形相だった。
その首の切口は、血泥に汚れていて、刀で切ったとも、鋸引きをしたともわからない。
最初から見ていた者が、後に話したことだが、この犬を見て、件の長井兵助、少しも驚いたふうがなかったという。
むく犬は、まるで、主人の命令で、生首を持って来ましたといわぬばかりに、投げだしたあとは、桜の根方へ寄って、ごろりと横になった。
長丁場を走って来たので疲れたといわんばかり。その腹がまだ大きく波をうっている。
これでは誰が見ても、この男が主人にちがいない。
勅使ノ松に小便をひっかけたのも、別に他意があってでなく、この主人の商売している傍の木を汚すよりは、前に済ませておこうという配慮だろうか。
とすれば、このむく犬、どうして狂っているどころではない。
長井兵助は、そんなむく犬を見ると、にやりとした。それまで、ひろげていた薬箱の蓋をしめ、褌をはずして、袴の股立ちをおろし、ぱっぱっと埃りを払った。
群衆は遠巻きしたまま、そんな兵助とむく犬と生首を眺めている。
もう、怖さはなく、好奇心だった。もう一つ見世物が増えたというような気持だった。

その群衆のうしろから、

「どけ、どけ、お出ましだ」

と、岡っ引らしい喚き声が聞え、人々は、逃げるように道をあけた。

一目で、町奉行所の定町廻り同心と知れる男が、岡っ引や番太郎などを引き連れて、肩を振って歩いてくる。

お成先着流し御免が定町廻り同心の誇りで、墓参やお鷹野などで外出した将軍の前に出ても、袴をつけないでいて無礼にならない。

頭も月代をぐっと深く剃って、いわゆる十河額というやつで、髷は細く短かく横から見ると、寸の詰った一文字、袴はつけないが、四季を通じて羽織を着ている。もっともこの季節だ。

黒絹の羽織だが、ひらひらさせていれば涼いものだ。裾を帯に巻きこんでの、じんじん端折り。

この羽織は、いわゆる埃りよけの効能があるが、同心の場合は与力と違って、日ごろ十手を見せびらかさない。帯のうしろへさしている。必然的に羽織がこれを隠すことになる。

ところが、残暑の暑さを、一層、うだらせるような事件だ。

噂はたちまち尾鰭がつく。

「むく犬が女を食い殺して生首を……」

ということになって飛んできたのだった。

十手をこれ見よがしに右手へ握って、三白眼を長井兵助に注いで、やってくる。

「こりゃ、一体どうしたことだ」

と、同心は顎をしゃくった。

「さて、どうしたことか」

返事にもならぬ返事で、居合抜きは、身のまわりを片附けていたが、支度をし終ると、黙って立ち去ろうとした。

「やい、兵助」

岡っ引が、噛みつくように、

「やい、聞えねえのか、耳はねえのか、兵助」

それでも、返事をしない。同心に対しても平気でいる男だ。犬のような岡っ引や番太郎など歯牙にもかけない。その様子に番太郎が業を煮やしたように、前へ廻って、ぱっと大手をひろげた。

「野郎、待ちゃアがれ」

「――ほ、どうした？」

と、むしろ呆れたように、〝兵助〟は大仰に眼を丸くして、

「何を吼えている？」

「や、やい、吼えているたア、どなたさまに向って言うことか」

「番太に聞いたのさ、うぬは番太郎であろう。お犬さまより見っともないぞ」

「やい、兵助」

と、また岡っ引は喚いた。威勢のいいのは同心がついているからだ。岡っ引にとっては将軍のうしろ立てでもある気になっている。事実、町奉行所の権威は将軍につながっている。

「やい、町奉行所から旦那のお出ましだ、こっちを向きやがれ」
「ほう、町奉行所というと」
ゆっくりと向きなおった。
「わしに何か御用か」
「黙れ、兵助め」
「兵助々々というのは、わしのことを呼んだつもりか」
「そうだ兵助」
「あいにくだったな。わしは左様な名ではない」
「黙れ、居合抜きは長井兵助ときまってらアな。それとも汝は」
「聞きたいか、わしの名を」
「吐きゃアがれ」
「――猫目幻十郎」
その眼が、ぎらりと、猫のそれのように光った。

2

かっと太陽が光ったのである。一瞬、居合抜きの顔は赧く輝いた。猫のような光りを放ったと見えたのは、両眼が、烈日を反射したのか。
だが、同心と岡っ引は、思わず、ぎょっとしたように、身をそらしている。

同心のお供の御用箱を背負ったやつは、その重みのせいか、よろけて、二、三歩、退っている。お定まりの紺かんばんに紺の股引、梵天帯に三つ金輪の木刀をさした仲間は、そいつをあわてて支えようとしたとき、御用箱の角で額を打って、痛え、と声をあげている。

「ね、猫目だって」

「妙な名前だな、まアいい、やい猫目」

「なんだ」

「なんだじゃねえ、この始末。さあ、そこの番屋まで来やがれ」

岡っ引が、十手を突きつけると、手先は早くも、縄をしごいている。見るからにしぶとい相手、縛るしかないと思ったのだろう。

「この始末とは何だの」

「けッ、野郎、とぼけやがって、この女の生首だ」

「ふむ。らしいな」

「ら、らしいな、だって、くそ！　どこまでとぼけやがる気だ」

手先が二人に岡っ引と番太郎、それに、額に瘤をこさえた仲間までが木刀をかまえてぐるりととり囲んだ。

「はてさて、一向にわからんのう」

「まだ、あんなことを、あのムク犬……いやお犬さまだ。あのお犬さまは、女の生首を咥えて来た」

「らしいな」

「またッ、うぬのところに来て、ぽいと投げだしたそうだな」
見ていた奴が説明したのだろう。
「そして、うぬのところで寝そべってやがる、あのお犬さまは、うぬが世話役だろう、とすると、この始末は、タダじゃ済まねえ、番屋にきて、きりきり説明して貰おうか」
「ほう、よく饒舌る」
幻十郎と名乗った居合抜きは、うすく笑った。
「なるほど、誤解なさったようだ」
と、急に慇懃無礼な言葉使いに変って、
「すべて、わしの知らぬこと」
「なんだと、ぬけぬけと」
「知らぬな。そのお犬さまも、生首も」
「……」
「とんと、わしには関係はない」
「ちちちッ、この兵助、じゃねえ、猫目が、吐かすことか、この狂い犬、じゃねえお犬さまが、うぬのところに生首持って来たのが何よりの証拠だわい」
「はて、これは大きに迷惑」
太陽は黄ろみを増し、どこかで、油蟬が鳴きだしていた。若宮稲荷の樹々の繁みを透して、陽の箭がさしていた。日没前の必死のかがやきには異常な光りがある。

「おれは、この犬とは、無縁」
「たばかるな」
「生首とも無縁」
と、嘯いて、さらに語をついだ。
「おぬしらとも無縁」
背を向けようとした。
さっきから無言だった同心が岡っ引に顎をしゃくった。これはかまわないから捕縄しろ、という合図だったのである。
権力というものは、法律も罪状も自由に取捨できる。罪名はあとから、どうにでもつけられる。お犬さまとの関聯に於て、解釈一つで、どうにでもなる。
岡っ引の顔が残忍な喜びに歪み、
「幻十郎、御用だ」
と、飛びかかった。
一瞬、ひょいと幻十郎の肩が沈んだ。きれいに空を泳いだ岡っ引が、数間先へ、どうと転がる。つづいて、手先が二人、同時に飛びかかっている。
これも幻十郎は手を下さなかった。ふらりと、よろけたように見えた。が、二人の手先は、もつれあうようにして、もんどりうって転がっていた。
遠巻きの群衆たちには、異様な眺めだった。まるで、幻十郎が手品をつかっているように見えた。

陽は急速に、位置をずらしていた。樹々の梢の影を長く曳き、西の空に落ちようとしている。

同心は、目の前で一弾指のうちに三人が地面に這わされたのを見ると、もうそれ以上、おさまりかえってはいられなかった。

定町廻り同心としてのプライドもある。岡っ引たちを顎で使っているだけに、これは看過できないことだった。おのれの出番だと思った。抜いた。ぎらっと光った。斬りこむ——一瞬、別の光りが群衆たちの目を射た。幻十郎のあの巨刀が奔ったのである。

常人なら抜刀もかなわぬ長く、巾の広い長剣が凄まじいばかりの光りの弧を描いた。その光りのもとに同心の首があざやかに飛ぶのが見えた。

ぎゃあーっと、悲鳴を噴きあげて、同心は、ぶっ倒れた。

その手を放れた刀が宙高く舞い上り、足もとから黄塵がもうッと吹き上っている。一陣の宵風が吹いてきたのだ。

——人々は、たしかに見た。

同心の首が飛ぶのを。

突き倒されたように両手をのばし、ばったり倒れた同心の一間先に首が——

太陽はその一瞬にすべての力を凝集したように、強烈な最後の光りで、群衆の目を灼いて——沈んだ。

息を呑んだ群衆は、舞い上った刀が垂直に落ちて大地に刺さり、黄塵がしだいにおさまる中に、その首を見た。

「……」

生首は一つ。女の首だけではないか。

同心の首は胴についている。

人々は目を疑った。目をこすって見た。夢幻か？　たしかに同心の首が飛ぶのを見たような気がしたのに。

「なんとしたことじゃろ、たしかに見たわいの」

「んだ、見たぞ、おらも」

「面妖なこっちゃ。どこも斬られたようじゃねえ」

「あれ峰打ちけえ、へえ、たしかに首が飛んだがなあ」

めくらまし。

囁く声が、次々とひろがった。残照の中に猫目幻十郎の姿は消えていた。そしてあのむく犬も。

いつの間に立ち去ったか、どっちへ行ったか、知る者はない。

その同じ時刻。

下谷御徒町の旗本屋敷のまわりに人だかりがしていた。旗本屋敷といっても片番所がついただけのせいぜい二百石どりほどの小屋敷。

その門内から、女の生首を咥えたむく犬が飛び出したのを目撃した者があって、大騒ぎになっていたのである。

血のあとは点々と、まだ往来につづいている。
「あのおそろしいお犬さまは一体、どこへ持って行きゃがったんだえ」
「早い足だ、追っつかねえ、こいつァ、血のあとをたどってみるしかねえな」
「北のほうだってよ、浅草並木茶屋町を突っ走っていったって話だ」
「するてェと、浅草寺けえ」
「なアに、新吉原だろうぜ」
「置きゃアがれ、お犬さまが、いってェ、吉原に何の用事があるんでえ」
「そいつアおめえ、決ってらァな。牡なら言うこたァ同しさ。太夫さんえ、タダで乗っけてくんなまし、いやだと言うたら、首を咬み切るぜって」
猟奇的な事件は、いつの世でも、非情な世間を楽しませてくれる。
だが、小さいながら旗本屋敷だけに大変だった。同輩たちが駈けつけて、上役へ注進したり、お届けしたり、医者もくわい頭をふりふり入っていったが、まだ出て来ない。
弥次馬たちは、中へ入りたくてうずうずしている。話のタネになる猟奇的な事件だというのに様子がわからないということは、焦々させられる。
「やあ、出て来た、犬医者だ」
初老のくわい頭だ。代診と薬箱を担いだ小僧を連れている。
「せんせい、一体、どんなふうで」
「あの首は、誰の、どなたさまので、こちらの奥様の」

くわい頭は、黙って手を振った。うっかり饒舌れない。医者はどんな屋敷の奥にも入ってゆくから、口の軽いのは、一番嫌われる。

「いいじゃねえか、一体どんなことだ。え？　様子を聞かしておくんねえ」

「駄目だ駄目だ」

「ちえ、吝々しゃがって、聞かなきゃ気になって、こちとら商売にゆけねえや」

「さあさア、そこをどいて下され、春先は陽気のせいか、医者は多忙での」

「置きゃがれ、犬医者め」

そんな罵りも聞えないように、医者は馴れた身ごなしで町駕籠へ身を入れた。

「ちえッ、しょうがねえ、あの筍へ聞け」

「筍たァ誰だ」

「あの代診よ。藪の下ァ筍だ」

その代診は話したそうに、にやにやしていたが、医者に促されて、しかたなく駕籠わきについて小走りになった。

群衆の中で、聞えよがしにちえッと唾を吐いた者がいる。

「なんでェ、あの野郎、お犬医者で近ごろ羽振りがいいものだから、でっけえ面をしやがってよ」

「へえ、お犬医者が、駈けつけたのか」

「丁度いい塩梅に通りかかったのさ、医者なら、何でもいいと思って呼び込んだらしい」

「そいっァ面妖だ、お犬が病気や死んだのじゃあるめえし、生首ってのは、人間さまだろう」

「当りき。それも、なんともふるいつきたくなるような美い女だったそうだ」
「へえ、そうするってえと、ここの奥様か。ここのお屋敷の奥様は、美人てェ評判だぜ」
「どなた様のお屋敷だね」
「根子間さま」
「へえ、妙な名だ」
「名前なんざ、妙でも何でもいいやな、おめえ、聞いて驚くな、御役がいい」
知ったかぶりをしているのは、魚屋らしい。この事件に夢中になって、盤台は置きっ放しになっている。
「金を扱うお役だとよ、え、御金奉行様だ、御金、御金」
「へえ、それにしちゃ」と、声をひそめて、「屋敷があんまり大きくねえ」
「御勘定奉行は三千石だが、御金奉行は二百石高、御役料百俵、というところじゃ」
武鑑知識をひけらかしたのは、近所の隠居らしい。白髪で鉄ぶちの大きな眼鏡をかけている。
その石高から見ると、この屋敷の広さは不思議ではない。
「その根子間さまって、どんなお人柄だえ」
「男まえだァな、ここいらの娘っ子は、根子間と聞いただけで、ぽっと顔に紅葉を散らして、胸がどきどき、尻がむずむず、赤貝ぴくぴく」
「それじゃ、おめえ、歌舞伎の坂田市之丞じゃねえか」
「どうして、人気はそうだが、あんな女形のなよなよじゃねえ、上背はあるし、きりっとしてな、ど

っちかといやア、団十郎の方だ」
「根子間団十郎かえ」
「根子間左近か市川団十郎かってところよ」
魚屋は自分のことのように、胸を張って、曽我十番所の立役の所作になった。
「おい、魚屋さん、盤台にお猫さまが首を突っ込んでいるぜ」
「えっ、ほんとか」
驚いて、振りかえった眼に、大きな野良猫が、秋刀魚を咥えて、じろりと見返した。
「あ、この野郎」と、駈け寄ろうとしたが、
「いけねえ、お猫さまだ、ち、くそ、いめいめしい」
天秤棒を振りあげただけで遠島になったという話を聞いている魚屋は、拳のやり場に困って、自分の頭をぐゎんと殴った。
虎猫といっても蔑称になるという、その虎斑のお猫さまは、もう人間どもの弱腰は充分知っているから、逃げ隠れしない。
秋刀魚の一番いいやつを咥えると、人間どもの騒ぎを尻目に、悠々と歩いてゆく。
お犬さまお猫さまが威張れるのも、無理はない。
いわゆる、
〝生類憐みの令〟
なるものが公布されてから、もう、十年以上になる。

はじめはしかし、後年のように極端なものではなかった。殺伐不仁のふうを矯め、慈悲を畜生類にまで及ぼそうというのだから、主旨そのものは悪いことはない。

いかにも、仁政、という感じで、学者や識者は、歴代の将軍の中でも、有徳慈悲の将軍だと、ほめちぎった。

世間もそれにならった。ところが、畜生類を憐愍するのは、親孝行兄弟愛と同じくいうならば道徳の範疇であって、法律で規制するのが、根本的に間違っていた。

感情を行政的に抑圧するのと同じで、それを犯せば罪ということになると、畜生の方が人間さまよりも、優先する。

もっとも、綱吉の方では、せいぜい、親孝行くらいのつもりであったのが、将軍の命令という点に護られた役人たちの法律解釈と、融通のきかなさが、悪い結果を齎らし、それに輪をかけていったのだ。

その証拠に、右の布告は、それだけのものではなかった。むしろ、主文は、庶民の救済の方にあった。

囚獄の改良から、行路病者の看護、棄児の禁絶など、当時としては、画期的なものだった。

犬猫を人間に優先させたわけではない。が、優先することになってしまったのは、犬の戸籍を作らせ、毛色、年齢などを記して、時々、大目付に巡検させたり、しはじめたあたりからだった。

生きた魚鳥の販売を不許可にした。むろん将軍自身も鷹野や鹿狩りなどしないが、鰻屋などは廃業だ。泥鰌屋もなりたたない。鰻や泥鰌は生きたやつから料理しないと、納得しない。だからといって

殺して売るわけにもいかないから、廃業するしかない。

貞享年間はまだよかったが、この元禄に入ると、ますます、エスカレートしてきた。犬猫に芸をさせるのを禁じ、猪、狼が田畑を荒しても撃たせない。空砲しか許さない。小鳥や金魚、松虫を飼うのまで禁止している。

ひどい話は、お鷹狩がなくなったから鷹匠たちも失業。鷹匠所は小川町と改称、餌差町も富坂町になる。

お犬さまの保護が、特に強調されたのは、将軍綱吉が戌歳生れ、先ごろ老中首席となった柳沢保明（吉保）も同じ生れ。

飼犬が病気しただけでも手落ちになるから、生れた仔犬は、夜中に捨てにゆく。

そのため市中に野良犬が増えた。犬だらけになった。公儀ではしかたなく郊外に、お犬小屋を作って養うことになったが、このお囲いが、大きいやつはなんと十六万坪。

これは中野だが、大久保にも二万五千坪。

いまや、収容された野犬の数は四万八千余匹。

まるで気狂い沙汰だった。

犬も猫も似たようなもので、猫さまもこれに準じた扱いだった。

秋刀魚を盗まれて腹を立てているのはまだ倖せだ。

腹ぺらしのお猫さまを見たら、なぜ進んでお食事を差し上げぬ、と役人に怒鳴られるより、どれだけましかわからない。

3

「なんと、お美津が！」

根子間左近は、知らせを受けたとき、愕然となった。

かれはそのとき金座にいた。金座は日本橋本町一丁目にある。現在日銀のあるところだ。

数年前から勘定奉行に荻原重秀が就任して、金銀改鋳が行われ、したがって古金回収を急いでいた。新貨は品位が悪く量目も少ないとあって評判が悪く、物価狂乱を招き、回収率が悪かったために、来年三月まで古貨幣通用期限を延期している。

左近は御金奉行として、その折衝に当っていたが、今日も金座で金銀改役の後藤庄三郎とあい、帳面と在金高を照合したり、何かと指図していたところだった。

「お美津の首を……」

犬が咥えていったと聞いて、愕然となった。

「犬が、お美津を嚙み殺したのか」

よくは存じませぬ、と仲間は答えた。事情は知らない。異様だということで、ともかく、お知らせしてこい、と言われたのだ。

左近は金座の屋敷を飛び出した。時刻も七ツ過ぎ、旗本の勤務時間は、一定していないが、勘定奉行の出勤が辰ノ下刻（午前九時）で下城が未ノ下刻（午後三時）である。出張すれば、たいてい遅くなる。仕事に熱中して、五時過ぎになっていた。

御徒町の異変は一たんお城の勘定所へ報告され、左近の出張先までくるのに、随分時間がかかっている。

左近は本町から御徒町まで馬を飛ばした。

屋敷へ帰ってみると、お美津の死体はそのままになっていた。

御検使はすでに来ている。が、一家の主人が帰宅するまでは、引き上げない。事情聴取も、家人の言葉を信用しない。責任者の調書というかたちをとらないと、役目が果せないのだ。

「むごい！」

一目見るなり、左近は、絶句した。

棒立ちになっていた。

お美津は、座敷で殺されていた。それも、裸身だった。

帰って来たときは死体に小袖をかけてあったが、下は一糸まとわぬ素っ裸だった。

その白い肌が、上半身、血にまみれていて、凄惨で妙に生々しい。

「買物に行っている間のことでございます。こんなことになるのだったら、買物などに行かねばよかった」

婢女（ひじょ）は眼を真っ赤に泣き腫らしている。

「おやさしい奥様だったのに……」

飯炊きの老人は、少し耳が遠い。これは、事件の起ったことに全く気がつかず、裏で薪を割っていたという。

「だが……咬みついたのか、一体どこから来た犬か」
検使の役人は、咬み切ったあとではないな、と言った。いかにも切口は、肉がはみ出して歪んでいたが、犬の歯ではない。
「――刀でもないようだ」
これは、左近も感じたのである。
刃物にちがいないが、刀とは違う感じだった。それが一層、左近を胸苦しくした。
「お美津……苦しがったろうな、誰がこんなことを」
「殺すにことかいてな」
と、役人もその疑問をずっと考えていた、といった。
「物奪りでもないらしいが、中を荒された様子はないということだが、何か無くなっている物があるかどうか、仔細に調べてみられよ」
言われるまでもないことだった。
役人は、無表情だった。一度も口をきいたこともない男だったが、儀礼的に口先だけでも哀悼の意を表するものだ。
別に緊張しているわけでもない。性格が冷たいのか、書役に委細をしたためさせて、帰っていった。
仲間たちに命じて死体の血を拭い、仏間に安置する。菩提寺は浅草三十三間堂に近い霊光院。新義真言宗で和尚は浄光。すぐに知らせたが、浄光和尚は他出中とのことだ。
座敷の血を拭わせ、戸棚や手文庫など紛失物をあらためてみた。

「無い……」

手文庫の金も無くなっていたが、袋戸棚から伝来の系図も消えている。

「系図を盗むとは」

左近は合点ゆかなかった。

たしかにそこにあったはずだと思った。それも漠然とそう思っていただけで、確認していたわけではない。

去年の煤払いのときだったか、見た記憶がある。

もう八月だから、その間に無くなったのかもしれない。が、ほかの物と違って、系図だ。他人には用がない。

もっとも、穿った見方をすれば、他家の系図でも商売にはなる。

由緒正しい家柄というのは、この時代でも第一の信用になった。

江戸時代のはじめごろ、さかんに系図買いが行われた。というのは、浪人が仕官するために、他人の系図を買って、改姓したり、他人になりすますなどのことが行われたためだ。

乱世は実力主義だが、治世は血統や門閥が巾を利かすのは、いまも昔も変らない。

因みに系図買い——けいづかい、というのが盗品などを買いさばく故買屋の意味になったのは右の理由である。

この元禄も十一年になって、江戸初期の需要と同じ理由は考えられないが、世間に浪人は多い。主君の乱心や、御家騒動や、後嗣が無くて断絶する大名もある。急死の際、末期養子を認められなくな

って、改易の家も多い。家臣たちは路頭に迷うことになる。

だが、

（おれの家の系図など）

さしたる家系ではない。先祖に大した者はいない。左近には納得いかないことだった。

（あんな系図を盗むために、お美津を……あれほどムゴい殺し方をしなければならなかったのか）

それを思うと、ますます不可解だった。

（哀れなお美津……）

傷は何もない。飛び散った血を湯で拭うと美しいからだであった。

白昼だから、強姦されたとは思えない。初秋とはいえ、残暑で開放的になっている。犯されたのではないらしいことが、せめてだった。首を斬りとったのは、その死因に加害者の感情が入っていると思われるが、痴情怨恨に関るような女ではなかった。

（おれには出来すぎた貞淑な妻だったのに）

まだ二十二歳という若さ。嫁して四年になるが、子供がいないせいか、顔もからだも、誰が見ても十八、九としか思えない。首を失った遺体も、若い。それだけに哀れを誘うのだ。むごたらしい思いが、一層、胸を詰らせる。兇器は刀ではないようだと思ったが、あの冷たい役人が、

「斧ではないかな」

と、呟やいたのが、耳に残っている。

「まさか」

左近は、反射的に打ち消した。むろん、否定も肯定もする根拠があるわけではない。感情的反撥だった。最愛の妻を虐殺された哀しみと怒りが、無神経に、そうしたことを口にする男への抗議も含められていた。

斧で斬殺——いや斬首！

考えるだけでも、残忍すぎる。同じことのようでも日本刀の切れ味には、まだその酸鼻さが少ない。もっとも、これは両刀を常に帯する武士の社会が自己賛美で感覚をいつの間にかそのようにしてしまっているのかもしれないが。

左近は、妻の首に打ちおろされる斧の非情の音を聞いたような気がした。

不運は重なった。

その少し前、かれの屋敷の裏通りで、書類の束を拾った者がいる。

水菓子の担ぎ売り——西瓜売りの長吉だった。

もう季節をはずれて末成りになっている。水っぽくって買手がない。重い西瓜が売れないから、

「エー、西瓜、西瓜、末成りじゃねえ、元成りだよう、水っぽくない西瓜ア……ちえっ誰も返事をしやがらねえ、甘い西瓜だよう、もう来年までこんな美味え西瓜は食えねえよう、安いよう」

やけに張りあげる声も、もう一日中怒鳴ったあとだからかすれてきている。

裏小路を西陽に照りつけられながら歩いてくると、大きな榎の下にその書類の束を見つけたのだ。

紙縒りできっちり縛ってある。捨てたものとは思われない。まだ落して間なくであろう、汚れてい

ないから、拾う気になった。
「なんだか曰くあり気だぜ」
どうせ西瓜は売れない。木蔭に荷をおろして、そこに坐りこむと紙縒りを切ってみた。上の一つを被くと、ひらがなしか読めないが、字のかたちでそれとわかる。
〝借用証〟
(こいつア大変だ、落したやつは蒼くなっているにちげえねえ)
一、金参拾両也、というのが目に飛び込んで来た。
二両や三両なら長吉も借りることがある。三十両という大金など、かれなどに貸してくれるところがない。
あわてて、次のを見た。
こっちは十五両。その次のやつは四十二両。四枚目は二十五両……。
借用証文の文章は三下り半と同じようにきまっている。西瓜売りの長吉は、がたがた顫えだした。現金ではないから、これだけでは一文にもならない。が、場合によれば、金になる。第一、金額が大きいから、二分や三分の礼金を貰っても一、二年は食える。
「ひえっ、大した幸運が舞い込みやがった、こいつア末成りなんか売っちゃいられねえ。早速届けて、御礼をたんまり」
と思ったが、待てよ、と考えなおした。
「こいつを勿体ぶって借主に戻してやりゃ、二分、三分なんてことはねえ、半分、てえことは無えに

しても、三が一くれえは、出すだろうぜ」

三が一とは、三割三分のことだ。

総額が五百両ならその三分の一で百六十数両になる。百五十両はくれるだろう。

長吉は地道な西瓜売りをしているくらいだから、根は小心者だった。金額が少なかったら、そのまま、貸主か借主のところへ走ったろう。

（大金だから、めったな奴には相談できねえ）

西瓜どころではない。天秤も籠ごと西瓜もそっくり置きっ放しで走りだした。

その姿を塀のかげから見ていた者がある。

これは奇妙な服装をしている。

頭に繻子地のまるい帽子をかぶって派手な縫いとりのある広袖の唐人服。口のわきに泥鰌髭がたらりと垂れて、底の厚い、爪先のそり上った唐人沓。これも繻子地だ。

片手にたたみ床を、片手に印籠の化物のような高蒔絵彩色胴乱をぶら下げている。

子供たちが見たら面白がって、ついてくる奇異な服装だが、これは、先ごろから、橋袂や辻や盛り場で客を集めている唐人の耳垢とり。

胴乱の中には大小さまざまの耳掻きときれいな綿と揉み紙、垢入れなど七ツ道具が入っているのだ。

この唐人は、西瓜売り長吉が、西瓜をほうりだして走りだしたのを見ると、小路をぬけて町角の自身番にやってきた。

暑いから油障子は開いている。

「こんにちは」
変なアクセントで中をのぞく。
中にいた番太郎はぎょっとなって、
「な、なんだ、われは」
「へえ、耳の垢とりで」
「垢とりはわかってるわな、驚かしやがる。その唐人服を見ると、妙な気になるぜ、なんでエ一体」
「おしらせしたいことあるね」
「やいやい、唐人服を着てるなア、垢とり看板だろう、ちゃんと話せ、ちゃんと」
「この唐人ナマリが、服に似合うからね」
「なるほど、そいつも理屈だ。やいやい、御用繁多だ、話があれば、さっさと言いねえ」
根子間左近の屋敷から、この自身番が、もっとも近い。
旗本屋敷で起った事件は、町人たちの自身番とは関係ないが、むく犬が女の生首咥えて走りだしたという知らせは、ここへ最初に届いている。
旗本屋敷には入れなくても、御法を破る事件なら、町奉行所も町役人も関係してくる。刀を抜いて暴れるような武士は、たとえ身分があっても、治安のために町方で処置できる。現行犯には身分もくそもない。
この自身番でも、むく犬騒動で、目撃者や、むく犬を隠し飼いしていた家が町内かどうか、調べているところだった。

町の者たちが、あわただしく出入りしている。

そこへ変な唐人がのんびりした顔を突き出したので、吃驚するとともに、腹が立ったのも無理はない。

「へえ、すいかがあるね」

「何だと！」

「すいか、うり、水菓子だよ」

「西瓜がどうしたんだ、まさか今度はお犬さまが西瓜をかっさらったてエ話じゃあるめえ」

「大榎のところに、西瓜をたくさん、捨てていったね。その人、なにか書きつけ拾って、どこかへ行ったね」

二、三人が聞きとがめた。

このあたりで、大榎といえば、根子間左近の裏にあるやつをさす。

「大榎と西瓜売りだって？　妙な判じ物だぜ」

「そういやア、さっき、四季変りの長ノ次が、西瓜を担いで通ったようだ」

「とにかく、誰がいってみねえ」

元気な番太郎が、大榎に走った。間もなく、馴れない腰つきで、西瓜の荷を担いで戻ってきた。

「やっぱり、本当だ。こいつがほうり出してありやした」

「しょうのないやつだ。大分盗まれたかもしれねえな。まあ、早く見つけてよかった。あの馬鹿、どこへ行っちまったんだろ」

「どじょう髭はどうしたんで」
「あれ、いままで、そこらにいたが……」
「変った野郎だ。あんな妙な恰好して、耳の穴掃除だからな」
「へえ、ありゃいい気持になりやすぜ、あっしも一ぺんやって貰ったがね。女なんざ、あれで耳の穴をこちょこちょとやられると、丁度、あそこを指でいじくられているのと同じようだって」
「馬鹿野郎、そんな話はしていねえ。唐人なんかどうでもいいが、おい、そう言やア、変なこと言ってたな。何か書きつけを拾って血相変えて飛んでいったって」
「血相変えてだけ余計だ」
「いんや、そんな言い方だったようだ。とにかく、長吉の野郎を探さなきゃア」
「あの四季変りが、走るなんてえこたア前代未聞だぜ」
「ひょっとすると……銭でも拾ったか」
「銭じゃ走るこたアねえやな。小判でも拾いやがったか」
「だが、唐人の話じゃ、書きつけだとか」
「よっぽど金目なものにちげえねえ」
四季変りというのは、季節々々で商売変えする者のことだ。
西瓜の季節が過ぎれば、虫売り、冬になると炬燵のやぐら売り、大晦日近くになると暦売り、春には二月にひいらぎ売り、三月にはさくら草売りと、くるくる変る。
売るものは変っても、売手は、同じ場所なので、みんな顔馴染なのだ。

その長吉が見つかって、頭をかきながら、忘れた西瓜を頂きに自身番に顔を出したのは、日が暮れて暫く経ってからだった。

そのときにはあの浅草寺で恥をかいた同心が来ていたが、始終を聞いて、

「拾った書きつけとやらを出しな」

と、顎をしゃくった。

その書類（借用証の束）は、すでに長吉の手もとにはなかったのである。

4

元禄というと華美で豪奢という印象が強いが、後世から見ると、料理屋もまだ少ないし、したがって芸者などもいない。水茶屋も掛茶屋だけだった。芝居小屋だって塗込め許可になったのは享保も十年になってからで、のちの芝居小屋もむろん掛茶屋だった。

葦簀張りで風通しのいいところだから、横になることもできない。水茶屋女も、いいお客がくると、赤前垂をはずして、ちょっと奥へ、というわけにはいかない。

その代り、暮れる前に店をしまって、部屋を貸してくれる家にゆく。

蔵前の天王丁の薬師隣りに閻魔堂がある。その茶店にお辰という女が先ごろから評判になっている。年齢ははっきりしないが、十六か十七。ひょっとすると、十八になっているかもしれないが、雪のような肌に顔が小さい。全体的に小がらで、笑うと糸切歯が洩れて笑くぼができる。

閻魔堂前のお辰だから、

「閻魔のお辰」

と、みんなの口の端にのぼった。

見たことのない者には、閻魔のお辰とはまるで毒婦のようだが、かえってそれが評判になった。

「閻魔の女房は奪衣婆ときまっているが、あんな美い女だったら、娑婆へ帰ってくらあ」

その評判が評判を生んで、お辰の水茶屋は客の切れ目がない。

だから早じまいしても、店ではなんにも言わない。

お辰が前垂れと襷をはずして帰る道は、猿屋丁すじ。七曲りのほうへゆくと大名屋敷ばかりだが、町に沿って右へまがると甚内橋になる。

突き当りが鳥越明神で、その明神様と背中合わせのしもた屋がお辰の家であった。

お辰が帰ってくるのが待ち遠しいように蒲団を敷きもしないで、抱きすくめるのが、坊主頭だった。

「今日はどんなお客が来たかいの、すけべいなやつが多かったろう、おまえの尻をさわるやつがいたじゃろな」

ものもいわずに、一度放ち果ててから、あらためて乳房をまさぐりながら、ねちねちと妬くのがこの浄光和尚の癖なのだ。

「ええ、ええ、そうですのさ、みんな嫌なお客ばっかり」

お辰は調子を合わせる。

「ほんとに嫌な客か」

「ええ、でも中にはねえ、そりゃァいい男も何人かは」

「何人じゃ、二人か、三人か」
「ちょっと十人ばかり、ほほほほ」
「ちくしょう、地獄へ落ちればよい、わしが引導わたしてくれようわえ、十人、十人じゃな、それ一本、二本」
「あ、いたい」
「十人に惚れられて、好いたらしい顔をすると思うと、胸が煮えくりかえるわい、ほれさ三人目」
三本目の陰毛で、お辰はきゃッと殺されるような声を出す。
「お許し下さいませ、和尚さま」
「許さぬ。地獄じゃ」
「ああこわい。でも地獄にいっても、お辰は、閻魔さまが、可愛がってくれまする」
「えいくそ、それなら極楽へゆきやれ、ほれ、極楽行きやれ、ソレソレ」
つかめば千切り餅になるような柔らかい内股の肉おきを、両の手でささえるように、ぐいと開く。
そのときはもう、浄光のものは、男のいのちを甦えらせている。
客を妬くことで、浄光は、楽しみを倍加する。
浄光がお辰を茶屋おんなとして客のなぶりものにして平気なのも、むしろ、刺激を得るためだった。
お辰を最初に抱いたのは、霊光院の庫裡だった。
檀家の娘で、両親を亡くしてとほうにくれていたのを、庫裡で抱いた。青い果実の少し酸っぱいくらいのところがうまいと、かねがね言っていた生臭坊主だ。

充分、その酸いところを楽しんだあとで、水茶屋に出した。転んでもタダは起きない男である。月に二両もやれば、手括けの花にできる。それを遊ばしておくのは損だと思うのだ。浄光は吝いが、金がないわけではない。数年前から、寺は景気よくなっている。

(あいつのおかげだ)

寺領も増えたし、いい檀家もいて、懐ろは裕福だ。

(これで充分じゃ、寺は安泰だし、こんな美い女をおもちゃにしてもいいのだし、わしゃ、極楽じゃ)

人間は小成に甘んじているほうがいい、野望を持たないことだと思っている。

(わしはあいつとは違う。あいつほど、逞しくもないし、野心もないでな)

それにしても、あいつは……

浄光は学僧のころからの友人である、ある男の顔を思い浮べた。自分よりも鉢のひらいた頭をした、眼のするどい、鷲のような顔をした男——

(あいつには、前からかなわんと思っていたがな、あそこまで出世しようとはな)

お辰がうめいた。浄光はその口を吸った。なんという柔らかい唇だ。花びらを含むようだと思い、この唇に萎えたものをしゃぶられれば、どんな男でも生きかえる。

(墓の下から、生きかえるようなものじゃ)

そのときだった。

格子戸が開いたのは。

「お辰さん、和尚は来てお出でかえ」

聞きおぼえのある長吉の声だった。
浄光は舌打ちした。
「なんじゃ、また芯張り棒をかるのを忘れたな」
「だって……それだけ、早く和尚さまに逢いたかったんですよ。ね、あたしの気持、わかるでしょう」
「ふふ、うまい言い訳をしおる」
咄嗟の思いつきだとわかっても、浄光はそう言われると悪い気はしない。
「お辰さん、お辰さん」
長吉の声は、そんな痴話では待っておれぬというふうに、ひどく泡を喰っている。
しかたがなかった。やれやれ、と浄光は身を起し、お辰は濡れたそこを手拭いで拭った。和尚のものはもう萎えていた。
「いま行きますよ」
小女は外へ出してある。お辰は帯を急いで締めて立っていった。
いうまでもない。長吉はあの裏通りで思いがけなく拾った書類の相談に来たのだ。
浄光は最初は渋い顔をしていたが、借用書の束を見、中を見てゆくと、しだいに相好が崩れてきた。
「長吉、福が舞い込んだの、こりゃアいいものを拾うたぞよ」
「さいでござんしょう」
「なんと、ぜんぶで四百八十両。借用証文は十六通じゃ」
「するってえと、三が一では幾らになりましょう?」

「そうじゃ、まァざっと、百六十両か」
「そいつの半分」
「八十両じゃないか」
「そこらで手を打ちましょうや」
「どういうことじゃ。あて名の貸主に、いっそ返してやればちゃんと礼金は出すじゃろ、わしから話してやってもよい」
「和尚さん、シラばくれちゃいけませんや、よく御存知のはずで。和尚さんの手で、借主に返して貰って、三が一の金を……へえ、つまり、こういうこってさね、西瓜を一箇くれてやるから三つ切りにして、一つくんねえ、てわけで」
「……」
「で、げしょう、わっちじゃ駄目なんでさ」
「そうかの」
「押しがきかねえ、こういうことは、やっぱり和尚でなくちゃア出るものも出ねえ」
「あいにくだ」
「へ？」
「ことわる」
「そりゃまたどうして、ちよいと口をきくだけで、大枚、八十両になるんですぜ。八十両も」
「いやしくも霊光院の住職じゃ。さような汚ないまねはできんでのう」

どこまで本気か、浄光は、さも、汚ならしいもののようにぽんと、書類の束を長吉の膝前に投げだした。

「そ、そりゃ殺生だ。和尚。せっかく拾ったのが一文にもならねえなんて」

「タダで返してやったらどうじゃな、それがよろしい、功徳ですぞ。この貸主もわしは存じておるしな」

「へえ、そうかね、存じているから、タダにしろってのかね」

長吉はふてくされた。

「功徳かねえ。そいで、和尚のように、こういう美い女をモノにできるかねえ」

「こりゃ、何を言う」

「へえ、よござんすよ。和尚がこの話に乗ってくれなきゃ、それでもいい。わっちも覚悟があらア」

「なんじゃと、何を申す」

「つもってみねえ」と、長吉は、芝居がかってきた。「三十両借りたやつにしてみたら、十両で戻るんだ。その上、利息はパアだ。え、こんな功徳なこたアござんせんぜ」

「……」

「勝手にしゃがれだ。出るところへ出て、こう申し上げまさね。霊光院の浄光和尚はとんだ食わせ者の生臭坊主で、なんと三年前から、女犯の罪をおかしていますぜ、って」

「こ、こりゃ、大それたことを」

「大それたことをしているのは、生臭さん、そっちじゃねえか、え、そうだろう」

浄光は、頭から湯気を出していた。手拭いでぐるぐる撫でまわすように拭い、ついでにべろりと顔も拭った。

「ううむ、よかろう、しかたがない。乗ろう、引き受ける」

「へ、ほんとですかい」

「じゃがな、いやしくも、愚僧が左様なことはして廻るわけにはいかん、誰か人を頼んでやる」

「そりゃそうでしょうが」

「その費用がいるなあ」

吝な野郎だ、抜け目がねえ、やっぱり知足院隆光のともだちだけあらあ、と、長吉は顔を歪げた。

「その費用はどれくらいで」

「御法に触れることゆえの、誰でも、というわけにはまいらん、あと三十両だしなさい」

「げ、三十両も！」

それでもしかたがない。八十両が五十両になったが、拾わなかったと思えばそれまでだ。

だが、人間、吝なもので、三十両削られたと思うと、使い馴れた天秤棒と一荷の西瓜が惜しくなってくる。どうせ末成りで二分にもならないものだが、捨てることはない、と思いかえした。

御徒町へ戻ろうとして甚内橋までくると、青頭の子坊主とすれ違った。霊光院の子坊主だ。

「和尚さんのお迎えか」

「そうです、いましたか」

「ああ、いたとも、白粉の匂いをぷんぷんさせてな」

「珍しかないよ、いつもだもの」
「この坊主、いや、坊さん、おめえも、好き者のお辰に筆おろしをして貰いねえ」
「もう済んだよ。いい味だったねえ、トロリとしてさァ」
「ちえっ、口の減らない小坊主だ」
こんな小坊主をからかっている閑はない。天秤棒と西瓜だ。長吉は走りだした。
手紙の束を、あらためて見ていた浄光は、
「根子間さんが、こんなに大金を貸しているとは知らなかったのう」
「お旗本？　そのお方」
「うむ、御金奉行での」
「あら、御金奉行なら、お金があるのは当り前じゃないの」
「いんや、そういうものではない。せいぜい御家禄は、三百俵ばかりじゃ、百俵六人泣き暮しというではないか。新鋳の小判が評判悪いゆえ、米がずんと値上りしているしの、何やかや物入りをひくと、小判にして、二百両になるかどうかじゃろ、二百両で御金奉行の格式を張っていては、年に十両も残るかどうかだの」
「まあ、それで五百両も人に貸す金があるなんて」
「ふむ、どこからか、ナニしたのじゃろ、そこはそれ、金は天下の廻りもの」
「御金奉行なら、お上の御金を自由にできるのじゃないかしら」
「そうはいかん、御勘定奉行なら、まあ、そういうこともできるじゃろが、同じ〝奉行〟でもあの御

役は、下役が二、三十人いるだけでの、大したことはない」
小坊主がそこへ持って来た話というのが、その根子間左近の妻が変死したということだったのである。
「ひえッ、そりゃ本当か」
浄光、悪企みをしていただけに、思わず、腰が浮いた。借用証文が、ばらばらと膝から落ちた。

5

根子間左近が火付盗賊改役佐野与八郎とその与力に検挙されたのは、お美津の生首事件から中一日おいた次の日のことだった。
丁度、葬式をしている途中だった。
突然、役人たちが踏み込んで来たのである。
左近は寝耳に水で、殆ど、呆然となっていた。
かれらだけではない。同行していたのは同役の古参永井内蔵介と、御勘定所組頭、勝手方掛などで、そのものものしさは、むしろ彼の目にはおかしいくらいのものだった。
「根子間、困ったことをしてくれたな」
勝手方掛の大村藤内は、おどおどして、佐野の方を気づかいながら、
「こうなった以上、みっともない真似をすまいぞ」
「何を申されるのだ、一体、この有様は」

「往生際が悪いの」
と、佐野は与力に囁いた。
「手向うならば、傷つけてもかまわぬ、捕えよ」
突き放すような冷たい言葉だった。
「これは異なことを、お手向いにも何も、この仕儀は一向に解せませぬ」
「お疑いのことあればこそ、出張ってまいったのじゃ、吟味は役宅で致す、同行せい」
火付盗賊改役は、旗本に対しても、強い権限を持っている。第一身分が高い。
「とにかく、とにかく、仰せの通りにするのだ」
同役の永井がなだめるように言った。
日ごろ親しいこの男や組頭が来たのは、左近の逆上に備えてのことで、暴れさせぬためらしかった。
左近は特に剣の達者ということはないが、柳生新陰をひと通り使う。若手のうちでは使い手とされているが、元禄泰平の時代、人を斬ったことはまだ、ない。
「両刀を預かろう」
と、盗賊方の与力が言った。
「それは如何なものでしょうか」と、止めてくれたのが、永井の同輩としての厚意だった。「その必要はないでしょう、この男にかぎって卑劣な真似はしないはずです」
「おぬしが、責任をとるか」

意地悪く口をはさんだのは、大村藤内である。
「殺傷沙汰になってから、おぬしが切腹してもはじまらぬぞ」
大村は御殿勘定所の御勝手方掛で、金座のことなどでも根子間左近と折衝は多い。一昨日も、金座に同行出張している。
軽薄なところがあって、川向うに博奕に誘ったりする。頭はきれる方だろうが、人物としてあまり好きになれない男だった。
それにしても、直接的に感情を害したおぼえはない。
こんなところで、意地悪く出られようとは思いがけなかった。
「拙者はどちらでもよい」
左近は、心を鎮めて言った。
「お手向いは仕らぬ。何の嫌疑か知らぬが、お話すればわかることだ」
火付盗賊改役に検挙されるおぼえはない。何があったかしらないが、むしろ、妻の異常な他殺を調べてくれるのが先ではないか。
その左近の態度が、漸く、佐野与八郎の気持を柔らげたらしい。
「腰のものはそのままでよかろう」
と、頷いた。
火付盗賊改役屋敷に連行された左近は、あらためて、吟味役から、糾問された。
それは金座後藤庄三郎からの訴えによるもので、金座勘定ノ間新鋳引合戸棚「は之参」から、帳面

二冊紛失という届けだった。

はじめは、ただお届けというだけだったが、金座といえば、公儀御用の最も大事なところである。殊に、前述のように勘定奉行に荻原重秀が登庸されてからが金貨の改鋳が行われるときだ。その紛失した帳面というのは、新鋳分の元帳というべきもので、これがないと、今年になってからの古金から改鋳の数量がわからなくなる。

部分的なものはあるが、総合元帳がなければ調べようがない。

金山から採れたものは、金塊にして運んでくるから、その量目から、鋳金分を引けばいいが、古金、つまり慶長小判などを一般から回収し、その途中から、どんどん改鋳してゆく。

金銀貨幣の改鋳に就いて述べると煩わしくなるから省くが、要するに、品位をおとして、粗悪な小判をつくる。

江戸時代を通じて、もっとも品位の高いのは慶長大判小判で、これを改悪すれば、即ち、小判の数量だけは増える。

したがって、大蔵省は数字的に財政が豊かになる。いかにも奸悪な大蔵大臣が考えそうなことだ。

これが国民に嫌われるのは当然で、物価は狂騰し、みんな慶長古金を隠すようになった。

正(まさ)しく悪貨は良貨を駆逐したのである。

回収の実があがらないので通用年限を一年のばしたのも前に述べた通りだが、そんなふうで、古金から新小判への過程は、数量的に一定していない。

何しろ現代と違って大福帳式の記帳である。それだけでもあいまいなところへ紛失してしまったと

すれば、財政基盤までが狂ってしまう。
「何ということだ、何をおいても糾明しろ」
重秀は烈火の如く怒った。
が、後藤庄三郎は、
「その紛失いたしました時刻、丁度、御金奉行が、その帳面を調べていましたので」
と、余分な証言をした。いや、それが眼目だったのだろう。
「何やら、使いの者が参りまして、根子間どのは、帰られましたが、折悪しく、そのとき、てまえは大村どのと秤方のほうへ行って、量目調べに注意を与えたり」していて、したがって、根子間左近の帰ったのを知らなかった、と言った。
「金座で紛失した帳面、いずこにあるかな」
最初、吟味役は、やんわりと聞いてきた。
もとより、左近の知らぬことだ。はっきりと、そのことを言明した。が、鼻先で嗤われた。
「はて、知らぬとは面妖、其許の懐中へ入って、出ていったのではないか」
「何と仰せられる、左様な、左様なことを何として」
「さあ、何故かな、理由があることじゃろう」
どこまでも、与力は、かれの仕業と睨んでいる。
火付盗賊改役は町奉行と違い、権限が大きく、容疑者の捕縛にも手続きを多く必要としない。実績が多いし、それだけに迅速で、峻烈だ。確信があってのことであろう。

「だが、大村どのや後藤どのに黙って、帰った以上……」
「黙ってではない。一応挨拶した」
「御両所は、聞いていない、と申しておる」
「それは……何かの間違いだ、忘れているのだ。たしかに……いや、拙者の方も、気が転倒していたゆえ、一応、声をかけただけだったかもしれぬ、が、黙って帰るなど、左様なことは」
「徒らに時刻を移されるな」
と、脇から同心が口を出した。
「なぜに帳面を盗んだかは、この方には、ちゃんと調べがついているのでござる」
「ほう、これは異なことを。拙者もそれを聞きたいと思うていた。よしんば、うっかり、帳面を懐中にして帰ったとする。が、気がつけば戻そうし、第一、盗む理由がない」
「ある」
「ない！」
「そうかな、これでもかな」
同心はしたり顔に文箱の中から書類の束をとりだして与力に渡した。
与力は、この〝詰め〟を楽しむ心算だったらしい。鼠を追い詰める猫の残忍さである。
鷹揚に頷くと、それを仔細らしくひろげて目を走らせ、
「根子間左近殿、一金二十八両也、右金子拝借候者也、利息……ま、よかろう、どうだ、これに見おぼえがないと言い張るか」

「ない」
見たこともない文面であった。
与力はばさっと、書類を膝前に投げた。
「これでも、シラを切るか。いずれも、その方が貸し与えたものの証拠。金座から盗んだ金で高利貸をするとは、何たる奸策。二重三重の罪じゃ。このたびの帳面紛失も、御用にかこつけて金座に出入りし、盗み出して、おのが犯行を晦まさんとしたのであろう」
「左様な……全く、身におぼえのないこと」
「その証拠まで、否むか」
「知らぬものは知らぬ」
左近はあまりのことに上体を揺すって哄笑した。
「拙者は、人に金を貸したことなど一度もない。一度でもそんな身分になりたいものだ。第一、左様な金があろうはずはない」
「まだ言い張るか、盗人たけだけし。その借用証文は、お美津を殺した上で汝の屋敷から盗み出した者が、裏の大榎のところで落したのにちがいない。さる者が拾って……」
そのいきさつを説明するまでもないと思ったのであろう、与力は言葉を切った。
定町廻り同心に問い詰められた長吉が、浄光に預けてあるのを白状したのだ。浄光はお辰のところから一たん寺へ帰って、根子間邸に駈けつけようとするところへ、使いが来た。
これは同心の手先だった。

寺社奉行の認可がなければ、町奉行所の不浄役人は、社寺へ踏み込むことはできない。その許可を仰ぐ時間が惜しかったのだ。

手先は十手をちらつかせたのではない。一人の町人として、長吉の自白をつげただけである。

浄光は、こうなったら、隠すより、バラしたほうがいいと思ったのだろう。

「実は、あの男に妙なことを頼まれましてな。それ、どうせ根子間どののところに葬いに行く、そのとき、そっと返却してやれば、根子間さまも喜びなさるじゃろと思うてな」

巧言で言いつのった。

長吉の話と、食い違うが、ともあれ、この借用証文の束は、戻ったのだから、浄光も長吉も、追及しないことにした。

長吉は字が読めないから、和尚に頼んだということで済む。いまとなっては、長吉は和尚の詭弁に感謝するばかりだ。

「面妖だ。その証文の借主に当ってみられれば、判然とするであろうが」

「そうはいかぬ」と、与力は首を振った。

「こちらでも、その手はうってある。が、いずれも、この借主どもは江戸には居らぬ。死んだ者や行方不明の者や……」

十六通が一つも反証を得られない状態だという。

「それこそ、面妖。いよいよもって、不思議と思われぬか」

「それは……」

「拙者の屋敷から紛失したものといえば、妻の首級と、三両二分ほどの現金、それと我が家の系図のみでござる」
「では、これは何とする」
「偽筆じゃ、贋りだ、拙者を陥れようとする策謀であろう」
絶対権威には〝間違い〟というものがない。あってはならない。たとえ間違っていても絶対に権力はおのれの非を認めないのである。
よんどころないときでも、それは単なる〝行違い〟ということで済ます。非を認めないから、詫びもしない。
それが権力の正体だった。
この非道なことも、
「御政道に信頼を失わせてはならぬ」
という便利な言葉で押しきられてしまう。
(——よくも仕組んだ……)
左近は唇を噛みしめた。
何という不運であろう、妻は虐殺され、その身は、御用金横領に問われている。
旗本としてはむろんだが、侍として盗みくらい恥辱はない。
「何と申されようとも、知らぬ者は知らぬ」
左近は頑として言い張った。

「――責め問いせねばなるまい」

呟やくように与力は言った。これはわざと聞かせて、自白させようとしたのだが、左近の気持は変らない。

「如何様なことをなさるも、知らぬものは知らぬ」

吟味役もここまで言い張るのには、それだけの理由があるのだと思ったが、一方では、証文の方をもう一度、徹底的に洗い直していた。

証人がでてこず、自白がない以上、あくまでも推測であって、処分も何もできない。

拷問という手はあるが、これはお目見得以上の武士にはめったに使えるものではない。

その日は一度、家へ帰されたが、これは、容疑が霽れたわけではなく、もう一度、屋敷内を捜索する必要があったからだった。

もう葬式も何もなかった。

初夏だから、しかし、死体の腐爛はひどい。近所の者で形ばかりの野辺送りを済ませた。

（お美津、許せ）

武士として嫌疑をかけられるだけでも恥辱だ。

切腹したかったが、死ねば、濡衣がそのまま、かえって真実になってしまう。

「死なぬぞ、生きて、必ず、この汚名を雪いでくれる」

お美津を虐殺した者を捜しだして怨みを霽らしてやらねばならぬ。

しかし、その見えぬ敵の手は周到な網を張りめぐらしていた。なんと呆れたことに、

「たしかに、拙者が借銀いたした」
と、証言する者がでてきたのだ。
神田明神下の童仙方地内、蔵六店に住む、多部源次郎という浪人だった。むろん左近は見たことも、口をきいたこともない。
「拙者が書いたに相違ない」
対決させられてからも、その源次郎と名乗る浪人は、はっきりと言った。
金額は十二両。
あの借用証文の束の中で、もっとも低い金額である。借用の理由は簡単だった。
「背に腹は変えられぬゆえな」
と、自嘲気味に言った。
病気の女房がいて、薬代にかかる。労咳で長患いすれば、身上つぶすといわれている。浪々の身では、収入もない。楊子削りや、手紙の代筆したり、そんなくらいでは、日増しに騰る物価に対処してゆけなかった。
そういう多部の生活が、取調べにあたった者には、いかにもリアリティを感じさせたのである。
それでもしかし、左近にはおぼえのないことだった。
「嘘言を申しておるのだ。あのような者、逢ったこともない」
と、申し立てたが、もう佐野与八郎は耳をかさなかった。
左近は支配の勘定組頭の屋敷へお預けとなった。

いくら容疑が濃くても、自白しない以上、左近のように身分があれば、牢屋へほうりこむわけにはいかない。

改めて勘定奉行、町奉行、御目付立会いでお白洲がひらかれることになる。町奉行が加わるのは、多部が浪人者で町奉行取扱いになるからである。

「大きに迷惑だ」

組頭の杉岡弥太郎は、面と向って、ずけずけ言った。

「おぬし、よくも武士の皮をかぶっていられるな」

「勘定所一同の迷惑を考えたら、洒ア洒アした顔で生きていられぬものよ」

「拙者は無実だ」

「そうかね。無実でも、御疑いを蒙ったというだけで、恥と思わぬか。武士の恥とはそういうものだ」

「――誰かが」

と、左近は呻いた。

「企んだのだ。拙者を陥れるために」

「かもしれぬ。としても、だ、そういう目にあうのが、つまり、人徳がないからだ」

「……」

「美人の女房を持ったと思って、いい気になっていたからだ。それで憎まれたのかもしれぬが」

「……」

人徳がないと言われれば返す言葉がない。左近は沈黙するよりしかたなかった。

その夜、左近は脱走している。

6

軟禁だったから、逃げようと思えば、大して難しくはなかった。夜半だった。犬の遠吠えが聞えた。長く尾を曳いて、泣くような訴えるような声である。夜半の静寂に聞く遠吠えは妙にもの哀しい。

根子間左近は身を起した。反射的な動作だった。が、考えてみれば、お預けの身である。両刀はとられている。

左近は、迂闊さに、苦笑した。

(もっと冷静になるのだ、左近)

おのれに言い聞かせた。

(今日から、直参根子間左近は浪人になったのだ。気をつけろ、誰もおまえには、味方はいない)

小禄でも徳川直参の家に生れて、その制度の中で生きてきた者が、明日から、無禄の浪人になる。それも、追われる者として。

まるで、別の世界に入るのだった。軽輩でも、役料のない小普請組でも、とにかく、家名についた持高——家禄があれば、生きてゆける。

それは一からはじめて、おのれの力で生きる道を見つけてゆかねばならない者と比べて、なんと気楽なものだろう。気楽だったことだろう。

いまさらのように、痛感するのである。

人間は食えなくなったとき、はじめて、生きてゆくことの意味を考えるのだ。

（いのちあるかぎり……）

と、左近は闇の中で眼を光らした。

（直参根子間左近にかけられた恥辱は霽らさずにはおかぬ）

また犬の声がした。

前より、近くなったようであった。

野良犬は見つけしだい、中野と大久保のお犬小屋に収容される。もう、市中には野犬などいないはずだった。

飼犬は放し飼いにできない。その犬は深夜に走り廻っているのか。

左近が襖に手をかけたとき、また聞えた。

こんどは、ずっと近い。大きな声だった。

（失敗った、あれでは熟睡している者でも、眼が醒める）

左近は身支度しながら思った。

座敷牢などない。お預けは、身柄拘束ということで、つまり支配頭である杉岡に全責任を負わせる。

泰平の時代の罪人の取扱いは難しい。殊に直参は幕府にとって、いわば身内だから、簡単には伝馬町の牢にぶちこむなどということはしない。

伝馬町の牢内も、百姓牢、女牢、揚り屋、揚り座敷と身分性別によってわけてあるが、直参の場合の扱いは慎重だった。

両刀をはずさせただけで、普通の屋敷に軟禁状態というのは、それだけ、本人の身分の尊重と、自覚にまつわけだ。

ここから脱走すれば、ただちに叛逆罪になる。

旗本にかぎらず、武士はまる一日、無断で家をあけただけで罪になる。二十四時間、居所不明というだけで、切腹が常識である。

気楽そうに見える武士社会も、こういう拘束を考えると、楽なものではない。

(逃げてやる。どこまでも逃げて、お美津を殺したやつを捕えてやる)

そいつと奸計を企んだ奴は同じにちがいなかった。

このままでは、御目付、勘定奉行など立会いの二手掛り三手掛りの糾問でいやでも罪を認めさせられてしまう。

着物を着、帯をしめ、足袋を穿いた。あとは忍び出るばかりだ。

御徒町の屋敷も看視下にあるが、忍び帰って差し替えの刀を盗み出す。

お美津に買ってやった髪のものなど、形見に手放したくないが、当座の金をつくらなければならなかった。

御用金横領容疑の直参が脱走ということになれば、火付盗賊方はむろん、御目付、御徒目付から町奉行所、町役人、すべてを敵にまわすことになる。

御朱引内の潜伏も困難にちがいなかった。

(やるぞ、やり損なったら、斬死するだけだ、死人の山を築いて立派に立腹切ってやる)

左近は闇の中でふてぶてしい笑いを洩らした。人間は常態でいるとき、おのれの真の顔を知らない。絶体絶命に立ち到ったとき、はじめて、真実のおのれの顔が出るのである。

おのれの顔が、かつて知らなかった表情に歪むのを左近は感じた。

犬の声がまた、静寂を破った。近い。塀の外に来たようだ。

どこかで、戸を開ける音も聞えた。やはりその犬の声に眼を醒まされたのであろう。

(悪い……)

不運がつきまとっている。

案の定、廊下に足音がした。

家人が起きだしたのだ。軟禁とはいえ、万一を慮って、下役が二、三人泊りに来ている。

それでも責任者として、杉岡弥太郎は気になったのだろう。刀を下げて、廊下へ出てきたのである。

手燭を点して、左近の寝ている部屋へやってきた。

その足音が近寄るのを知ると、左近は、ふたたび、蒲団をかぶった。

「……」

凝ッと息をひそめる。次の間に入ってきた。足音が止った。

寝息を聞こうとしているようであった。

左近は、鼾を聞かしてやろうかと思ったが、いまからではわざとらしい。狸寝入りをかえって見破られる。

蒲団を頭からかぶって、息をころした。

すーっと、唐紙が開いた。
手燭をかかげて見ている。
あっ、と思った。夜着を脱ぎ捨ててある。衣桁にかけたままだった着物をすでに着こんだのだ。
それを見破られたら……。
(見るな、見ないでくれ、そのまま、戻ってくれ)
と、念じたとき、足音が荒く、づかづかと蒲団のところに来た。
「左近!」
はげしい声とともに、ぱっと、蒲団をまくられた。
「ぬ! やはり、きさま」
すっかり身支度した姿が、手燭の明りのもとにあらわにされた。とたんに、
「御免!」
左近は、はね起きた。
「うぬ! うぬは、逃げる気か」
「頼む、見逃せ」
しかし、これは御預りを申し渡された杉岡には無理な相談だった。
かれは私情をさしはさめない。重大な落度になる。
「逃げると斬る」
刀はしかし、左手にさげたままだ。

刹那、左近は枕を摑んで投げた。杉岡の顔を狙ったのだ。
「何をする」
思わず顔をよける。
枕は、かたっと手燭に当った。杉岡の手から手燭がすべり落ちた。
左近は杉岡の腕に飛びついた。抜刀させないためであった。
落ちた手燭が足もとで炎をあげている。二人は揉みあって、どうと倒れた。左近は頬げたを殴りつけ、さらにひるむところを眉間に一撃を加えた。
ぐたりとなった杉岡の手から刀を奪いとる。
「ぬ！　きさま、おれを斬る気か」
そこまで考えていなかった。が、そう言われると、反射的に、左近は、刀に手をかけていた。
こういうときの心理は、解明し難い。左近は抜き打っていた。
身を起そうとしていた杉岡に向って。
刀が鞘走ったとき、しかし、ひるむものが刃先を狂わせた。刀は杉岡を掠めて、蒲団を叩いていた。
手燭を燃やす炎が、杉岡の恐怖にひき吊った顔を描きだしていた。
左近は身を翻した。次の間へ走り込み、廊下へ出ると、足袋のまま、庭へ飛びおりた。
かれが走り去るのを見送っている眼が、しかし、庭樹の間にあったのである。その影は、石燈籠のかげに向って、小さく口笛を吹いた。のっそりと、黒い影が身を起した。

それは犢ほどもあるあの大きなむく犬だった。

「来い」

立ち上った影は、犬を促すと、身軽く、廊下へ飛びあがり、左近の脱け出た部屋へ入っていった。

刀はとられて、無腰だし、もう追っても無駄だと思ったのだろう、手燭の火を消していた杉岡は、入って来た人影にぎょっとした。

「左近か」

思いなおして、戻ってきたのかと思った。

「……」

それに返事を与えない影である。杉岡の眼は消えかけた火明りに、大きなむく犬を見た。

「あっ！」

それが、しかし、今生のものの見おさめだった。

凄まじい鉄のかたまりが落ちてきた。その兇器が、手斧だと知る前に、杉岡の首は、ざくっと、太枝を打ち落すように、胴から放れている。斧の一撃だった。

火は消え、血汐が凄まじく噴きだすさまは、闇がかき消してくれたのが幸いだった。

「それよ、黒主」

斧をふるった男は、むく犬を促した。

さっと走り寄ったむく犬は、べろべろと血泡を舐めると、杉岡の首を咥えあげた。

その間に、血斧をぶら下げた影は、何事もなかったような顔で庭におりている。

左近が去って開けたままになっている裏木戸から、その男とむく犬の黒主は風のように出ていった。

7

同じ畜生でも、はじめから扱いは大分違っていた。江戸の町には野良犬がもともと多かった。猫もやたらと子を生むが、猫の方は貰い手がある。女は大体、猫好きだから、引きとり手が多い。

が、犬は、よほどの家でないと飼えなかった。大きさが違うせいもあったが、食いものも犬のほうが負担が大きい。

武家では、現代と違って、番犬の必要がない。みんな刀槍を持っているからだ。その上、番屋がある。

町家の方は裏店（うらだな）では飼えるスペースが少ない。どうしても富裕な商家ぐらいになる。が、そうした家には使用人が多く、何かことがあると、出入りの仕事師たちが肌脱ぎになって飛んでくる。

そうしたことが、本邦であまり番犬を発達させなかった所以である。鷹野には使うが、その程度では知れている。

したがって、犬はせいぜい少年たちの仲のいいともだちくらいのものだった。

野良犬は打ち殺しても、以前はほめられこそすれ、罪にはならなかった。それが一転して、下にもおかぬもてなしをしなければならなくなったのだから、江戸っ子たちにとって不快はこの上ない。

「おい、聞いたかえ、またむく犬が、生首を咥えてお成道を走ったそうだ」

「ああ、聞いた。こんどはな、駿河台あたりのお屋敷から出てきたって話だぜ。なんでも火ノ番が見

たそうな」
「やっぱり、女か」
「なアに、今度は男だ。それもよ、なんと……」
そのお成道に近い、こんにゃく丁の般若風呂である。
江戸っ子は朝湯が好きだが、今日は男湯のほうが雇の調子が悪いからと、そのすじにはお目こぼしを願って、女湯に男たちを入れた。
いつになく話がはずんでいるのは、女たちを意識しているからだった。
たまに、こういう混浴のサービスをしないと、客がほかにゆく。
混浴禁止はいうまでもないが、そうシチッ固いことばかり言っていると、みんな欲求不満になるから、しめるところはしめても、こういう程度のことは大目に見る。
むろん風俗取締りの役人たちは袖の下になるのである。
「その生首がな、おめえ、今朝、どこで見っかったと思う」
「どこだ、まさか、小塚ッ原じゃあるめえ」
「三尺高けえ獄門台に乗っかってたか」
「よッ、あんまり大きい声を出すんじゃねえ、その生首さまは、おめえ罪人じゃねえのだ、れっきとした……」
ここで、いまさらのように、流し場を見まわした。幸い旗本もお国侍もいない。月代のむさい浪人が一人いるだけ。

「御直参だわな」
「ひえェ、そいつは驚き」
「八万騎が一騎減ったか。七千九百九十九騎になったわけかえ」
「馬鹿野郎、七万九千九百……そんなこたアどうでもいいや、旗本八万騎ってェがね、実際の数は三万くれえだっていうぜ」
「やいやい、八万でも三万でも、こちとらにゃ関係ねえや、その首がどうしたってんだ」
「おっと話が少し外れたようだ。そいつがおめえ、今朝方よ、忍が岡の大仏前に転っていたというじゃねえか」
「へえ、そいつア驚き」
「大騒ぎだあな、御普請の衆が見っけたそうだがね……」
早飯、早糞、早風呂に早耳を自慢したいのが、この手合だ。
忍が岡——上野の山内では、先ごろから大工事が行われている。
東叡山寛永寺で、根本中堂、文殊楼、仁王門、山王社などを、新築あるいは移転し、丘を削って道をひろげている。すっかり面影が変るらしい。
この上野の入口は不忍池側の坂ののぼり口があいているだけで、びっしりと町家が建っていた。
平永町、八軒町、六軒町、車坂町などの一部を取毀し、柳町、黒門町をすっかり取払って、この町は神田の方へ代地を与えられ、あたり一帯、広場になるらしい。
その大工事の中に、あのむく犬が直参の生首を咥えこんだらしい、という。

らしいというのは、夜半のことで目撃者が少ないからだ。
辻番の者や、御普請場宿直役人が目撃している。
「遠かったので、よく見えませんでした」
仔細を聞かれると、みんな、その程度にしか答えない。
はっきり見たといえば、なぜ、すぐ報告しなかったとか、何だかんだと、うるさくなるからだ。
そのくせ、面白がって、みんな噂を吹き流している。
「だがよ、そのむく犬は、一体、どこのやつが飼っているのけえ」
「きまってらな、そんなおめえ、物騒な犬に飼い手があるもんけ。野良犬だろうぜ」
「野良犬だったら、とっくに見つかって、中野行きになるだろうが、そうでもねえところを見ると、ひょっとして誰かが飼っているんじゃねえか」
「飼ってたら、なおさらだ、人別帳、いやさ犬別帳でわからアね」
「そいつもそうだ、そういやア猫の宗門帳が出来たって話ア聞かねえな」
「猫ア、いいんだ」
「なぜ、要らねえのだえ」
「なぜだか知らねえ」
「ちえっ、この野郎、猫だって、おめえ飼猫ばかりじゃねえ、猫のお囲いが出来たのを知らねえか」
「知ってらアな、吉原田圃だろう」
「そうだ、もう一万匹くれえ集っているというぜ」

「そいつァ面白え、犬はうるさくって、あわわわ……ま、お猫さまが一万匹といやア面白え、三毛やブチや黒や白や、玉や、お梅や……」
「お猫さま見物といやア、嬶アをだませるわな」
「タダ見物じゃいけねえ、食物を持っていってやらにゃいけねえよ。マタタビとか魚とか」
「大伝馬町の姫まんじゅうに、北八丁堀の朝顔せんべえがいい」
「お猫さまが喰うか」
「なアに、吉原廓は揚屋町の雛菊がな、えっへへへへ、好物だとよう」
「置きやァがれ、やい、朝から帆柱おっ立てやがるな」
流し場の話は、どこまでもひろがって尽きない。
そんなお饒舌りを聞いているのかいないのか、黙々と、垢を繰りだしていた浪人者が、ざくろ口へ消えた。
「おい、あの御浪人、十日分くれえの垢を削っていたぜ」
「よしな、声が高けえ」
「知り合いか」
「じゃねえが、たしか、明神下の蔵六長屋にいるという話だ、楊子削りで」
「なるほど、だから、垢削りも御丁寧なわけだ」
「よしねえって。世にあるときは、ちゃんと御右筆でもやってたらしいぜ、滅法、筆が立つそうだ。どうでえ、女にやる恋文でも書いてもらっちゃア」

聞えたはずだが、聞えないふりで、多部源次郎はあがってゆく。
痩せた肩が、うしろから見ると、殊にいたいたしい。
「へえ、恋文をねえ、だがよ、あの様子じゃ大したこたアねえ。だってろくなものは食ってねえんじゃねえのか。大して稼ぎにならねえのさ」
源次郎は、それでも久しぶりの風呂で、さっぱりした様子だった。
明神下の浪宅の方へ帰るのではなかった。お成道を車坂の方へゆく。
すっかり町家が取払われて、おそろしく広々としたところに、材木や瓦や、蓆や、工事の道具が置いてあり、それを片附ける者たちが威勢のいい声をあげていた。
もう工事は九分通りに終っているという。
山内にはまだ庶民は入れないが、源次郎は、そういうきらびやかな楼閣に興味はなさそうだった。
車坂から、六間町、屏風坂下で、通りかかった納所坊主に聞くと、すぐわかった。
そこの西光寺門前を黒鍬町にそって東へぬけると、そのあたりでもう猫の啼き声が聞えるという。
その通りだった。広大な大名の下屋敷の間の道から、吉原田圃が見えた。
四、五丁の広さに、ずっと虎落垣をめぐらしてあって、それは二重になっているようだ。その内側に田圃の小溝を活用した濠がめぐらしてあるが、小者たちが走り廻っているのは、泳いで渡ってくる猫を捕まえては、お囲いの中に入れているのだ。
犬ほど乱暴ではないから、まだ始末はいいだろうが、何しろ小さい。垣の目からちょろちょろ洩れるし、高いところへよじのぼるのが巧いから、濠の水で堰きるしかない。

中野の犬小屋は十六万坪とか、一里四方とかいうが、ともかく、それくらい広ければ、どうにでもなる。食いものはあるし、そこからよそへ出る必要はない。

が、この犬猫小屋は、それに比べれば、ずっとせまい。

濠の幅は、一間か一間半くらいだから、あぷあぷしながらも猫かきで泳ぐやつもいる。

濠の一間向うには申し訳程度に三尺ほどの板囲いがしてあり、そこにのぼって外の世界を眺めているやつが多い。

濠の畔まで、おりてきて、あきらめきれずにまわりをぐるぐる廻っているやつもいる。ニャオニャオギャアギャア、万余の猫が競いあうのだから、その喧しいことといったらない。

少し小高くなった畑には、多勢弥次馬が集って、見物している。

「居るわ居るわ、なんと大変なものじゃ、あれが、江戸中の全部のお猫さまかえ」

「いんや、持主のないお猫さまだ。毎日、二、三百匹ずつ増えているそうだ」

「鰹節が大変じゃろな」

「鰹節やマタタビを食わせてた日にゃ、お賄所が潰れてしまわアね」

五、六十匹入り乱れて喧嘩になったと見ると役人が素っ飛んでいって、ぱっぱっと、何やら粉を撒く。

これがマタタビらしい。よほどのときでなければ、使わない。

傷つかせたり、死なせたりすると、お咎めがきついが、これだけいれば、生れくるものも多いから、員数を合わせて、こっそり捨てるのかもしれない。

「お犬小屋の方は、お犬奉行がいるという話だが、お猫奉行というのも出来たのかえ」
「さ、そいつは聞かねえ、お猫奉行にゃ、女のほうがよいわな」
道すじには、この人出をあてこんで、饅頭を売ったり、握り飯を売ったりする者が出ている。
結構いい商いになっているようだ。
十徳姿の、旗本の隠居とでもいった姿の初老の男がもっともらしい顔で説明している。
「お犬さまと称うて、お猫さまとは、なかなか申さぬが、いかんな、左様な不心得ではな」
「へえ、そうですかねえ、なんだか、お猫さまなんてえと、まるで、嬶ァにお尻の字をつけるみてえで」
「それはそうじゃ、昔は猫と呼ばずに、ネコマと呼んだぐらいじゃ」
「そうでんね、それがわっちにゃわからねえので、どうしてネコじゃなく、ネコマなんで」
「由来はいろいろにある」
そこで、腰の瓢から、蓋についで飲んだ。
「ネコはだいたい、寝るのが、好きじゃ。または鼠を好きじゃ、鼠もネ、寝るもネ、されば、寝るのを好む、ネコノム」
「へ？　ネコノムが、どうしてネコマなんで」
「わからんやつじゃ、ネコムが、訛ってネコマとなった」
「へえ、なんだか、妙ですね」
「別の説もある。鼠をとるのに、凝っと待っているからな、鼠待ち」

「それじゃ、ネマだ」
「いや、鼠の子を待つ、ネコマチ、ネコマ」
「そうですかねえ」
「昔から、猫の大きいのを猫股といったな、ネコマタ、小さいのをネコマ」
「するてえと、ネコマが大きくなると、ネコマタになるので？」
「そういうことになるな。また異説もある。犬の種類に、高麗犬というのがある。社前の石造りのがあるな、狛犬とも書く、あれが寝たる姿が、猫に似ているゆえ寝狛で、ネコマ」
こういう詮索をはじめると、いくつでもでてくるらしい。
そんな話を、多部源次郎は聞くともなく聞いていると、隠居はちらちら、かれのほうを気にしている様子だったが、
「やれやれ、話しくたびれたゆえ、帰って昼寝でもしますかの。ほい、御免」
瓢をぶらさげて、群衆の中をどこかへ去った。
「妙な爺さまだ」
「爺さまでもねえ、まだ五十そこそこだろうぜ。あの顔は、どこかで見た顔だが、思いだせねえ」
「そうかえ、あっしもそう思っていたんだがね。たしかに、どこかで、一度あったような気がするんだが」
「思いだせねえ、ええと……お旗本の御隠居らしいがね、そういうお方とは、近づきがねえ」
「あっしもそうなんだ、まてよ、植木屋のおやじでもねえ、髪結いの金八でもねえ、名主の、でもね

え、呉服屋の……」
「そいつだ」と、もう一人が手を打った。
「呉服で思いだした。妙ちきりんな、ほら、筒っぽの唐人……」
「ちげえねえ、あれア、耳掃除の唐人だ」
唐人の耳の垢とりが、どうして、あんな隠居に変装したか、一体どっちが本物なのか。思いだした二人も、しかし、あまりに違いすぎたので、やっぱり別人だろうぜ、と思いなおした。

8

その夜、この猫小屋が解放されている。
番人たちが、夜廻りにも疲れたころを見はからって、二十数名の者が、どこからともなく金杉の稲荷の境内に集ってきた。
お囲いをつくるのは、丸太の支柱を打ちこんで、そこに板を張ったものだが、このお猫さまたちの食事から、保護から、野良猫を集めて来たのを、まず、一囲いに入れて、毛色、推定年齢などを記して、数を合わせる。
そのための人数も必要だったので、数カ所に仮小屋が出来ている。
お犬小屋の方は、お犬奉行がいるくらいだから、塗込めの御休憩所も出来、厩舎もあり、死犬のためのお寺も出来ているが、こちらはまだ、そこまではいかない。
が、とにかく、公儀の仕事だから、材料を吝しまない。

その余った材木が山のように積んである。
二十数名の男たちは、服装はまちまちだが、活動のし易い、たっつけ袴で、足ごしらえも厳重だ。両刀帯している者もいれば一本刀の者もいる。
いずれも共通しているのは、頭巾におもてを隠していることだった。
闇の中に双眸だけが光っている。
「よいな、かねて申した通り」
「……」
「手早くやるのじゃ。虎落垣は切らずともよい。猫には広いくらいの隙間じゃ」
一同は無言で頷いた。
材木に忍び寄ると、それぞれ、二間もしくはそれ以上のタル木を担いで、お囲いの外へ来た。
竹矢来の下から突っ込む。
濠を渡して橋をこしらえてやるのである。何しろ広いところだ。かれらは材木を担ぐと、一ト走りして、大体、十間置きぐらいに橋を渡してゆく。
一人で三度ほど往復したろうか。六、七十本の橋が渡されたわけだ。
用意が出来ると、一カ所を切り破って、数人がそれを渡り、お囲いの中に飛び込んだ。
異様な猫の騒ぎに番人たちが気がついたのは、それから間もなくのことである。
「何だか、今夜は変だぞ、騒ぎすぎる」
酒を飲んで小便博奕していた連中も、外へ出て来た。

「わっ、猫が……」

酔眼を瞠った。

お囲いのうちにいた猫たちが、ニャアニャア嬉しそうな声を出して渡ってゆくではないか。

お囲いの外の数カ所で、火が燃えていた。

その煙りが流れてくる。それはマタタビを焼いているのだと知ったのは、異常な猫の行動に、気がついてからである。

「お囲い破りじゃ、捕えろ」

お小屋頭は、狂気のように喚いて、刀を抜き放った。

番人たちも、酒の酔いも醒めてしまって、走りだしたが、もうそのときは、大好きな匂いにひかれて、数千匹の猫がお囲い外に出てしまっていたのである。

「捕えるんだ、一人でもいい、下手人を一人でも、見つけろ」

一体、何人いるのか、何のためか、まるきり見当もつかなかった。ただ、お囲いを破られて、猫を逃したという、落度の重みだけが、かれの念頭にあった。

「お頭、いませんぜ」

「いないことがあるか、捕えろ」

「お頭、それより、お猫さまを捕えるほうが」

「そ、それもそうだ、一匹も逃すな、一匹逃しても首が飛ぶぞ」

気狂いのようになって、吉原田圃を駈け廻る連中を、金杉稲荷の境内で、その下手人たちは面白そ

うに木立の中から見守っていた。
「そろそろ、消えろ」
首領格の男が命じた。
「連れ立ってはならぬ。別々の道をゆけ」
「は」
「充分に気をつけるのだ」
「はい」
みんなが散るまでそこにいてから、その男は、一人残った者を振りかえった。
「よいな。わしらも行こう」
「はい、提灯を」
「点せ」
硫黄の臭いがした。燧石から付木を燃やして、蠟燭へ移す。ぽっと提灯の紋どころが浮び上った。
珍しい紋どころである。
いわゆる星型であった。
二本線になっていて、鉄道ペンでひと書きに星を書くと、この紋になる。細かく言えば、重なるところは、前の線を消す。
これは本邦では現在でもあまり見かけない。英米では Pentagram（五線星形）と呼ばれている。
そのころ、神田明神の境内では、二人の男が、間合九尺をとって睨み合っていたのである。

多部源次郎は、夜闇にまぎれて訪れた男の顔を見ると、格別、狼狽もしなかった。
「いずれ、来ると思った」
と、静かに言った。
「ここでやるかね、それとも外へ出るか」
たてつけの悪い格子戸に立ちはだかるようにして、源次郎は言った。
「どちらでもいい」
声を荒げなかったのは、根子間左近も、近所の者が起き出すのを慮かったのである。
意外に源次郎が悪びれないのが、意気込んできたかれにしてみれば、ちょっと拍子抜けのした感じだった。
大声をあげさえすれば、長屋の者が起き出す。
壁もうすいし、穴があいている。七軒長屋の端で泣く赤ん坊の声が、反対側の家まで聞えるようなところだ。
長屋は、明神様の土手にへばりつくようにして立っている。崖が長雨でゆるみでもしたら日当りが悪くて腐った板屋根は、三方のヘギ板のように、もろく潰れるだろう。
源次郎が、この夜の訪問者を、一足も入れようとしなかったのは、ただ汚なくてせまい家というだけではなく、病妻のことを考えてのことだろうと思った。
長患いの妻に心配をかけたくない、思いやりなのだろう。
だが同情はしておれない。

（この男の証言で、おれは一生拭えぬ汚名を背負うことになったのだ）

怒りが、胸に沸っている。

「明神様にゆこう」

源次郎は先に立った。

「裏階段でね、すぐ上だ」

刀を右手にさげてゆく。石段をのぼってゆく。背中を見せて平然としているのだ。斬ろうと思えば、一打ちである。

左利きなのか。

あるいは、特殊なワザを持っているのか。

どちらにせよ、左近は、しかし怒りにまかせて背後から斬るつもりはない。

杉岡の屋敷を飛び出してから、まる一日、かれは谷中の感応寺墓地や日ぐらしの里のあたりで過した。

一度、屋敷にひきかえしてからと、思ったが警戒がきびしくて近寄れなかったのである。

墓地で眠り、夜が明けてから、目立たぬように、歩いた。いかにも、非番に、郊外の秋色を愛でに来たようなそぞろ歩きで時間をつぶした。いい天気だったし、発句の会らしい老人たちの姿も見えた。その道すじに散り残った夾竹桃の花が色あせて、埃りをかぶっているのが、なぜか印象に残った。

今度こそ、見つかれば、いのちはない。遠島では済むまい。切腹を許されれば有難い方だ。

宵月が落ちてから、かれは舞い戻ってきた。谷中から外神田までの道は、辻番や自身番をさけるの

も、難しいことではない。

明神の境内には、人影はなく、鬱蒼たる木立に囲まれて、拝殿がうずくまっていた。

「ここなら、邪魔は入らぬ」

左近は見廻して、頷いた。決闘の場として気に入ったのだ。

さげて来た刀を、はじめて、源次郎は左腰へおとした。やはり左利きではなかった。右利きだとすれば、右手に持っていたということは……

「左近、やる前に……一言いわせてくれ」

星空が頭上にひろがっていた。初秋の空である。ちかちか瞬く星の明りも、源次郎の痩せた顔をおぼろにしか見せてくれない。

「おぬしには悪いと思っている。いや、命乞いではないぞ、思うたまでを言うだけだ」

「……」

「見ず知らずのおぬしに、借金したが如くに証文を書き、剰さえ、証人として、おれきれきの前で、おれは嘘を吐いた」

「なぜだ！」

「なぜ？」

むしろ、不思議そうに源次郎は反問した。

「そうしなければ、ならなかったからさ。左様さ、わかりやすく言えば、飯のためさ」

「そ、そんなことで、おれの一生を台無しにしたのか」

「おぬしのことは、何も知らぬ。おれは、そうせねばならなかった。浪人暮しの……二度の飯も満足に食えない生活を、そんな生活が、御直参にわかるか？」
「おれも浪人になった。きさまのためだ。おれは、その上、捕まればいのちはない」
「多分、な」
突き放すような言葉だった。
それは左近の運命を冷ややかに見るというよりは、自分の儚ない運命を肯定しているような調子だった。
「浪人暮しの辛さが、おれを陥れようとする奴らの片棒担ぐことになったというのか」
「――らしいな」
「病気の妻女がいるそうだな」
「……」
「そのためか。わからぬでもない。だが、おれの方はどうなる。第一、おれは、一体、なぜこんな目にあわなければならぬのか、まるきりわからぬのだぞ」
「……」
「一体、何の怨みで、誰が、どうして、おれをこういう目にあわせるのか、まるきり不分明なのだ。こんな気持で、死ねると思うか」
「おれに怨みがあるならいい、怨みを買うということは、それなりの行為のせいだろう。解釈は別として、だ。だが、何がなんだかわからぬうちに、直参の家を潰し、奉行の地位を失い、いのちの灯を

ちぢめられてゆくおれの気持を」

その切々たる叫びを聞くのに耐えられないように、源次郎は、無言で抜刀している。まるで、矢立から筆を抜くように、殺気の感じられない抜き方だった。

「斬りに来たのだろう、抜け」

刀身が、星の光りを吸ったように、淡く光った。

「きさま……」

「おれは眠いんだ、根子間さん、斬りあおうじゃないか。うまく勝てば、帰って寝る。負ければ、ここで、寝る、ふふふふ、二度と起きることのない眠りに就くわけだ」

なぜか、その虚無的な言葉が、左近の胸から殺意を無くさせてゆく。

「しかし……」

と、左近は、刀の柄に手をかけていたが、抜刀の気分にならないのだ。

「きさまが、死ねば、妻女は、どうなる、他に頼む身よりがいるのか」

「余計な心配だぜ。根子間さん、おぬし……やっぱり育ちがいいのか、おれのような三代浪人暮しとは、違うようだな」

夜風が身にしみたように、源次郎は、肩をふるわせ、咳込んで、かッと痰を吐いた。

「殺生だぜ、風邪をひかせる気か、さあ、抜け」

この男と斬りあえば、間違いなく勝つだろう。九分九厘、左近は勝てる。そう思うと、一層、影のようなその痩軀が、いたいたしく見えた。

「申せ、妻女の身よりは江戸にあるのか」
「いい加減にしな、そこまで心配してくれることはないんだ」それから、こう言ったのである。「どこまでお人善しなんだ、根子間さん、あれは、嘘さ」
「なに?!」
「嘘なんだよ、この源次郎に女房などいねえ」
「……」
「よその病人を借りて一芝居うっただけさ」
「うぬ!」
はじめて、殺意が突きあげた。左近は腹の底から憎しみと殺気の叫びを奔らせるや、抜刀しざまに、土を蹴って斬りこんでいった。

淫火麝香猫

1

相手の腕を怖れたのではない。武士ひと通りの剣の道を究めれば、抜かなくても、だいたい、相手の強弱はわかる。が、その多部源次郎の態度は、常識的な眼では判断しかねるものがあった。虚無的な影を曳きずっているような姿は、いうなれば隙だらけで、そのことが、かえって根子間左近を慎重にさせたのである。

（殺る！）

左近は五体に噴きあがるような殺気にかりたてられるようにして、大地を蹴った。

当然、相手の応戦も計算に入っていたことである。抜刀を振りかぶって、真っ向から双手斬りに斬り下げたのだ。

この凄まじい憎しみの炎を全身にまとったような攻撃に対して、左近が相手の立場だったら、身をひらくなり、一歩退って落下する刀を摺りあげざまに逆撃する。

その応酬を予期していただけに、左近の刀は、力のこもったものだった。巨岩をも断つ勢いで振りおろされている。

「あっ！」

どうしたことだ。ずん！　と、白刃は肉を斬り骨を断っていた、素晴しいほどの斬れ味だった。
源次郎は本能的に首をかしげ、身を躱そうとしたようだ。白刃は脳天をそれている。が、僅かのことだった。左耳を削ぎ、頸すじから胸へ、あざやかに斬り下げていたのである。
手にした刀は殆ど、この斬撃を防ぐことができなかった。
いや、防ごうとしなかったのだ。まるで刀の重さに耐えられないような、握り方だった。
斬った方の左近が愕然としたのである。少しの抵抗もなかっただけに、刀は思いきり斬り下げている。
凄まじい血しぶきの中で、源次郎は一瞬、にやりと笑ったようだった。
それは、自嘲の笑いだったろうか。
無意味な一生に、漸く終止符を打てるという、被虐の甘美な快感が、かれの脳髄を痺れさせたのかもしれなかった。
おのれの噴血で、顔を真っ赤に染めて、源次郎は、声もなく、棒を倒すように倒れた。
「殺った……」
呆然と、左近は佇んでいる。
現実に目前で起ったことが、尚、信じられなかった。
悪夢でも見ているような気持だった。
人間の感情は、異様である。強力な〝敵〟と思ったからこそ、斬ることに、意味を感じたのである。
（斬らねばならぬ）

と、思ったのは、おのれの一生を狂わせた憎い存在——狂わせる力を持った存在への憎しみだった。こうも、あっけなく、脆く、斬られてしまったとなると、その意気込みが、むしろ滑稽なものに見えてくる。

まるで、無抵抗の赤児か老婆でも斬ったような悔いが、胸に満ちてきたのだ。

「なんということだ……おい！」

斬られた奴へ、あらためて別の意味の憎しみを感じた。

「どうしたのだ、きさま……なぜ、むざと斬られたのだ」

「ううう……」

夥しい血の中で、源次郎の四肢は、ひくひく動いていた。

「しっかりしろ、おい！」

抱き起したが、致命傷なのは、いうまでもなかった。我ながら、あざやかな切口なのだ。手当てのしようはない。

もう、その双眸はどろんとして、膜がかかったように、左近の顔も見えないようだった。

「馬鹿なことをする、おれへの詫びか、そのために斬られたのか」

「し、しかたがねえ……これも、運命、さ……」

唇が微かに動いて、漸く、そう言った。

長い浪人暮しにとどめをさすには、むしろ源次郎の望んでいた幕切れかもしれなかった。

「おい！　一体、誰に頼まれたのだ」

「……」
「それだけ、教えてくれ、誰に頼まれて、あんな狂言をうった？」
「か、金……」
「金のためだというのか、わかった、そいつは、しかたがない、もう怨んではいないぞ、おい！　源次郎」
ゆすぶると、ずぶっと血がまた溢れた。
「教えてくれ、誰が、おぬしを金で雇った？　そいつの名だ、そいつを知りたい」
しかし、もう、源次郎ははっきりと死の手に摑まれていた。
「う……うし……」
「牛？　牛がどうした」
「――う、うしの、くび」
聞きとるのも難い発音だった。唇が動いている。消えてゆく火を少しでも燃えつづけさせるように、両手が動き、唇が、鮒の口のように、虚しく動いた。
「牛の首だと？　なんのことだ」
「う、牛の首……」
「……」
「び、び、く……に」
それが最後だった。源次郎は、がっくりとかれの腕の中で重くなった。

「おい！　死ぬな、死ぬな、何と言ったのだ、もう一言……」
魂はすでに抜けた。そこにあるものは、血まみれのむくろでしかない。
「――死んだか」
半開きのままの唇を眺めて、左近は、落胆とともに呟やいた。
「牛の首、びく……びくと言ったな、魚籠のことか、魚籠に、といったな、魚籠に牛の首を入れろというのか」
判じ物めいている。
聞き違えとしか思えない。
はっきり聞えたわけではないのだ。言葉になっていない。左近は手拭いでからだについた血汐を拭った。
（――おれは、何のために、この男を斬ったのだろう……）
復讐か？
復讐というには、あまりにもわびしい。後味が悪い。
（こいつは、はじめから、斬られる気で、ここへ来たのだ）
そう思ったとき、女の叫びが聞えた。
石段のところから、女の顔がのぞいた。仄白い顔が、あえぎあえぎ、のぼってくるのだ。
「旦那さま、旦那さまーっ」
女は、病身でもあるのか、よろめきつつ、立ち止っては呼吸をととのえ、

「旦那さま……」
左近を見た。
闇の中に、左近の影が近づいてくる。
「あ、あなたは……旦那さまではない」
語尾は、すーっと息を引いたように、咽喉の奥に消えた。蒼白い顔が驚愕と恐怖でひき吊った。見たのだ。かなたの地面に、長々と横たわった影を。
「ああ……とうとう」
思わず、両手で面を蔽って、よろよろと崩れている。二十五、六の人妻風である。
「そなた、まさか」
左近が足を止めたのは、源次郎の言葉が甦ったからである。
(この源次郎に女房などいねえ)
と、かれは言った。
病妻を抱えての永の浪人暮しに、窮迫のあまり、左近から借銀したと証言したのだ。それが左近をエリート階級から引きずりおろす要因の一つになっている。
偽証文の裏づけである。
その偽証がなかったら、証文の信憑性はうすくなったはずだ。
(よその病人を借りて一芝居うっただけさ)
とも言った。

それが左近の殺意を煽ったのである。
すでに、源次郎の人生に疲れきったような姿を見たとき、左近からは、殺意が消えていたのだ。
源次郎のその言葉に、ひとたび消えた殺意を惹きだすことになった。
だが——
(この女は……源次郎の妻ではないか?)
なぜ、嘘を吐いたのだろう。
「——源次郎の妻女か」
「……」
女は泣いている、かなたに横たわった死体に近づくこともできないようであった。
あまりの悲しさが、その気力さえ、失せさせていた。
「おれは……」左近は咽喉に言葉がつかえるのを感じていた。「おれは、根子間左近だ、あの男をいま斬った」
「ああ……」
「理由はわかっているであろう」
一層、女は肩をふるわせ、嗚咽が高くなった。
闇の中に、細い襟足の、いたいたしいまでの白さが、ぼうっと、浮んでいる。
それを見おろしたまま、左近は、
(憐れな)

と、感じるよりも、嗜虐的な、荒々しい感情がこみあげてくるのを知った。
よくは見えないが、着物も粗末で、髪もほうけている。永い患いの妻女にちがいない。
「いまさら弁解めくが……源次郎は、妻はいないと申した」
「えっ?!」
「そなたのことか、そなたのことであろう、よその病人を借りただけだとな……」
「なぜ、そのような」
「知らぬ」
わからないのではない。理由はただ、疲れきっていた、ということではないか。
生きることの苦しさ、嘘を吐き、嘘に嘘を重ねて、人を陥れなければ、生きてゆけないこの世から、早く訣別したかった。それだけではないか。
左近が訪れたとき、すでに、かれは死ぬ気持になっていたのだ。せめて左近の刃に仆れることで、贖罪できると思ったのであろう。
(そのために、嘘を吐いた……)
憮然として、左近は独りごちるように言った。
「最後の嘘だったな」
「えっ!」
「源次郎は、死ぬために、最後まで、嘘を吐いたということだ」
「でも……」

何か言おうとして、さらに悲しみがこみあげてきたのか、妻女は、また泣き崩れた。
左近は、その嗚咽を聞いていられなかった。地の底から聞えてくるような、くぐもった悲しみの声は晩秋の寒夜に短かいいのちを訴える虫のそれにも似ていた。
うしろ髪を引かれるというか、立ち去り難い思いを、左近は、心に叱咤するようにして歩きだした。
(運命だ……)
おのれに言い聞かせた。
(人を斬らねばならなくなったおれも、夫を失ったこの女も……)
何か大きな力が、人間を操っている。それだけのことだと思おうとした。
「――待って!」
嗚咽がやんだと思うと、女の声が、低く、しかし異常なするどさで、背中を突き刺した。
「……」
「お待ちになって」
声が追ってきた。弱々しさが消え、執拗な粘りのあるものが絡みついてきた。
「そんなはずはございませぬ」
何を言いだしたことかと、左近が振りかえるのを、妻女はひたと見上げて、
「いまのお話、信じられませぬ」
「なんのことだ」
「わたくし源次郎の妻でございます。さよと申しまする」

「それで？」
「わたくしを捨てて、夫が死ぬなどと、そんなこと……信じられませぬ」
「おれの考えを申しただけだ。信じる信じないは、そちらの勝手だ」
「いいえ、そんなこと、許せない、許せませぬ」
「……」
「夫は、わたくしのために、お前さまを瞞しました」
「――その報いは、受けた」死体に顎をしゃくって、「あの通りにな」
「お前さまを瞞す、嘘を吐いてまで、わたくしの病気を直すお金を……それほどの夫でございます。どうして、わたくしをこの世に残して死のうなどとするでしょう」
妻女を怒らせているのは、夫婦のきずなは鉄鎖よりも固いと信じていた女の矜持か。
「わたくし一人……たった一人で、この世をどうして生きてゆけましょう、ええ、夫は、源次郎は、私を愛していました。わたくしだけを残して、死のうとするなど、そんなことありません」
「……」
「ありませんとも、ええ、そうですとも、ええ、ほんとうに……」
そう思うことで、自分への愛の存在をたしかめようとするのだろう。
左近は、立ち去ろうとした。と、袖が摑まれた。妻女が摑んだのである。
「待って、わたくしも、斬って下さいまし」
「なんと？」

「斬って下さいまし」
女の眼が、闇の中にぎらぎら光っていた。熱っぽい息づかいだった。立っているのも辛そうに、あえいでいる。
「斬って、斬って……ひとおもいに」
吐く息が闇の中で、炎のようだった。女のからだが、ぐらりと崩れた。思わず、左近はその細いからだを抱きとめていた。

2

ほんとうに死ぬ気だったのか。女は——さよは、狂ったように挑んできた。
かれに凭れかかって、荒くあえいでいる女のからだを抱いて、長屋へ運びおろしたのも、単なる成行きからであった。
憎しみはすでに消えている。源次郎の死が、因縁の清算を意味していたはずだ。
左近には、用がある。
(牛の首の魚籠(びく)……)
その謎の言葉をさぐらねばならないのだ。源次郎の妻の面倒など見てはいられない。
だが、去るつもりなら、彼女が立ちくらみしようとも、気を失おうとも、冷たく捨ててゆくべきだった。
そこまで冷酷になれなかったのは、やはり根子間左近の育ちのよさだろうか。

だが、長屋の蒲団の上に横たえてやると、さよは、うす眼をあけて、
「殺して……」
と、喘いだ。
「何をいう、そなたに恨みはない」
「死にたい……」
「……」
「殺して、おねがい」
細い手が、かれの膝を摑んだ。
死を希う気持も、どこまでほんとうなのか、半ばその気になっていたのであろう。女の手は大胆だった。膝から手を這わせて、裾前へ入ってきた。
それは、無意識の行為というより、〝死〟を前にしたいのちの烈しいほとばしりのようなものだった。

男のものを摑んだとき、病み疲れた女の面に、何かが走った。それは、あるいは人間の——いや動物的な生存本能の精気かもしれない。
女の手の中で、おとこは驚いたようである。
「何をする」
「おねがい……」

それから先のことは、言葉にあらわせないのだ。

女の眼はもとめていた。必死に生きようとする者の眼の光りだった。

ふっと、左近は、あの源次郎の虚無的な影を思いだした。

あの死神にとり憑かれたような姿からは、男女のいとなみを行う気力は考えられなかったのである。

この女も病んでいる。

夫婦の仲には、その行為は随分、無かったのではないか。夫の死という衝撃が、女体に妖しい小波をたてた。

左近の若い体軀が、その男の臭いが、女に無意識に手を伸ばさせたのかもしれぬ。

「放せ」

と、言いながら、左近は、ひかれるように坐っていた。

「放せ」

「いいえ、放しませぬ」

女の眼は光っていた。左近は、

(猫のようだ)と、思った。

いのちのかぎり、そこに情熱を燃やそうとする女の手は、不馴れながら、確実に、男をふるい立たせてきた。

それはまた、女のいたいたしいまでのかぼそいからだに宿った、残りの火をかきたてることにもなった。

「うれしい！」

女の熱いあえぎが、男の下半身を吹いた。

火事の際の類焼や飛火は、すでにして熱風による素地が出来ているところへ火ノ粉などが落ちるからである。

女の手や、熱い肌の囁きは、その熱風だった。

左近は咽喉にかわきをおぼえた。女の半ばひらいた唇が、甘い泉に見え、思わず、顔をおとしていた。

（うれしい）

と、女はまた言った。その声は聞えない。口に蓋をされ、舌がからみあった中で、たしかに、その言葉を、左近ははっきりと聞いた。

情念が通じさせたのであろうか。

女は、早くも濡れている。永い間、交わりを知らなかったその肌は、かれを納れる前にもはや、しとどであった。

いきりたったおとこが、ゆるやかにすべりこむと、女は息をひき、泣くような声をだした。

疼痛ではない。待ち望んだ快感がからだを貫ぬいたからであろう。

ずずっと、枕から、頭が落ちた。

左近がからだを浮しただけで、

「あ、まだ……」

と、しがみついてきた。

むろん離れるつもりはなかったのである。

まるで、いま左近に去られては、生涯の悔いを残すというような激しさが、女の全身を炎にしていた。

「もっと、もっと……」

熱い、おとこをとらえ、吸いこみ、しめつけるそのおんなの襞も燃えていた。

熱湯といってよかった。左近は、これほど溢れさせる女体は、はじめてだった。

(これが病人だろうか)

いや、これは、病人だからではないか。

圧えに圧え、撓めに撓めていたものが一度に噴きあがったのだ。死期を知っている者だけが識る快感、甘美な陶酔だった。

左近はその女の熱いるつぼのなかで、おのれが奔るのを知った。

異様なまでの感覚、悖徳と異常さの刺激がいつになく、かれを情欲の淵にひきずりこんでいた。

かれは、放ちながら、なお萎えぬおのれをもてあますように、そのままでいた。

女もしがみついたままである。かれが腰をひこうとすると、かえって、くっついてくる。

少しでも、お互いの間に、間隙をつくるまいとする。

「あ……」

なお、うねりがあった。

温かいうねりの波は、女のからだの奥から溢れ、津波のように、かれの熱したものをとらえ、次から次へと流れてくるのだ。

「いつまでも……こうして、凝っとしていたい……」

おさよはうっとりとなっている。

しみじみとした呟やきで、静かに、顔を動かし、左近に頬ずりし、咽喉から耳たぶなどに唇を這わせているのだった。

その情感の波を楽しむには左近は忙しい身だった。

だが、この甘美な感覚はどうだ。断ち難い思いが壮軀に、さらなる動きを命じていたのである。

「ああ、また……」

さよの眼に、また情火が燃えあがった。

そのときだった。

ううう……、と呻きのような声が聞えた。

さよの口からではなかった。隣家ではない。頭上である。天井からだ。天井にいるのは、鼠であろう。

る、る、る……

また聞えた。と思うと、ふいに、ぎゃーっと、声がし、だだだッと頭上を何かが走った。天井裏である。

埃りが舞い落ちる。節(ふし)だらけの松の板の天井。雨じみと松脂(まつやに)がべっとりと浮き出している粗末な天

井だ。隅の方ははずれたままになっていた。

そこから、一塊の白いものが、転り落ちてきた。

ひらりと、破れ畳の上におりたつ。

一匹の白猫。かなり大きい。つづいて、またこんどは、追ってきたように落ちてきた。

三匹の猫だった。

白猫はさっと走りだす。左近とさよの頭のところをさーっと走りすぎた。

反射的に左近は枕元の刀に手を伸ばした。

すると、つづいてきた三毛が、ぱーっと、飛んだ。

二人のからだの上を——

飛び越えようとしたのだ。左近の手裡から白光が奔り、半円を描いた。

ぎゃおーッ、凄まじい声と血汐がザーっとあたりにふり撒かれた。

一閃。三毛猫は真っ二つになっている。

宙で二つにわかれ、どさりと転り落ちた。

尻尾をつけた腰、下肢のほうは、どさっと落ちると薬湯の土瓶を毀し、湯呑みを倒して柱ぎわで止った。

かっと眼を剝き、上下の歯を剝きだしたまま頭のほうは、血しぶき撒いて宙を一転、行燈の上に落ちた。

古びて黄ろく煤けた破れ行燈である。

その縁に、すとんとひっかかったのだ。
頭部と前肢と半分の胴体。
胴体から噴き出す血泡が、その煤け紙を染めるように、だらだらと流れ、畳にしたたった。
猫の前脚と首が、奇妙なかたちで、行燈の上に乗っている。
まるで、行燈の油を舐めに来たかのようであった。
「猫が……」
おさよは、突然のことに瞠目したまま、無意味に呟やいた。
「化猫だな」
笑おうとしたが、何か一笑にできない、無気味なものを感じたのである。
うしろ半分は、ときどき、ぴくりと尻尾が動いた。
(どうして斬ったのか?)
頭上を飛び越えられるとは、気持のいいものではない。その瞬間の、反射的な動作であり感情だった。
殆ど、その行為には理由はない、斬った本人にしてみれば、おのれの行為が、この、血と、猫の頭を出現させたことに、気味悪さを残したのである。
血は滴っていた。ぽとりぽとりと、間歇的な音が、異様に高く聞える。まるで、かれの行為を咎めているように。
左近は、いつの間にか股間が凋んでいるのを知った。もう興を無くしていた。かれは、血刀をひっ

さげたまま、立ち上った。
その男を下から女は掬いあげるように見上げて、
「斬らないで……」と、弱々しく哀願した。
まるで、左近に斬られることを予期していたような様子だった。
「おねがいです、あたし……死にたくない」
「斬りはせぬ」
「さっきまでは、斬られてもいい、と思っていました。死にたい、夫と一緒に、あの世へゆきたいと」
「……」
「でも、もう……いや、生きていたい。生きて、あなたさまに愛して頂けたら……ああ、こんな気持、はじめてなんです」
「……」
「あたし、生れ変ったみたい。左近さま、ほんとうに、あたし、病気なんて、忘れてしまいました」
「それはよかったな」
皮肉に、冷たい笑いで、左近は血刀を拭った。
「生れ変ったか、あの猫の精がのり移ったか」
「え?!」
「血が……」

まるで、血を舐めたように、さよの唇は赤い。
「猫の血？」
さよは唇を拭った。べっとりと、血が付いてきた。
あの両断した一瞬にふり撒かれた鮮血が、さよの唇に飛んだ。
まだ余燼の中に揺曳していて、気にならなかったのだろう。それを知って、あらためておさよは、身をふるわせた。
行燈の上の猫の表情の気軽さは、下からの炎を受けていたせいもある。
両眼は驚きのために、いっぱいに瞠かれ、耳まで裂けた口は、いまさらのように、するどく、兇暴な、その歯を見せていた。
夜風が、猫のひげをこまかくふるわせている。
ジジジ、ジジ……燈芯が虫鳴きした。
油がきれかかっているのだ。炎が大きく小さく揺れた。猫の眼は、そのたびに、光りを変えた。
大きく炎が揺れると、眼玉は金色に光り、小さくなると、銀色に見えた。
「——行くぞ」
帯をしめ直して、左近は女を見た。
おさよのからだには、まだ甘い歓びの小波が津波のあとのように残っているのか、ぼんやりした顔で、夜具の上に坐っているのだった。
「汚したな、掃除が大変だろう」

左近は、なにがしかの小粒銀をつまみだして、彼女の膝の上に投げた。
「町内の者でも頼むがよい」
「ええ……」
まだ事態がよくのみこめないようだった。
「猫の死骸は、おれが捨ててきてやる」
えりくびをつかんで持ち上げると、そのままくわッと噛みついてくるような凄まじい顔だ。かなり重い。猫ともいえぬ。ちょっとした犬など、この形相を見ては、おぞ毛をふるうだろう。
「風呂敷か何かあるだろう」
「はい……」
のろのろと、おさよは立ち上った。
まだ血が出ている。ぼろ布でもあてて、厳重にしなければならない。その作業を凝っと見ている眼が、勝手の障子のところにあった。
さっきの白猫であった。

3

（牛の首の魚籠に）
謎の言葉の手がかりを、おさよからつかめると思ったが、そこまで執こくするのも気が済まなかった。

おさよの意外な情熱も、左近にとっては、深い意味を残さない。かれを取巻き、つつみこんだ地獄の運命から逃げ出せることにならないのである。

（どこで捨てるか）

まず、猫の死骸。

早く捨てないと、岡っ引などに誰何されたら、また面倒なことになる。

そうでなくても追われている身なのだ。

明神下の通りを南へ二、三町で神田川へ出る。

お茶の水の淵だ。神田川の川っぷちに井戸があり、その水は名水で将軍のお茶のための用水とされたので〝お茶の水〟の名が残っている。

「ふん、将軍家のお茶か」

吐き捨てるように言って左近は、猫の死体を投げ捨てようとした。

と——

ある気配を感じた。

そっと背後へ忍び寄った者がある。

「む……」

柄に手をかけてきっとなって振りかえったが、誰もいない。

（気のせいか）

左近は刀から手を放した。ニャーオ、足もとから、猫の声がのぼった。

「なんだ、放れ猫か」
疑心暗鬼というか、一匹の猫が忍び寄ってきたのにも、兢々としなければならない身を、かれは自嘲した。
猫の死体の匂いを嗅いで、近寄ってきたのか。
それだけのことと思った。
が、その白猫は、左近を見上げてまた啼いた。思いだせといわんばかりの啼き声だった。
「あっ、さっきの……」
白猫ではないか。
あそこから、跟いて来たのか。
「執こいやつだ」
ついで斬るか。だが、そう思っただけで、ぱっと白猫は飛び退った。
身軽い。あざやかだった。こちらの思惟が、そのまま伝わるのか。
「いやな猫だ」
左近はまず、三毛猫の包みを投げ捨てた。
暗闇の中で血に染まった包みは、大きく抛物線を描いて淵へ飛び、夜の底へ見えなくなったかと思うと、はげしい水音とともに、白くしぶきがあがった。
ニャーオ、また白猫が啼いた。怨むような眼だ。
「お猫さまか、さっさと消えたらどうだ。いつまでもそんな眼をしていると、斬りたくなる」

事実、腕にその衝動がある。

左近は歩きだした。

筋違橋の方へゆこうとすると、白猫はさっと、前へ廻った。そしてうずくまったのである。

まっすぐ行こうとすれば、踏み潰すか、またがねばならない。

「通せんぼか」

妙なことをする猫だ。

三毛猫に追われていたのだから、そいつを斬ったのは、結果として助けてやったわけだ。

「きさまに怨まれる筋合いはないぞ」

何を考えているのか、それがわからぬだけ無気味なのだ。

左近はくるりと向きを変えた。

すると、白猫は嬉しそうに、小おどりしながら、先へ立って歩いてゆくではないか。

「はて……」

左近も、なんとなく歩きだしている。水の流れからいえば神田川を遡ることになる。が道はだらだら坂で水道橋の方へおりてゆくのである。

ここから下へゆけば吉祥寺の門前へでて、それから水戸家下屋敷。

吉祥寺は、八百屋お七で有名な寺だ。明暦三年の大火まではここにあったが、全焼してから替地を駒込に貰って移転した。お七の話はその後のことである。元吉祥寺という地名になって残っている。

その手前のところが火除地になっていて、馬頭観音らしいものが立っている。

「おい、どこまで連れてゆく気だ」
一体、どこに何があるというのか。
猫は町屋と屋敷の間の小路へまがっていった。
さらにまた露地へ左に折れた。その道は突き当り。袋小路になっている。
と、見えたが、猫はその門内へ入ってゆくではないか。
あまり手入れがよくない。雑草が門のわきに生えているし、空屋敷のような感じでもあった。
だが、闇の中に灯が動いているようだ。人が住んでいるらしい。前栽の樹木が深く、隠宅の感じであった。引かれるように屋敷の中へ入っていった左近は白猫の姿を見失ってしまった。
「あいつ、どこへ逃げたのか」
左近は引き返そうかと思った。
そのとき、火燈窓のうちが、ぽっと明るくなった。灯が点されたのである。
「どなた？……」
障子のうちで女の声がした。
「や、卒爾した」と、左近は答えている。
「道に迷って入って来てしまったのだ、他意はない」
障子が開き、手燭が出、人の影が見えた。
白布で頭を包んだ一人の尼僧だった。
「ほんとうに道にお迷いか」

怪しむように、手燭をかかげて、こう問いかけている。
「嘘ではない、あの猫に……」
言いかけて、苦笑した。
猫に聞けなどといえば、かえって信用されまい。
「そうですか、かような時刻では、それに提灯もなしではお迷いになるのも無理はありませぬ」
じろじろと、観察しながら言うのである。
提灯を貸すから、早々と境内から出て貰いたい、というのかと思った。
あの不祥事以来、人間不信がつのって、ひがみっぽくなっている。
ところが、その尼僧は、
「いっそ、泊っておゆきなさるがよい」
と、親切に言ってくれたのだ。
「しかし、それは……」
行い澄ます尼僧の家に男が一人で泊ることは、さすがに憚かるものがある。
「ほほほほ、御遠慮なされますな、お困りの人を助けるのは仏僧の役目、ほとけの道でございましょう」
理屈はそうだが、尼僧となると、気がねせざるを得ない。
「さあ、さあ、こちらへ」
尼僧は先へ立った。左近も、もうそれ以上固辞しなかった。

どうせ、泊る屋敷を持たぬ逃走中のからだなのだ。人を斬り猫を斬ったことの疲れがふいに感じられた。

「では厄介になろう、いや、納屋の片隅でもよい」

「ははは、左様なところには、お前さまのようなお武家は案内できませぬ」

「いや、いまのおれは……」

浪人したてのほやほやだ、と言おうとして、万一、そんなことから、司直の手が伸びてはならぬ。あとの言葉を、かれは嚥んだ。

奇怪というほかはなかった。招じられた湯殿に、その尼僧が二布一つで入ってきたのである。この僧庵とも言えぬ屋敷に、尼僧のていの女がいることも面妖だったが、一夜の宿を提供してくれただけさえ尋常ではないのにそんな奉仕まで受けようとは。

「お背中を流させて下さいまし」

「そなた……」

「あら、羞かしい、見つめないで」

裸身を羞じるように、女は身をくねらした。

二十歳は越えていよう。美貌が若く感じさせているが、熟れきった肌は、妖しいまでにぬめりと白く、乳暈が異常に大きい。

この夜陰に湯が沸いていることも尋常ではない。

湯女風呂などもそうだが、屋敷の風呂などもたいてい陽のあるうちに入るのが普通であった。

（一体、この屋敷はどういう素姓の……）

何もかも疑問だった。

あの白猫がかれを連れてきたのも、尼僧がここまで、奉仕しようというのも。

広い湯殿だった。畳にして八帖ほどはあろうか。小身の旗本ではこれくらい立派な湯殿は持てない。

総檜で、湯気のなかに木の香りがなんともいえぬ、いい匂いを漂わしている。

「――いいのか？」

意外すぎて、挨拶のしようがなかった。

どういう素姓かもわからないだけに、多くを言えないのである。左近は追われる身なのだ。

「ほほほほ、今日は、わりと閑なのでございます」

「……」

「なぜかしら、あなたさまが来たせいかしら」

女は糠袋を動かしている。洗い粉をつけて肘や膝などを丁寧にこすってくれるのだ。

豊かな乳房が湯気の中で息づいている。

湯殿の中に持ちこまれた行燈はうす紅色の絹を張った行燈だった。柔らかな光りが湯気を透して夢幻の妖しさで女の肌を浮き上らせている。

白い肌は、まるで、湯に温まったようにうす紅く彩られ、男の欲情を誘わずにはいないのである。

まだ、おさよを抱いてから、いくらも経っていないのに、あのことは、十日も前のことのような気

がした。

おさよの乳房も、永患いの疲れた女にしては量感のあるほうだったが、この女の豊満なそれは、おいしい水菓子のように、男の手を促しているのである。

それも、ただ普通の女性だったら特別の感情も持たなかったろう。

青い頭が、異常にかれを刺激した。

当時女の黒髪は——女そのものを象徴していた。ちぢれ毛や赤毛は、下品とされた。

なめやかで漆黒でくせのない長い、豊かな髪が、女の魅力の一つでもあったのである。

その魅力を捨て去った青頭が、これほど、男の心を捉えるとは。

青い頭と、豊かな乳房と——左近は、それを愛撫したい思いにとらわれた。

すでに湯をかけながら、女の手は、かれの股間を洗っている。細い指が、微妙に動いて、陰阜から陰嚢まで、いや、その裏の部分にまで、女の手は伸びるのだった。

左近は、充血してくるのをおぼえた。

「あら、お早い……」

女は上眼づかいに見て、にっと笑った。

「何が、早い？」

「だって、今宵は、はじめてではありませぬ。ほほほ、隠しても、わかりますもの」

「……」

「それも、ついいまさっき……でしょ」

残滓を素早く嗅ぎとったのか。
咎めているわけではなかった。女の手は、興味と好奇心をあらわにしていた。
「――いいのか、こんなところで」
板の簀ノ子に尼僧が仰向けになって、左近を誘ったとき、思わず、ためらいが出た。
「待てませぬ」
女の唇は濡れていた。
青い頭をはじめて左近は抱いた。
おさよとの二度目の行為はあの猫斬りのために中断されたままに終っている。
その、立ち消えたものが、この尼僧によって甦ったのだった。
もしも黒髪を持っていたなら、濡れた簀ノ子の上でしとどになり、板の隙間にひっかかったりするだろう。青頭は、まるで、このために剃りあげたのではないかとさえ思われた。
落ちてのち――
「どう、さっきの方より、よかったでしょうね？」
女は、濡れ濡れとした眼で左近を見た。
おのれの寝間の作法に自信を持っているのだ。
「まあな」
「また来て」
「……」

「ね、お約束。げんまんしましょう」
小指を出してからめ、その小指を口に含んだ。
「嘘を吐くと、この指、切れてしまいますよ」
「来る……いのちがあったら、だ」
「まあ、そのようなこと」
驚きの眼になって、
「おぼえて下さいましね、わたくし妙心と申します」
「忘れまい」
約束しても、どうなるかわからない。あまりにも、運命はおれを翻弄している。
「お名前を聞かせて」
「——根子間左近」
一瞬のためらいの後に、かれははっきりと名乗った。
「ねこま？……」
妙心尼は笑いだし、口をおさえた。
「何がおかしい」
「だって、あたしのお客さま、このところ猫の字のつく人が多いんですよ」
「……」
「猫下さま、猫浦さま、猫崎さま……ね、そして猫間さま」

「おれの苗字は、けものの猫ではない」
「あら、御免なさいまし、あたしうっかりして」
「木の根の根だ。それに君子の子に間だ」
だがたしかに、猫の字のつく客が三人もとなれば、妙心が、おかしく思うのも無理はない。
「偶然であろう。それにしても、ここは一体どういう屋敷なのだ」
「あら、ご存知ないのですか」
はじめて、妙心は、左近がとぼけているのではないことを知ったようだった。おかしいと思ってはいたのである。
「ほんとうに？」
「くどいな。だから申したであろう、おれは猫に誘われて来た。何も知らぬ」
そう言われて考えてみれば、妙心の早とちりだったようだ。
いつも、そうした客をとっていたので、疑問も抱かずに、招じ入れた。左近のためらいは、この屋敷にはじめての故と解釈したのである。
「ほほほほ。わたくしとしたことが、まあ羞かしい、左近さまのご様子が」
「女好きに見えたか」
「いいえ、お優しそうで、あたしを歓ばせて下さるかたと」
「言葉通りに受けとってよいか」
「ほんとうですもの、だから……揚げ代など言わなかったでしょう」

揚げ代――吉原の遊女のそれではないか。

いや、岡場所でもそういう。湯女風呂は垢かき代だが、こういう湯殿を用意してあるのも、変った趣向に惹かれる者が、案外、多いのだろう。

「あたし、タダでもいい、抱いてほしかったのですよ」

「……」

「信じて下さいましな」

一文も要らぬというのだ。信じるしかない。だが、左近には、浮れる気持はなかった。

「世話になった」

「もうお帰り？　今宵は泊っていって下さいまし、もう遅うございます」

女はかれの腰にしがみついた。立ち上った左近の腰を抱いた。顔が丁度、股間にある。

「有難いが……要用があるのだ」

「こんな時間に？」

「うむ」

「ひどい」と、怨じる眼が、ふっと哀れを誘う。妙心は、顔をはげしく動かし、左近の下腹部に、甘美な刺激を与えながら、幼な児のように、いやいやをした。

「放さない、ねえ、左近さま」

駄々っ子のように甘え、それから、こう言ったのである。

「この牛ノ首の比丘尼屋敷に来たお客は、みんな泊ってゆくのですよ」

「牛ノ首!!」

愕然として、左近は呟やいた。

「ここが……牛ノ首か」

「ええ、近所の衆が、そう言っています」

「はじめてだ。御府内の絵図にもそう書いてあるか」

「いいえ、このあたりの人だけが、知っているのじゃないかしら」

「……」

「なんでも、この裏の屋敷が、タタリ屋敷とかで、もう十年以上も、閉めきったままらしいんです。持主は百年浄めとか称って、百年経たないとタタリが浄められないそうです」

「牛ノ首に、何かいわれがあるのか」

「ええ、お江戸がひらかれる前の、太田道灌さまとかが御領主のころ、なんでも、牛の病気が流行って、百頭も二百頭も、バタバタ死んでいったのを、ここへ埋めたんですって……」

乱世だから、農民は疲弊している。夜中になって、牛ノ頭だけ切り落し、胴体は担いで持ち去る。あとに牛ノ頭だけがごろごろ残った。こればかりは誰も持ってゆこうとしない。そこで大穴を掘って埋めた。これが俗称の所以だという。

この上にたてた屋敷では、不幸がつづいたので、十数年前に買いとった篤志家が、空屋敷のままにして、人の出入りをさせず、お浄め百年といっているとのことだった。

「ここだったのか……」

あの白猫が連れて来てくれたのは、偶然ではない。

（何かある！）

運命は、次から次と、意外な展(ひろが)りを見せてくれる。妙心から言われて、左近はおのれの苗字が気になってきた。

斬った三毛猫といい、白猫といい、おのれの名前——そして、三人の猫の字の姓。何か奇妙な、見えぬ糸で結ばれているようであった。

（——魚籠、びくに、魚籠に。牛ノ首の魚籠ではなかったのか、比丘尼屋敷……そう言おうとしたのだな）

多部源次郎が、ここのことを白状しかけて、息たえた。

まだ漠然としていたが、少なくとも、その謎がとけただけでも、有難かった。

（しかし、この比丘尼屋敷と、多部源次郎がどういう関係にあるのか）

比丘尼屋敷の売春については、聞いたことがある。ここばかりではあるまい。ほかにも、二、三カ所あるらしい。

もともと、比丘尼屋敷という呼称は、将軍家のお部屋様などが、将軍の死後落飾して、法体となり余生を送ったりしたところを世間でそう呼んだものだ。

華やかな紅閨から、若い身空で一転しての念仏三昧などは、世間の興味を惹くに充分だった。

京都から将軍家の側室に入った堂上公卿の娘などで、一、二度しか、お手がつかぬうちにそういうめぐりあわせに泣く女もいた。世間で好奇心を抱くのは当然だ。

寵愛の度合いや信仰の如何によって、同じ落飾でも、かたちばかりの（結髪を遠慮するだけ）女もいた。後世になると、むしろ、それが多くなる。本来、これなど落飾とはいえないのだが、常識化してしまった。

剃髪するのは、よくせきのことで、若いうちは苦痛だろう。昔の寵臣の追腹（殉死）のように、まわりからむりに腹を切らされるのと同じく、剃りたてられた女もいる。

そうした女性へ一般は、同情とともに残酷な興味を持つ。

ずっと後のことだが、五月闇つるりつるりと比丘屋敷、という川柳がある。どっちが尻だどっちでもよろしおす、などというのもある。よろしおす、などという上方訛りを川柳に使ったのは、含蓄が深い。青頭と尻を対比させてのことは、口淫を意味している。京女は、外見が楚々として寝間は淫らで味よろしなどと書いたものもある。

東男にとって、京女はことに渇望されたのだ。

将軍のお手がついた女と遊ぶなど、江戸っ子の夢だったろう。

夢をふくらませすぎたきらいもある。

そうした嗜好に応える比丘尼宿というものが、昔からないではなかった。

これは誰でも相手にする比丘尼売春で、変態趣味はいつの世にもある。こういう家には、比丘尼足駄や比丘尼雪駄を軒下にぶらさげておくのが、看板だった。

前者は一本歯で、ただし巾広のたけ低くそのうえ三味線の駒のような末広がりになっている。安定感はあるが、裾長にそろりそろりと歩く。

雪駄も一目見ればわかる独特のものだ。切廻しでうしろの革が反りかえっている。つまり踵を蔽うようになっている。緒は両者とも玉子捻じと決まっていた。

もともと、これは勧進比丘尼のなれの果てが定住売春に移ったわけで、いずれも下種とされている。熊野比丘尼、勧進比丘尼、歌比丘尼、みんな同じような門付けの売春で、これは仏教のほうだが、神社の方になると、いわゆる歩き巫女で、出雲の阿国など、そっちである。

青頭には興味があっても、露地裏の比丘尼宿ではあまりにわびしすぎる、という連中がこうした比丘尼屋敷を珍重するようになったのだろう。

現代の用語でいえば、会員制秘密クラブであろう。したがってフリーの客は殆どない。妙心尼が、左近の風貌に心を惹かれたのは、同じメンバーに飽き飽きしていたのかもしれない。

「――ここは高いのか」

あらためて、左近は聞いた。

「ええ、吉原の格子よりちょっと安いくらい」

銀三十匁だという。このころ、米一石がだいたい六十匁を上下している。つまり五斗の値段だ。最低の鼻欠け夜鷹で十分の一くらいだから、高いといえば高い。雰囲気が違うし、会員制だし、変態趣味料が加算されている。

贅沢に馴れて華美を追いすぎるとこういう変態趣味がもてはやされるようになる。

「――高いな」

左近は思った通りを言った。

あの貧窮の多部源次郎が、こういうところへ遊びに来たとは思えない。
病妻を抱えて苦しんでいた。息抜きであろうか。だが、それなら、安い女がいる。あの貧しさでは、しかし、米一升と、一時の快楽とどっちをとるかといえば、米のほうであろう。
おさよの言葉を信じると、源次郎はもうずっと、性欲衝動もなかったらしい。
この変態屋敷とは、肉体的に結びつかないではないか。
(しかし……たしかに、奴の口が、そう言った)
牛ノ首のびくに。
必ず関連性があるはずだ。
かれは、ただ場所を教えただけなのか、それとも、そのあとに何かつづけたかったのか。なるべく、こちらの意図を悟られたくなかったが、聞かねばわからぬ。
「源次郎という男を知らぬか」
妙心は首をかしげ、それから、記憶がない、と言った。
「多部源次郎という、浪人だ。年齢は三十半ばくらい。貧相だから四十過ぎにも見える」
「さあ……存じませぬ」
と、言ってから、あ、と思いなおした。
「あの方かしら」
「知っているか」
「一度……天馬(てんま)さまが……」

言いさして、なぜか口を噤んだ。
「どうした、隠すな」
「いいえ、羞かしいことなんです、あんなこと、あたし、はじめてだったし……」
頬を赧らめているのだ。
〝天馬〟とだけしか、その男の名は知らない。苗字なのか、名前なのかわからぬ。
こうしたところでは、それを追及するのは禁物とされる。金ばらいがよくて、ほかの客と摩擦を起さなければ、それでよいのだ。
その〝天馬〟さまが、
「ともだちを連れてきた」
と、言った。
見るからに貧寒とした浪人者で、ここへ来る客とはあまりに違いすぎた。
かれの眼には、妙心の裸身も、木偶のようにしか見えなかったらしいという。
「その天馬とやらが、お前を与えたのか」
「いいえ、天馬さまは、ひどいお方……変なのです、はじめから」
「……」
「あたくしに、髷をかぶせて……するんです」
「おかしな奴だな、髪のある女がよければ、ここへくることもあるまいに」
「それも、男ものなのですよ」

「……」
「角前髪の……若衆の頭なんです。ほほほほ、角前髪の若衆が、こんな胸をしてちゃおかしいでしょう。ところが、そこがいいなんて」
それから、ためらったのち語をつづけた。
「それも、うしろからなんです」
「……」
「あんまり、はげしいものだから、あたし、たまらなくなって……、ええ、大きなひとだし力があるんですよ。途中でねえ、髪がはずれて、ぐらぐらっとするでしょう、それがたまらないって。変なひと」
「それで、源次郎は、どうした」
「ええ、隣りの部屋でねえ、お酒を飲みながら、あたしたちの、あれを見ていました」
「見せたのか」
「天馬さんが、わざと、そういうふうにしたんです。あの男は、何年も、女から遠ざかっている。おれたちのするところを見れば男になるだろうって」
話しているうちに、そのときの昂奮が甦ってきたのか、妙心は、潤んだ眼になって、身もだえした。
「前から、そんなところのある人なんですよ。最初に来たときなんか、一ト晩中、あたしのからだを撫でまわしたり、舐めたり、抓ったり、天眼鏡の大きなもので、あたしの、そこを見たいって。ふふふふ、羞かしい。それも執こいんです。いつまでも、いつまでも飽きるふうがないんですよ。指でこ

う開いたり、そこら中を、触ったり、撫でたり、指を一本さし入れただけじゃ勘弁してくれないんです。二本にしたり、とうとう三本にして……そんなことをして、驚いたことに、あの日は、とうとう、為なかったんです」

「ふむ……大した男だな。いささか普通ではないが、おれには、そこまですれば、とても耐えきれぬが」

「いいえ、そうじゃなくて」

くすっと笑って、

「御自分で……始末していたんですよ。変なひと」

変だ変だと言いながら、そんな話を詳しくしているのは、この女にも、妙に自虐的なところ、露出症的なところがあるのだろう。

「そいつのことはいい。源次郎は、どうなった、そのあとで源次郎には抱かれなかったのか」

「ええ、だって、駄目なんですもの、あの方……」

おさよの言っていたことは本当だったのだ。

源次郎が死神にとり憑かれていたのも、わかる。女体への興味を失った男が、生活に疲れきったとき、生きつづけることの無意味さに耐えきれなかったのだろう。

「それで……それきりか」

「はい……そのときだけで」

「その天馬というやつ、源次郎とどういう関係か、話の様子でわからなかったか」

「親しそうに見せていらっしゃいましたけれど、あちらの方で、なんか、投げやりな……無愛想なひとだと思いました」

やはり間違いない。

源次郎に、そのとき偽証を頼んだのだ。時間的にも合うようだ。そのついでに、歪んだ情欲のだしにしたのだろう。天馬という男の抜け目のなさが、よくわかる。

「天馬というやつ、住所もわからぬのか」

「ええ……でも」

「何だ」

「お逢いしたいのなら」

妙心は粘りつくような眼になっていた。

「ここにいたら、逢えますわ」

「いつくるか、わかるまいが」

「三日に一度は、必ず……ゆっくりとお待ちなさいまし。部屋は幾つもありますから、ねえ、左近さま」

青い頭にふと鬘をかぶせてやりたいような気がした。この女には、男を異常にする何かがあるのだろうか。左近は頷きながら、眠気を感じた。

(明日か、明後日か、天馬を捕まえれば、事情が判明するのだ)

手強い相手であろう。この女の肌にとち狂っていては、いざというときに、役に立たぬ。

「今夜は、もう為ぬぞ」
と、釘をさした。
「明日なら、抱いてやる。その約束ができるか」
「あらつまらない……でも、添寝だけはさせて下さいまし」
いそいそと、妙心は立ち上った。

4

広い屋敷だ。樹木が多い。塀も高く、外からは窺い知れない。すぐ裏に、そのタタリ屋敷が隣接しているが、そっちも無住だから、奇妙な屋敷が背中合わせになっているわけだ。
客は昼間から来た。
昼間の客はたいてい頭巾をかぶっている。
武士ばかりでなく、富有な町人も多かったし坊主もいた。女もいる。でっぷり肥って、牝牛のような女がくる。金があっても男に相手にされずに、青道心の同性を抱きにくる。こういう女は、男以上に執こくて、あとがひりひりするという。
舐めるだけでなくて、咬んだり、ひっぱったりしたり、うしろに指を入れたり、乱痴気そのものだというのだ。
持参の黒光りした鹿の角の金精さまで、妙心を喜ばせたあと、おのれでおのれの中に納れて、はさんだまま、股間に顔を埋めてくるという。

三日目だった。

とうとう姿をあらわした。

その男があらわれる前に、左近は妙なものを見た。判然とはしなかったが、黒い大きな影であった。灌木がざわざわと揺れた。何か黒牛か何か、大きな動物が駈け抜けたようだった。

鍵ノ手になって、庭に突出した作りの書院から、玄関への道が見える。客はそこを通るから、それと指摘できる。

妙心はそう教えてくれたのだ。

この屋敷には、法体の女が七、八人いるようであった。

先夜のような深夜にくる客は殆どない。

昼間から宵にかけて、客のくる時刻には、男衆が案内する。遊廓の牛太郎という役である。もっとも、客を引くわけではない。無愛想な老爺で、ろくに口をきかぬ。

客が女を指名すると、待部屋へ招じた上で吉左右の返事を持ってくる。

公認ではないから、廻しなどということはない。

すでに先客があって、比丘尼のからだが空かなければ、帰るか、他を名指すしかない。

(——猫の苗字……三人くるといったな)

その連中が、みんな妙心を狙ってくるのなら、鉢合わせすることも多いにちがいない。

天馬という男は三日に一度という頻度だし、他にも多いから、大変な売れっ妓というわけだ。

「あれです、ほら、いま来た人」

がっしりした肩巾の男が入ってきた。
せむしかと思われるほどの猫背で、首が両肩の間にうまっている。
まだ宵闇が漸く漂いはじめたばかりで、低い柴垣の向うを歩いてゆくのが上半身よく見えた。その肩に何か担いでいる。皮革の合財袋のようなものである。
「あれは何だ、何が入っている？」
「いつも担いでいます。でも、知らない」
「聞いたことはないのか」
「触っただけで、ひどく叱られます」
「妙な奴だ」
町人とも職人とも浪人ともつかぬ。まともな人間ではない証拠に月代を伸ばしている。腰には短かい刀を差しているから、浪人風でもあるのだが、
「——臭いんです、あの方」
と、妙心は述懐する。
「なんだか、いや。けものの匂いがするような」
「そういえば、熊の子のようなやつだ」
あいつが、源次郎を使嗾したのか。そういう頭がはたらくようにも見えなかったが、あの変態的な話は、本人を見て、いかにもやりそうだという感じがした。
ほかの誰よりも、その風貌と行為が合致して考えられたのだ。

（間違いない……）

と、頷いたが、

（なぜ、あんな奴が、おれを陥れたのか？）

あんな変な奴とは、一切関係がない。恩讐もない。赤の他人のはずだ。

狙われなければならぬ理由はないのだ。

しかし、天馬を押えれば、一応の答えが出る。

陰謀のからくりがわかる。むろん、いまさら、それがわかっても、覆水盆に還らない。人も斬っているし、理由はどうあれ、旗本の身分には戻れない。

解明できたあとは、妻のお美津を非業に死なせた復讐ができるわけだ。

あの天馬を殺っても、もはや死んだ者は還らぬ。が、何とも理由のわからぬままでは、お美津も浮ばれない。

「よし、いってこい」

老爺が天馬の来たことを告げたとき、左近は妙心を立たせた。

「せいぜい歓ばせてやれ」

「はい……」

「天眼鏡を持ってきたのなら、うんと奥まで見せてやるがいい」

「あらいやだ」

「気取られるなよ」

「大丈夫ですよ……」

自信を見せて、にっこり笑った。

それが妙心の笑顔の見おさめになろうとは。

天馬は、いつもたっぷり時間をとる。二刻ほどもかけて愛撫するのだ。だから宵に来ても、帰りは深更になる。左近はそこを狙うつもりだった。

この屋敷の中で事件を起せば妙心の立場が悪くなる。ただでさえ非合法な商売だから、事が表沙汰になれば、お取潰しを喰ってしまう。

〝隠し売女〟は、

吉原遊廓で三年間のタダ働き、というのが御定法である。

江戸の公娼は、吉原開基の庄司甚右衛門によって、幕府権力の庇護を受けて繁昌している。

岡場所や湯女などを隠し売女として、これを摘発することで吉原を繁昌させ、収益を分けどりする。むろん、そのために、吉原認可の条件として、不逞浪人や徒党の密告や逮捕の協力などが定められている。

吉原は、司直の犬を承わることで、絢爛たる不夜城を築き上げたのである。

安い岡場所や、夜鷹舟饅頭などこそ、庶民の僅かの慰めであり、幸いうすい男女のいたわり合いの場所であったが、権力は、そういうものをみとめない。

妙心が入ってゆくと、すでに天馬と名乗る男は素っ裸になって、大あぐらをかき、おのれのものを

弄んでいた。

まるで、妙心のくるのが遅いので、むずかる倅をなだめてでもいるような手つきだった。

「こりゃ、何をしていたぞ」

「あら、何も。天馬さまと聞いて、急いできたのではありませぬか」

「どうだか、先の客が、執ッこくやっていたのであろうて」

「いいえ、天馬さまが、今宵の口あけ」

「ほんとか」

「ほんとですとも」

「見せろ」

ふいに足をつかんだ。

こんな乱暴もいつものことだった。普通の状態では、駄目な男なのだ。

素ッ裸で、おのれのものを弄んでいながらその小さなものは、少しも昂奮を示していない。

この男は骨太の逞しい体軀に肉がたっぷりついているから、その前に突起しているものが、やけに小さく見える。

対比しなくても、一般よりは小さかった。怒張したときでも、二寸そこそこ。

異人は別として、古来日本の男性は、五尺の軀に三寸のいのち、と称われてきた。

三寸あれば一応及第である。平均的には四寸、巨大なほうで五寸。

天馬は妙心の足くびを握ると、その場に引き倒して、ぐいと八の字に左右に押しひろげた。

「あれ、酷い……」
悲鳴をあげるほど、天馬は喜ぶ。
「喚け」
と、いう唇の端に、唾が白く泡吹いて、もうたらたらと涎を流している。
「嘘吐いたら、赤貝咬み切ってやるぞ」
言いざまに、裾の中に首を突っ込んでいる。
頭で裾をかきわけ、中へぐいぐい突っ込んでゆくのだ。
むさ苦しい五分月代の頭である。その髪毛が女のふくらはぎから、ふとももへとのぼってゆくと、被虐的な快感で、妙心は身をふるわせるのだった。
理性で、嫌だと思うのと痴楽の快感は別である。乱暴な男に犯される快感が、妙心を貫ぬいた。
まるで、犬に舐められているような……。
温かい呼吸と、縦横に動く蛇の頭のようなその舌の感触。ときどき、歯が柔襞を咬み、葎の丘を湿らせた。
かわいた丘も、生い茂った春草も、たちまちべとべとになって、鼻が唇が歯が、頬が、もみあげが、そこら中を、嵐に巻きこんで、荒れ狂うのである。
妙心は、悶えた。
畳に爪を立て、腰をゆすり、殺されるような叫びをあげて、のたうった。ものが小さいだけに、その代りを舌がするのだろうか。

天馬の舌は長く、先がとがっていて、くるくると、先がまるくなる。すぼめることもできる。すぼめて、固くすると、それは筆のようになり、おとこのものにない働きをするのである。亀頭の海綿体も、敏感にちがいないが舌ほどではない。

舌はものの味を見わける。甘辛酸苦、その微妙さを認識区別することコンピューターの及ぶところではない。

その動きはまた、女体の昂ぶりに反応し、呼応する。

妙心が歔欷して腰をふるわせると、泉は感激の流涕をくりかえし、その愛液の味覚がまた、この痴愚の舌を活動させるのである。

嫌いながら、蔑みながら、女体を蕩かす感覚は、何物にも勝った。

妙心は、いい、いい、とうつつの呻きを洩らしながら、死なないで、逃げて、と、叫んでいた。

天馬は動きをやめ、裾から顔をあげた。

その半面はべとべとに粘液で光っている。

雄偉な鼻も、口も、頬ももみあげも——その粘液は、女のそれであり、かれの唾液でもあった。

混然とまじりあい、異様な芳香を放っていた。

「何と言った」

「あ……」

「言え、逃げて、と言ったな」

「……」

「死なないで、と言ったな、どういうことじゃ」
「――そんなこと、言ったかしら」
虚ろな眼だった。
「言え、やい、死なないで、と、おれさまがどうして死ぬ」
「……」
「やい、言え」
「ねえ、天馬さま、もっとして……」
「言え」
天馬の手は、こんどは頭の代りに、裾へ入った。ぐいと指が入り、数本が入ると同時に、左手が、妙心の肩をおさえた。
「言うんだ、こうしてやる」
まるで、馬のそれのような逞しさで、五指が中で握り拳になろうとする。
「あ……」
息がつまった。
死ぬ、と思った。とたんに、すっと、ひきぬかれた。
「言え、どうして、おれが死ぬ？」
「勘忍して……天馬さまに死なれたら、こんないい気持になれないから」
「ふん」

そうかもしれぬ、と自惚れとともに、やはり、ニュアンスの違いを感じていたのだ。
「おかしいぞ、やい。逃げて、と言ったな」
獰猛な野獣ほど、危険本能に敏感なのである。
天馬はあたりを見まわし、あの皮革の合財袋に飛びついた。
しゅっと、紐をあけた。女の粘液で濡れた手がつかみ出したのは、一振りの手斧ではないか。
どしりと重く、冷たい刃を光らせた手斧はいかにも天馬の手に合って、ぴたりと、手にはりついたようであった。
「あれ……天馬さま」
漸く、妙心は、事態の重大さに気がついた。快感に浸っていられなくなった。天馬の野獣本能が、あれだけの言葉で、危険を察知したのだ。
「濃く太い毛虫眉の下で、兇々しい眼が光っていた。
「言え、誰がおれさまを狙っている」
「あ……」
「死ぬか」
低く圧えた声になっていた。冷たい殺人鬼の顔がそこにあった。
狂的に怒号しているときはまだいい。血と魂を怖れない冷静さになったときが人間はもっともおそろしい。
妙心は憤然とした。

「死ぬか」
詰めよって振りかぶった斧がぎらりと光った。
「言え」
「い、言います」
「誰だ、そやつは」
「ね、根子間左近さま」
「彼奴が！」
「源次郎とやら、あの御浪人のことを……」
「言うたのか？」
頷いたとたんに斧は落ちた。
ぐわッと、頭骸骨が破れる音とともに、血汐と脳漿が噴きあがった。斧は妙心の脳天から鼻柱まで割りつけていたのである。
絶叫が、左近に聞えた。庭へ廻ってきていたのだ。
「あっ、妙心が」
左近は走りだした。
そのとき、茂みをざわめかせて、黒い影が、するどい唸り声で飛び出してきた。
あの犢ほどもあるむく犬だった。
巨大な犬に飛び出されて左近は抜刀した。たっと一閃した。むく犬の鼻先だった。白い光が犬を驚

かせた。
その隙に左近は悲鳴の方へ走り寄る。とたんに男が飛び出してきたのである。血のしたたる手斧をさげて。
「や、左近！」
天馬は叫んだ。
「うぬ、天馬というやつか」
「左近、退(ど)け」
血斧をまたふりかぶった。
その姿を見てむく犬が、左近へ飛びかかる姿勢になった。
左近は刀をかまえた。
猫を斬った先日の感覚が甦(よみがえ)った。
「こやつ……」
こんな巨大なむく犬は見たことがない。左近は卒然として、あの日の事件の〝むく犬〟が、こやつではないかと思った。
それと斧。
お美津の首を斬ったのは、刀ではなかった。斧だ……
「うぬか、お美津を殺したのは。うぬだな」
斧とむく犬。

間違いない。ふいに天馬が身を翻したのも、それを裏書きするものだった。

「待て！」

左近は追った。が、間に、むく犬が飛びかかろうとしてくるし、斬ろうとすると右へ左へ飛ぶ。巨体にも似合わず、むく犬は敏捷だった。

「くそ！」

天馬をとり逃してしまう。

木立が深い。その間を天馬は走ってゆく。馴れた足だ。とまどいがない。木の大きさも下枝の位置もよく知っているようだった。

もうすっかり暮れている。闇がかれに幸いした。そのことをむく犬も充分知っているようだった。

とうとう、左近は天馬を見失ってしまったのである。

5

（屋敷から出た様子はない……あの屋敷の中から、消えた）

左近は三日ほど後に、またこの比丘尼屋敷に舞い戻ってきた。

（何かある、ここに何かある）

そう睨みながら三日を我慢したのは、妙心の死が惹起した事件で、司直の眼が光っていないかとの慮り（おもんばか）からであった。

普通なら、ああいうことがあれば比丘尼屋敷を潰されてしまう。

だが、上層部に伝手でもあったのだろう。もみ消してしまったらしい。
（妙心は、おれのために死んだようなものだ）
一体、何人の犠牲があったことか。
この殺戮の渦の原因も、あの天馬を捕えて吐かせれば解ける。
左近は、塀を乗り越えた。
表から入れば、誰かに姿を見られるだろう。あくまでも隠密に事を運ばねばならなかった。
いまの左近には、一人の味方もない。奇怪な罠を仕掛けたやつと、町奉行所の役人たち。罠も、一人の仕業ではない。一人や二人のやりかたでは、ああまで巧妙にはいかない。その組織を突き止めることだった。
闇の中で、左近は目を光らしていた。
提灯を持った男が二人、入ってくるのが見えた。
二人とも頭巾をしていたが屋敷の中に入ったという安心からか、一人の男が、頭巾を脱いだ。
「むさ苦しいな、頭巾というやつは」
と、その男が呟やいた。
「ははは、もう少したてば、丁度よくなりますよ、空っ風を避けるには」
「顔を隠すには、だろう」
「両方ですな」
「用心せねばならぬ。夜陰の被り物は、お咎める受ける」

「なあに、あの布令は、死文になっています。岡場所の女たちが狩り込みをされるのはめったにないことで」

「甘く見ない方がいい、上手の手から水が洩れるということがある」

こう言った男は、式台にかかって提灯をふっと吹き消した。

玄関には、行燈が置かれて、老爺が板戸の内にうずくまり、何やら読本の頁をめくっていた。

その明りで、侍の顔が浮び上った。

浪人風であった。

これは左近の知らない顔だったが、無縁とはいえない。

お美津の生首を咥えたむく犬が、まっすぐに浅草にいって、いかにも主人の前に捧げるように、口から放した。

あの居合抜きの男。

〝猫目幻十郎〟であった。

もう一人の男は玄関で頭巾を脱いだが、老爺は、これを、

「猫浦さま」

と、呼んだ。

「如何なさいます」

「なんだ」

「猫目さまの、敵娼の順貞はよろしゅうございますが、妙心があのように」

「そうだな、誰でもいいさ」
「え？」
「ははは、男と女の出逢いなどというものはな、運命でな。誰か、あいたら、おれのところへまわせ」
「そのようにいたしましょう」
その会話を、左近は木の陰で聞いていた。
（あいつが、猫浦か）
もう一人の男を猫目と言ったが、その名前もはじめてではない。
浅草での一件は、左近も聞いている。そのときは、取乱していたし、猫目幻十郎などという妙な名前に記憶はなかったので、聞き流していたのだ。
その男か。
あのむく犬の怪といい、こうなると、幻十郎も関係者にちがいない。
（幻術をつかうという……）
容易ならぬ男だ。
浅草寺の奥山では、その幻術をつかって姿を消したという。
（あの男か……）
見たところ、別段変ったふうはない。
だが、幻術などというものは、明確には把握できないものだけに、かえって、むやみに斬りかかれ

ないのである。

また来た。

今度は一人だった。

「猫崎さん……」

と、老人が呼ぶのが聞えた。

たしかに、猫の字のついている者がくる。どういう理由だろうか、謎はそこにもある。左近はあの天馬が消えたあたりにいってみた。

隣家との塀がある。塀に隠し戸でもついているのではないかと思ったのだ。

だが、その様子はなかった。

甘い匂いが、夜気に漂っている。いちめんの虫の声だった。

先夜は、緊張のせいか、虫の声など聞えなかった。

甘い匂いは、若い女の肌と香がまざりあっているかのような錯覚を起させる。

闇の中に仄白く見えた小さな花の集合体は金木犀だった。濃い匂いが夜を浸している。

その傍を通ると、まるで空焚きの香煙に身を浸すようだった。金木犀の匂いが左近のからだをつつみ、それはしみ込んだように、うすれるとも思えないほどだった。

そのみごとな樹のうしろに、古びた井戸が見えたのである。まわりに灌木が生え、豆蔦がぴっしりと古井戸を隠すようにつつみこんでいる。

「ここか！」

古井戸は涸れて水もないようであった。

中をのぞいたが、むろん、夜だし、何も見えない。

草や蔓が内側にもからまり茂っていて、底無しの深さを感じさせる。

目を凝らし、中をのぞきこむと、冷たい風が舞い上ってくる。

(抜け穴ではないか)

そうは思っても、無気味だった。

暗い奈落に、むやみに降りてゆくにはよほどの勇気が要る。

(ここがどこかへ通じる抜け穴だとすると、逆に上って出てくることもあるわけだ)

天馬とむく犬が、いまにも出てくるのではないかとすら思った。

影が近寄って来たのは、それから半刻近くも経ってからだった。その男は、古井戸の傍へ寄ってから、習慣的にあたりを見まわした。

豆葛に蔽われた縁に手をかけると、ひょいと乗り越えた。古井戸の奈落へ身軽く飛び降りたのだ。まるで四ツ目垣でも乗り越えるような、縁側からでもおりるような、無雑作な行動だった。

(底が浅いのか?)

すとっと、音がした。

せいぜい五、六尺、人の背丈くらいしかないようだ。

左近もその通りに真似た。こうなったら乗りかかった舟だ。たとえ下が地獄であっても、あとへ退きかえせない。

案ノ定、意外に浅く、底があった。井戸がこんなに浅いはずはない。いったん埋めてあったのを掘りかえしたか埋めかけて中止したのか、どちらかであろう。風は左手から吹いてくる。

(横穴だな……)

思った通りだった。

微かに灯明りが見える。左近は身をかがめて、足音をたてぬようにして進んだ。見つかれば言い訳はきかないのである。道に迷ったでは通らない。

古井戸の中に入ることなど、相当な決心と目的意識がなければ、できることではない。古井戸には人骨や怨霊のイメージがまつわっている。

横穴はせまく、天井も低かったが、二、三間進むうちに、天井が高くなった。

そのときになって気がついたのだが、この横穴は、方角はどちらに向いていたろうか。発見したことで夢中になって、方角を案じる冷静さに欠けていた。地下道には、二間置きくらいに、小さな燭が点されていた。

壁にとりつけられた貝殻の魚油が、小さな炎をゆらめかしているのである。

一直線ではなく、まがっているのは、地形のせいか、方向を晦ますためか。

ニャーオ、ふいに猫の声が聞えた。

闇の中である。その声がしなかったら、左近は見つかっていたろう。話し声が近づいてくる。

あわてて、壁に張りついた。すると、背後でも、話し声がした。

いま、かれが入ってきた古井戸から、誰かがおりてきたのだ。

（しまった！）

前へ進んでも、あとへ退っても見つかる。

壁のくぼみでもないかと、さぐった手が何かに触れた。取手のようだった。観音扉になっているのか。ぐいと引くと開いた。片扉だった。

むろん中は真っ暗。ともあれ、夢中で飛びこんでいる。

ぴたりと閉める。一足違いで、話し声は前を通った。

「――そのことは皆とも相談せねばならぬ」

「刑部はもう来ているはずですが」

「いよいよ危くなったら、ここも引き払うことになろう」

「そうなると、事件ですな、隠密の引っ越しは容易ではありませぬ」

「だとしても、だ、われらの企てが潰えることを思うと、困難でもやらねばならぬ。代々の悲願じゃ……」

この会話だけでは断片すぎて、意味がよくわからない。

ただ、かなりの規模をもって、何か事を起そうとしているらしいことが推測できるだけである。

（これは、大変な連中だぞ）

左近は、いよいよ、核心に近づいたと思った。

扉を開けようとしたとき、何かを踏んだ。固い石ころか貝殻のようなものだった。ぱりっと砕ける

音がした。
足もとである。その感触は、丁度、牡蠣の殻でも踏みつけたような塩梅だった。
あるいは外の壁の魚油をたたえたそれが牡蠣殻だったので、そう思ったのかもしれない。
が、牡蠣なら、そう簡単に砕けない。
(はてな?……)
左近は、あらためて、この部屋の中に興味を持った。
異様な、胸の悪くなるような臭いがする。
地上の金木犀の甘い匂いは、ここまで及ばないのである。
かれは懐紙を強く捻ると扉の外の燭の火を移しとった。
その小さな火明りは、何をうつしだしたろうか。
さすがの左近が、部屋の中にうず高く積まれたものを見て、思わず声をあげた。
骨。
骨の山。
一目で、猫の死骸とわかった。
白骨化した頭がごろごろしていたし、半ば白骨化しかけたもの、肉と毛が残り、蛆がたかっているもの。異様とも何とも、ここは猫の墓場。投込み部屋ではないか。
腰を抜かさなかったのは、左近の性根である。
(呆れたな、比丘尼屋敷の古井戸が、お猫さまの墓場に通じているとは)

紙縒りが燃え尽きたあとに、左近は憮然となっていた。

ともかく、中をさぐらなければならぬ。

陰謀が思いがけなく深く強大な組織らしいとわかって、ひるむどころか、左近はいよいよ闘志をかきたてた。

さっき通ったのは、猫目と猫浦か？　猫との関連が深いとすると、左近自身も、奇妙な自省を感じた。

（根子間が、猫間に関係しているのではないか？）

妙心の単純な受けとり方が、かえって、その真を衝いているのではないかとも思った。猫の声が、近くで聞える。

階段があって上へのぼれるようになっているが猫の声は、突っつきの部屋からだ。

部屋といっても、蝶番の戸がついているだけで、気の利いた猫なら、開けたり閉めたりできる。

階段をおりてきた二人——侍と町人ていの者が、戸を押して入るのが見えた。

あとから中を一瞥した左近は瞠目した。

猫、猫、猫。生きているやつである。

何頭か何十頭か、おびただしい数の猫がいたのだ。それが十幾つかの大小の檻に入れられている。

ニャーオ、ニャーゴ、ルルル……啼き声は啼き声を呼んで耳を聾するばかり。

室内には檻に囲まれるようにして畳が五帖ほど敷かれ、そこに卓子やギヤマンの瓶や壺や手焙り火鉢、秤などが置いてある。

薬種屋によくある、小さな引出しが無数についた小箪笥、大箪笥、その引出しのところには内容を書いた紙が貼られ、まるで、薬種屋と、医者と、何かの実験室という感じだった。

この元禄時代——

蘭学もエレキもまだ時代の文化につながっていない。こういう実験室のようなものは、異様というほかはなかった。

(何をしようというのか)

左近は見まわして、合点いかなかった。

金奉行として、金座銀座にはよくいっていたから、貨幣の製造工程に興味も持っていた。黄金を延ばす作業など面白い。

だが、こういう生物のことは、まるきりわからないのだ。

左近は猫の檻のうしろに身をひそめた。

こいつは何者だというように、十数匹の猫が、きらきら眼を光らせて、啼きたてる。

(やい、静かにしろ、気取られてはならぬ)

猫の眠りを妨げないためであろう。檻を積み重ねたり並べたりしてあるところは、照明が仄暗い。中央の畳の敷かれているところだけが明るいのである。行燈が三つも四つも置いてある。

左近は、隠れ場所が見つかったので、ほっと一息入れて、ゆっくりと観察することにした。

その猫の檻の中で、ただ一匹だけ、珍妙な種類が目についた。

ちょっと見たところでは、ほかの猫とそれほど変ったように見えない。

左近が目にとめたのは、その一匹だけ、かなり余裕のある檻の中で悠々としていたせいもある。檻の外に、何か書いた紙が下っていたが、ここからは判然としない。

その猫は、奇妙に紅みがかった色をしていて、よく見ると顔つきも違った。口鼻のあたりがついと突出していて、歯がすさまじい。

猫は動物学的には、虎と同じだが、この珍なやつは、むしろ、虎よりも貙（いたち）のほうにちかい。猫と貙の合ノ子という感じだった。小柄なせいもある。

胴が細長くて、尻のあたりが、妙にふくらんでいる。いうなれば、一般的な猫族の間では、異種であり、珍妙なはずだが、羞じる様子もなく、一人で悠々として、欠伸（あくび）をしたり顔を撫でたりしている。猫の顔洗というが、その四肢も、どこか違うようであった。

その隣りの檻には、シャム猫がいる。これは左近も、諸国百獣譚という書物の絵で見たことがある。

（シャムロ猫こそ珍と思っていたが、あの妙なやつは？）

そのとき、猫目幻十郎と猫浦が入ってきた。

「どうだ、うまくいっているか」

しきりに、乳鉢で何か磨（す）っていた男は、

「まだ、何とも申せませぬ。面目ない次第でございますが」

「急がねばならんようだ」

と、幻十郎が言った。

「少し雲行きがおかしくなってきた。万一ということもある。急いでくれ」

「茂与七」と、猫浦が口を添えた。「アレをな、やったらどうだ」
「交尾でございますか」
「うむ」
「そのことでございます。長崎から次の南蛮船で牡(おす)が参るとのことゆえ、異種の組み合わせは」
「そのつもりであったが、間に合わぬ」
「しかし、たとえ成功したとしましても、必ずしも、麝香猫(じゃこう)が生れるとはかぎりませぬ。子供というものは、両親のいいところばかり貰って出るとは、かぎらないので」
「わかっておる。そういうことは。ただ事態が切迫しているのだ」
「でも、うまくいって、十匹に一匹、その見当でございますよ」
「……」
「下手をすると、まるっきり、麝香種が生れないかもしれませぬ」
「おどかすな」
「いいえ、これぱかりは。私がおそれているのは、そのことで、あの麝香猫が、二度と生めぬからだになったなら、あぶはちとらずで」
「——それもそうだな」
「長崎から牡が来さえすれば、これはもう、間違いなく」
「それまで、待てるだろうか」
幻十郎は、小者を促した。

「麝香猫をこれへ」
「はい」
ひょろりとして、胸でも悪そうな男が、一つの檻の前に来た。持ち上げようとした。
(やはり……あの珍物が、麝香猫だったか)
一人では持ち上げづらく、茂与七と呼ばれた男が手を貸した。
灯のところに運ばれてきた麝香猫は、はげしく啼いて、とがった歯を剝きだした。
「こやつ、まるで殿さまだな」
「いや、牝だからお姫さまでしょう」
「娘一人に婿百人か、いい気になっておる」
「珍種ゆえ、やむを得ませぬ」
「だから、大事にせねばならん、こやつ自身それを知っておる。小莫迦にしたような顔をしおる」
「幻十郎どのには、猫の肚裡の中がわかりますか」
「わからいでか、幻術はめくらまし、人の心が読めてはじめて上達するもの。修業はそれからよ」
「猫は人と違いますから」
「では、聞いてみよ、いまこの麝香猫が、何といっているか」
「……」
「猫浦どのは、馬鹿げたことを聞くと、な」
猫浦はむっとしてそっぽを向いた。幻十郎は歯牙にもかけないのである。

かれが、鰹節をそっと檻の間から差しだすと、麝香猫は、さっと前肢を出してとろうとした。
上のほうから入れると、立ち上って、両の前肢で摑もうとする。
「ほう、なかなかの芸達者だ」
猫浦が、珍しげに言った。
「芸ではない、食欲だ」と一蹴して、「茂与七、よく洗うてやれ、爪が汚れている」
「はあ」
「四肢ともにだ、指が五本、人間と同じだ、じゃから、霊猫ともいうのだ」
「なるほど、化け猫となれば、こんなのが、年古りて……」
そのとき、また一人入ってきた。
あっと、左近は声をだしそうになった。
(あいつではないか)
天馬だ。
れいの合財袋を担いでいる。
(やっぱり……あの中に手斧を入れているのだな。お美津の首を斬った手斧を)
飛び出したい思いにかられたが、いま姿を見せれば、この連中ぜんぶを相手にすることになる。
三人、四人なら、どうにかなるつもりでも、ほかの部屋に何人いるかわからない。
こういう地下蔵での斬り合いは、闖入者に不利だ。
袋の鼠なのである。

はやる心をおさえ、凝っと左近は待った。猫の臭いと啼き声と——異様な地下蔵で、左近の手は棚にかかったまま、抜く機会を、ただ、待った。

6

麝香猫の交尾。

これだけ猫がいながら、麝香猫はつがいではない。それだけ手に入り難かったらしい。

かれらの話では、麝香鹿の陰嚢から採った麝香を普通の猫に食べさせて、麝香猫を作ろうとしたらしい。

麝香そのものは、きわめて高価だった。普通の猫に麝香ができるようになると、画期的なことだ。

だが、これは失敗した。猫どもは、下痢しただけである。その汚物は、かれらの浅智恵を嘲けるが如く、香気をふり撒いた。

その次にかれらは麝香鼠を堺より購いもとめ、それを食べさせた。

が、これも失敗だった。三匹のうち一匹は口から泡を吹きおびただしく下血して狂い死している。

「麝香牛がいい。この牛の麝香牛たるいわれは、麝香そのものが採れるのではない。肉に麝香の香りを持つためだ」

だが、その名案はできなかった。麝香牛は一名、麝香羊という。

並の牛より小さく褐色の長毛が特徴で北方の産だ。牡は緬羊によく似た大形の角を持っている。

ところが、これはエスキモーの常食だということだった。

当時の本邦では、北方のほうの事情はよくわからない。その麝香牛を入手するのも至難だった。もっとも、その肉を食っているエスキモーが体内に麝香を発生しないとなると、猫どもに食わせても無駄だろう。

漸く南蛮船から入手した一匹の麝香猫も、牝なので、麝香はない。麝香猫も、その香嚢を持つのは牡だけなのだ。

陰嚢から内部分泌した成分が臍の周囲にある香嚢に吸収され、ここから少しずつ外部に分泌しては、牝を呼ぶ。

したがって牝にはない。

麝香猫もまた変らない。

この牝だけではどうしようもない。牡を購い、子を生ませ、繁殖させる。

それができなければ、香嚢を発生させるしかない。普通の猫にそれができるか？

この連中は、それが可能だと思いこんでいた。

失敗に失敗を重ねながら、まだ懲りる様子がない。

あの夥しい猫の白骨は、この連中なりに、腑分けして、研究していたのではないか。

みんなの話を黙って聞いていた天馬が、ぼそりと言った。

「シャムロの牡ならば、できるかもしれん」

「どうする」

「麝香猫と交わらせる。だいたい牝にできんで牡にできるというのがおかしい」

「子を作るのとはわけが違うぞ」
「それで牡の方へできるのじゃろ、交尾することで、逆に牝のアレが、牡のほうへ吸い込まれるのではないか」
「そうかもしれません」
茂与七がすぐに大きく頷いた。
「それで、ひょっとすると」
「直ぐやらせてみろ」
幻十郎も可能性を感じたようである。
この場の有様が麝香猫には、異様で、危険だと思ったのか、不機嫌な声で、うろうろしだした。
「気が立っている。みんないない方がいい」
と、天馬は言った。
檻から出した麝香猫は、天馬に首の、えりあしのあたりを圧えられると静かになった。
あのむく犬の黒主といい、天馬にはよく懐いている。
「さあ、シャムロを出すがいい」
シャム猫は檻から出されたが、尻込みしたままだ。
その股間を茂与七が愛撫した。胡椒のようなものが、ちぢこまっている。
「この季節じゃ、できるか」
幻十郎が心配そうに、扉のところでふりかえった。

「なんとかなる」
天馬には、猫の季節が大した意味を持たないか。
そろりそろりと肛門から女陰のほうへ掌で愛撫をくりかえしてやっている。
仄赤い肛門や女陰を見ても、シャム猫には昂奮する季節が過ぎてしまっているのか。
「やい、まだか」
天馬は、そこを愛撫しているうちに、自分が妙な気持になってきていた。
「シャムロめ、意気地なしめ」
「やはり春でないと……猫というやつは」
「人間さまと違っているからな、季節がこないと、役立たずか」
天馬はおれ一人でいい、といい茂与七を外へ出した。
一人になると、かれは、股をひらいて、下帯から、すでに硬くなったものをつかみだした。
妙心が言っていたように、小さい。
「やい、どうだ、これを見て、気が動かぬか」
麝香猫は凝っとしている。
見るような見ないような。
それから、倦んだように、のびのびと手足をのばして、欠伸をすると、ごろりと横になった。
「ちえっ、こいつが……」
こうなったら、天馬には、手は一つしか残されていなかった。

麝香猫の両肢をひろげ、顔をうずめようとした。
「きさまには、猫も女も同じに見えるか」
左近が背後にたっていた。
「あ……」
「声を立てるな」
抜刀すると、ぴたりと、咽喉につけて、
「話を聞こう」
「な、なんの……」
「お美津の首を斬ったことだ」
合財袋に手を伸ばそうとしたのを、左近の足が蹴った。
「そこに証拠の品がある」
「う、うぬ……」
「手斧が入っているはずだ、おれの妻の首を斬り落したときの血も、な」
「……」
「なぜ、妻を殺した」
「知らぬ」
天馬は開き直った。
「打ち易い、細っこい首だったぜ。ずばっとな、首がころころと」

「ぬ！　きさまにもその苦しみを味わわせてやる」
左近の刀が一閃した。
むろん、天馬は逃げようとした。その脛をさっと刀は削いで走った。
足を切れば、いくら逃げ足が速くても、あきらめざるを得ない。
「助けてくれ」
「なぜだ、理由を言え」
「知らぬ、忘れた」
「よかろう、おれがもはや浪人であることを忘れるな。どうせ、直参の身分に戻ることはできないのだ。こうなったら、なんでもやってやる」
左近の刀は再び閃いた。天馬の右足が、拇指から小指まで、指の部分をざくっと切り放していた。
「うあーっ」
「次はただ」
左近の言葉には威しはない。
「勘忍……言うから、言うから」
「誰が命じた？　何のために？」
「い、一族だ」
「なんの一族だ」
「おぬし……」

何も知らぬのか、と言いたげな天馬であった。

ふいに、そのときシャム猫が駈け上った。檻から檻へ——別段の意味はなかったろう。

だが、ふとそちらに気をとられた隙に、天馬は合財袋を摑み寄せている。

その手をむずと、左近の足が踏みつけた。

「手伝ってやろう」

中から手斧をとりだした。

むろん、渡すのではなかった。左手で手斧を振りかぶったのである。

「お美津の首を打ち落したように、うぬの首も、胴と離してやろう」

「助けてくれ、役目で、やったのじゃ」

「誰が命じた」

「だから、一族の、長老が……」

「そやつの名は」

そのとき、ふいに、麝香猫がかん高く啼いた。と思うと、さっと、左近の腕にとびついてきた。

手斧を持った左の腕である。するどい歯を立てた。

手斧をとり落している。斧は天馬の頭の上に落ちた。

ぎゃっ、と天馬らしくない悲鳴があがった。どういうかたちで、落ちたのか見きわめることができない。ただ、頭を打っただけか、鋭い肉の厚い刃が、ざっくりと裂いたか。

扉を開いて、幻十郎たちが駈けこんできたのである。

「や、左近だ」
「どこから、あらわれたか」
猫浦や猫崎が、争って抜刀する。左近は一跳した。猫浦を袈裟斬りにした刀が、背後から組みつこうとした茂与七の顔を斜めに削ぎあげて、猫崎たちがひるんだ隙に走りだしている。
その左腕には、麝香猫が咬みついたままだった。
なぜ、麝香猫が、左近を敵と見てとびついたのか。天馬を助けたのか。
こういう猫にもし敵意があるとすれば、自由を奪っているかれらのほうが憎いはずではないか。
(猫というやつは女と同じでな)
と、誰かが言ったことが、一瞬、脳裡を掠めた。
(可愛がってやれば、気味悪いくらいに懐いてくるからな、それもマタタビをやるだけじゃだめだ。牝には牡のように、牡には牝になったつもりで可愛がるのさ)
そうか、天馬のあの女の秘所を愛撫するに馴れた、あの執こい指が、麝香猫の鋭敏な陰部に特別の刺激を与えたのか。
左近は、せまい地下蔵から階段を駈け上った。
血刀を咥える。左腕に咬みついていた麝香猫をひき放した。左腕に痛みが奔った。その手でえりくびをつかみぶら下げた、血刀の尖先を、麝香猫に擬しながら、歩きだした。
階段を上ったところは、土蔵の中だったのである。数人の影が、さっと散った。
なんと、ここは、隣家のタタリ屋敷ではないか。そうにちがいない。人が忌んで近づかないタタリ

屋敷を秘密の場所に使うのに、比丘尼屋敷を利用していたのだ。

空屋敷に出入りすれば、人目に立つ。

比丘尼遊びをしたあとで、帰ると見せて古井戸からこちらにくる。

「なるほどな、考えたものだ。だが、ここももうおしまいだろう。さあ、退けい、おれのからだに指一本触れてみろ、うぬらの命より大切な麝香猫が冥途の道連れだ」

悠々と庭を横切りながら、左近の胸に湧いた疑問は、

(なぜ、麝香作りに、ここまでせねばならないのか)

と、いうことだった。

無残なまでの殺戮と大仕掛の秘密組織、ただ、麝香への執着などという程度のことでは、考えられないことなのである。

秘帖盲暦

1

池がある。蓮の葉が水面の半ばを埋めている。さしたる広さではない。畳にして、百帖ほどのものか。西湖を模した池の岩石が面白く、四辺の配置は盛土を吝まず、奇岩を重ねて深山幽谷の趣きをだしていた。

この庭はまだ造られてから、十年と経ていないのだが、金にいとめをつけぬ造りかたが、みごとに、江戸市中に幽邃境を現出させている。

その池の面に——

樹上から舞いおりた小鳥が、チチチ……と、羽を休めかけて、ぱっと、舞い立った。

蓮の葉が動いた。波紋がひろがる。

水が割れ、黒いものが出た。布を被った頭であることは、水面すれすれに、光る双眸があらわれたことでわかる。

その眼は、蓮の葉の間から、遠くを見た。

方丈が見える。距離はおよそ二十間。

中で動いている男の顔がよく見えない。頭は静かに、あたかも風に吹き流されるが如くに、蓮の葉

をわけて、岸に近づいてゆく。

と、びっくりしたように、頭巾の頭が沈んだ。書院の男が立ち上ったからである。

鉢のひらいた青頭の法体があった。腕に猫を抱いている。

「――何ごとじゃ」

「尾上さま御到着にございます」

方丈の外から、ひょろりとした所化が告げた。

「おお、御案内いたすがよい」

野太い声である。本人は殊更、大声を出しているわけでもあるまいが、よく響く。立ち上ったところを見ると、六尺に近く、肩巾の広い、頑丈作りのからだが、聖僧というイメージに遠い。

頭のかたちは、お義理にも良いとはいえない、凹凸の多い見るからに、逞しげな怪僧という感じであった。

肩巾も広い。これだけの立派な寺の住職というには、ふさわしくない。

一人でいるとき、かれは法衣の片肌脱ぎで、胸毛をあらわにしていた。陽春にはちがいないが、蓮の花が咲くには、まだ間がある。片肌脱ぎするほどではない。

汗っかきなのか、そのほうが性にあっているのか。

抱いていたのは、斑の虎猫だ。

うるさげに、ぽんと投げ棄てて、肌を入れた。

虎猫は、主のこうした扱いには馴れているのか、ひらりとおりたって、一度、にゃーオ、と啼いて、

悠然と、廊下を歩きだした。

その眼がこちらを見たような気がし、また池の頭は、ずぶりと沈んだ。

住職が、衣服をなおしている間に、その客は廊下へあらわれた。

「おお、これは尾上どの、ようこそ見えられました」

「本日は、急な代参を仰せられましたゆえ」

ゆったりと大輪の牡丹が崩れるように坐った女は、大柄の派手な顔だちで、絢爛(けんらん)たる打掛の模様のせいばかりでなく、花という感じが強い。

「それは重畳(ちょうじょう)、毎日御代参があるとよろしいがな」

「まあ、ほほほほ」

「尾上どのが毎日、見えるなれば、この庭に花など植える必要がござらぬ」

「そのような大仰な」

うれしいのだ。否定しない。

「まことにお美しい」

ぬけぬけと言って、

「おや、またたびが落ちていましたわい」

と、尾上の膝もとから拾って、廊下へ投げた。虎猫のそばへ落ちてきたが、じろりと見ただけである。

贅沢な猫は、ふんと鼻を鳴らしただけである。

またたびなど珍しくない、と言わんばかりの態度だ。
和尚のほうは、そのまま、つと尾上の手を握った。
「あれ……」
「お美しいな、この手、この指、まるで、天女のために作られたようなもの」
「お放し下さいまし」
「なんの、美しいものは美しい、美しいものを愛でるのが、人間の暮しでござるて、花もな、着物もな、小判もな」
「……」
「価値あるものは、みんな美しい、そうではござらぬか」
「はい」
「世の中には醜いものは、いっぱいある。が、その逆に美しいものは、少ない」
「……」
「少ないゆえに尊い。のう尾上どの、そもじさまは、その美しい御方」
「……」
「はじめて、そもじさまを見たとき、愚拙はこの世で、生きた観音さまに逢うたかと思いましたぞ」
「まあ、お戯れもほどになされませ」
「戯れではない。天下の隆光が申すこと、かけらほどの嘘もおざらぬ」
「でも……」

尾上は、手をひっこめようとするが、隆光の手は、やんわりと握っていながら放そうとしない。巨きな、節くれだった指である。

握っているだけではなく、その指が動いている。巨きいくせに、器用に動いている。

女の指のまたを、撫でさすっている。まるで、秘所を撫でられているような感じだった。

尾上は、かっとからだが熱くなって、

「――和尚さま……」

と、あえいだ。

「隆光と呼んで下され」

「はい、隆光さま……」

まるで、暗示にかけられたように、女は、大奥女中表使いの権威も、すでに失ってしまっている。

「お美しい」

歎息とともに、また言った。

「そもじさまの美しさにひきかえ、なんと、この身の醜いことか」

「――いいえ」

かすかに打ち消したが、これは、お世辞にも否定するのが辛いほどだ。

大きく分厚な、めくれかかった唇、突きだした黄ろい乱杭歯、大きくてあぐらをかいた鼻の穴は、黒々と内奥をのぞかせている。眼窩のくぼんだ奥眼は当時悪相とされていた。その眼玉もまた濁っている。眉毛はまたあるかなしかにうすく、突き出た頬骨といい、貧相で下品で不逞で好色であった。

大奥の女中と一口に言っても将軍のお手つき中臈や京都から堂上衆の姫などが側室になるのだから、教養がなければつとまらない。

その束ねをするとなると、大変な才覚が要る。そこらの無教養な尻軽女では、上女中にもなれない。尻軽でも馬鹿でも、目鼻だちさえ男好きがして、将軍の気に入られさえすれば、玉の輿に乗ることはできる。

だが、取締りとなるとそうはいかない。大奥の高級女中はいうなれば表と同じ役人であり、会社なら重役クラスだ。

春日局の例を見てもわかるように大変な仕事だ。本人が色気過剰では、役目が果せない。

二十代でも年寄と呼ばれることがある女たちだが、しかし、生身の人間だ。

よほど心が枯れきって、病的な男ぎらいなら別だが、普通の女ならときには、男がほしくなる。

代参にかこつけての、芝居見物なども、大っぴらにやらなければ、大目に見られる。

だが、身分あるだけに、かげ間買いや役者買いは、難しい。

もっと、下っ端の若い女なら、宿下りのときにも、堪能できることでも、高級になるほど難しくなる。

お供が多いし、身分の制約がある。

だが、からだは若い。熟れている。美食で健康で、男の匂いのない女護ケ島暮し。一たん外へ出ると、どんな男でもいいから、という気持になる。

隆光には、そんな高級女中たちの心がよくわかるのだ。

打掛の豪華に反比例して、脆い女心を。
「――かなしい……」
無骨な隆光の口から、そのような弱々しい言葉が洩れようとは思いがけなかった。
「醜く生まれたことがな」
「……」
「そもじのような美しい女性を見ると、忘れていたことが、思いだされる。男は顔にはあらずと思うてものう」
「――そうでございますとも」
「とは申せ、御女中方が、ひそかに役者買いをなさる気持がよくわかる。女も男も、美しいほうがよいゆえのう」
「いいえ、いいえ、殿方(とのがた)は……」
「殿方は？」
「あの……」
詰った。
その手が引かれ、隆光の股間に触れた。
「あ……」
「これか？」
そういったかと思うと、ぐっと、強く、おっつけられている。

硬いものを摑んでいた。女の手は、法衣の下着の上からだったが、たしかに、おとこを摑んでいたのだ。

「の、の、やはり、これしかあるまいのう」

「はい……はい……」

ぼうと上気し、眼がかすんだ。手の中のものは熱い。

(見たい！)

その欲求が突きあげ、尾上は、あえいだ。

「見たいであろう、おとこを」

隆光の囁きは、まるで、天の啓示か、悪魔の誘いだった。

「どうじゃ、見るがよい」

隆光は、どっかと、あぐらをかいた。

下腹の、その中心部から、巨大なものが屹立した。

尾上の掌ではつかみきれぬ。四指は拇指と触れあうことがなかった。

瞠目した女の眼は、はじめ羞恥と恐怖と不安に、おどおどしていたが、しだいに、好奇と興味で、かがやいてきた。

かっ、と火を噴かんばかりに赤らみ、天を衝くが如くにそそり立ち、妖しい芳香を放っているのだ。

すでに、隆光は彼女の手を放している。

にも拘らず、尾上の掌は、吸いついた如くに、それを摑んで、肩を波うたせているのだった。

「如何じゃな……」
「……」
「尾上どの」
「は、はい……」
答えはしたが、もう、心はそこになかった。ただ、情念だけが、二十歳半ばのからだの血を逆流させ、じっとりと汗をかいていた。
爛とかがやいた眼は、一瞬の目ばたきすら惜しいように、男のものを見つめている。
その眼の中で、ますます赤みを増し、芳香を増し、伸長度を増してゆくかに見えたそれは、火の柱となって、女のからだに情感を呼び起し、愛しさで、身をふるわせたのであった。
隆光は、女の自由にまかせるように、両手をうしろについて、身をそらした。
下肢はあぐらをとき、大きく八の字に開いている。
その八の字の中に、いつか、じりじりと、入っている尾上だった。
「の、美しいであろうが」
「はい……」
「男は顔ではない。いやさ、これが、男の顔じゃよ」
すでに隆光は四十九歳。だが、その体軀は三十代にしか見えぬ。
そそり立っているものは二十代のものだった。よく使いこまれ、磨きがかかって、おとこの独特の妖しいかがやきを見せている。

たしかに、それは〝美〟と呼べるものかもしれなかった。
「これが美しければよいのじゃ、のう、男はこれしか、誇るものがない」
「り、立派でございます」
「美しいであろう」
「まことに。この世の何にたとえればよいのでございましょう」
「観音様の微笑みよ」
「……」
「弁財天の女体よ」
「はい、わたくしも……」
「好きになされ」
その言葉を待っていたように、尾上は、顔を伏せた。
巨大なものを含むには、あまりにも、尾上の唇は小さい。
小さいが、唇はぽってりと肉が厚いのである。その唇で、すっぽりと含んだが、漸く雁首を咥えるだけであった。
「愛でられよ」
唯々として、それにしたがった。尾上の顔は上下した。
音がした。水たまりのはねるような、その音が、一層、女を夢中にした。
おのれの口唇のせまさを、舌で補うように先端を舐め、口をすぼめ、咽喉を鳴らし、女は一生懸命

になっている。

ますます、おとこは、そこで充実してくるのだった。

隆光は、すでに両手を遊ばせていない。女の打掛を脱がせ、帯を解き、小袖を脱がせてゆくのだった。

脱がされるままになっている。

まるで、一つことに夢中になって気がつかないように。いや、気がついているのだ。ただ、羞恥が、その自覚を打ち消している。

気がつかぬふりをすることで、尾上は、大奥女中のプライドを保ち、被虐的な感覚に遊んでいるのだった。

そんな痴態を、虎猫は陽だまりにうずくまりながら、時々、ものうげに眼をあけて眺めている。

猫の眼だけではない。池の蓮のかげから凝視している眼のあることにむろん、気がつかぬ。二人の痴態を見守っているその眼は、ゆらゆらと蓮の葉の揺れるように、岸へ近づいてゆく。

大奥の女中ほど、豪奢な衣裳をまとっている者はない。

脱がせるとなると、手間がかかる。が、その手間もまた、一つの楽しみだった。

その間中、女の口唇は、舌は、歯は、そして泉のように溢れる唾液は、かれの天を突くおとこの柱を愛撫してやめないのだ。

剝くほどに、解くほどに、絢爛たる衣裳があるいは金糸を光らせ、紅絹を展げて、さながら百花乱れる花園のように方丈を彩ってゆく。

「ふふふ、よいぞ、よいぞ」
「ああ……」
含んだままの、女の感歎詞は、言葉にならない。
すっかり裸にしてしまうと、隆光は、女体をうつ伏せにして、背後から抱いた。
両手は女の胸のたかまりをつかんでいるのである。
こうなると、もはや、大奥女中の権威も思慮も何もなかった。
日ごろは、部屋子やお針ノ者を、あれほどきびしく叱りつけ、皺ひとすじ、汚点ひとつにまで、雷をおとす女が、その衣裳を褥にして、歓喜の叫びをあげているのだ。
男女のからだの下で、衣裳は無数の皺を寄せ、噴きだす汗にまみれて、きしきしと悲鳴をあげた。
早くも、女は洩らしている。
男のものを口にしただけでも、情感は盛り上っていたし、裸に剝かれてゆくという感覚が、女体を被虐的な歓びでとらえた。
隆光がからだの位置を変え、そこに硬いおのれをあてたとき、女の裡からあふれたものが、熱い先端を冷ますように濡らすのを知った。
「いい、いいの……いいの」
常に冷静な隆光が、うつつになったのは、女体の目のさめるような白さと、臀の冷たい、滑らかさであった。
隆光は女体にかぶさり、はげしい動きをくりかえしながら、眼をうつろにした。

虎猫が、ゆっくりと、その視界を通りすぎる。
それは影のように見えた。
涎で衣裳を汚しながら、喜悦の声をあげる女に、いつか隆光も声をあわせていた。
この白昼夢の中を現実の影が通った。
二人のまぐわう姿を冷笑しながら、その影は通ったのである。
池からあがった男——
濡れ足のまま、廊下から部屋の中へ入ると床の間の違い棚から、文箱をおろし、朱房の組紐を解いて、中をあらためた。
が、その中には目的のものはなかったらしい。
袋戸棚を開けると、中に巻物が積まれている。つづれ錦の表装に貼られた題簽を素早く見てゆく。
「……」
これだ、というふうに、その男は頷いた。頭巾のかげの眼が光った。
この間、隆光も尾上も、そんな男に気がつかない。裸身を汗にまみれさせて、快楽をむさぼっているのだ。
男は件の一巻を摑むと、来たときと同じように、ゆっくりと出ていった。
頭巾をかぶり、筒袖にたっつけ袴である。
背が低く、そのわりに肩巾が張っている。刀をさしていないが、代りに、帯のうしろに、研鎌がある。

鎌の柄に鎖がついていて、分銅がその端にある。築山の陰に入って、濡れた着物を脱いだ。頭巾もとり、下帯一つになった。その間、件の巻物は咥えていたのだが、繁みの下から、包みをとりだし、素早く着替えると、小門の方へ歩きだした。

書院ではまだ、痴戯はつづいている。

「気がついたら吃驚するだろうな」

乱杭歯を剝きだして、にやりと笑った。

柿を潰したような顔をしているが、年齢は若い。根子間左近が見たら、恟ッとするにちがいない。

この男、あの手斧つかいの〝天馬〟を小型にしたように似ている。

2

この破戒寺——

知足院という。もとはここからほど遠からぬ柳原南にあったのだが、八年前の元禄元年にこの神田橋外へ移され、御祈願所となった。

神田橋御門は、江戸城十八門の中でも重要なところだ。

ここを通れば、本丸の大手がすぐである。

現在でもそうらしいが、当時は殊に、将軍の権力は絶対だったから、武家地でも町家でも、〝御上の御都合〟ということになれば、簡単に屋敷を取払われる。

それは納屋を毀すより早い。犬小屋を移すようなものだった。

一ツ橋から神田橋までの河岸を〝ばんきの河岸〟と呼んだ。その意味は不明だが、ばんぎと書いたものもあるから、〝板木〟つまり、寺院などで、刻を知らせたり、食事その他の合図に用いた叩き板のことであろうとする説が強い。

濠を作るときに、それを叩いて人夫を督励したとか、いろいろいわれているが、その真偽はともかく、この河岸は波形にまがっていて一ツ橋際には大名屋敷が三、四軒、神田橋寄りには旗本屋敷が、一ブロック数軒ずつかたまっていた。

くりかえすようだが、城を囲繞する濠割りは、外部の侵入を阻むを第一義としている。橋の外側に屋敷を賜わるというのは、大変なことである。

その旗本屋敷を一ブロックと半ブロック強制的に移転させて、あとに、この知足院を移した。だけではない。以前の五、六倍の広さになった。移転させられた旗本は八軒ばかり。

隆光なる坊主が、〝怪僧〟と呼ばれ、羨望と憎悪と、恐怖の的になったのは、ゆえなきではない。なぜ、こうしたことが生じたか。一口に言ってしまえば、将軍が暗愚ゆえの政治の乱れにちがいないのだが、この犬公方綱吉をただ、暗愚というのは、間違っている。

犬公方といわれるほどの、気狂いじみたことさえやらなかったら、あるいは、徳川十五代の中で、賢明さを称えられ名君とうたわれたにちがいないのである。

学問があり、明敏で、学者や芸術家を優遇し、文化の華を咲かせた。その功績は多いが、詳述する枚数がない。

ともあれ、一面、脆い部分があった。学者や芸術家に共通した脆さかもしれないが、神経が細い。

からだも丈夫ではない。そのため、子供にめぐまれなかった。
側室は多勢いるが、生れない。はじめに一男一女出来たのだが男児が夭折してから、さっぱりだった。
生母の桂昌院が大そう案じて、神仏の加護をたのむようになった。これが、綱吉の名を千歳の後まで犬公方の汚名を残させることになる。
桂昌院は家光の側室である。於玉ノ方と呼ばれていたのが、これだ。桂昌院は知足院にいって住職亮賢に相談した。
亮賢はむかし京の仁和寺の学僧だったが、桂昌院の幼な顔を見て、栄達を予言したという。
桂昌院が家光の寵を得るに及び、この亮賢の知足院を祈願所とした。桂昌院が男子出生を祈願して生れたのが綱吉だという。
べつに祈願しなくても、生れるものは生れたろうが、当時の人はそうは思わない。
綱吉が将軍になるに及び、亮賢には護国寺を建立して住職に据えた。いまの護国寺が、それである。
亮賢はおのれが抜けたあとの知足院の住職に隆光を推薦したのだ。
隆光はもと大和長谷寺塔頭にいたが、招かれて知足院におさまった。亮賢としては、強力な連帯力を得たことになる。
信じ易い桂昌院と綱吉をたぶらかすには、隆光はもってこいの人物だった。さすがに亮賢が目をつけただけある。
権僧正知足院となったこの男、真言僧であるが、人徳もなく、学問もいい加減なものだった。

女に対しては、経験が深い。大和の長谷寺では、いささかもてあましものだった。悪は悪の匂いに敏いというが、亮賢には共通感覚があったのだろう。

坊主の世界でこれだけのし上った男だ。

悪に徹したなかまがほしかったのであろう。

もともと、徳川家は、仏教に対しては抵抗力がない。

草創期の天海僧正や金地院崇伝のことはよく知られているが、かれらが、黒衣の宰相といわれ、徳川家の黒幕だったことはまぎれもない事実だ。

が、徳川家にとっては、この怪僧たちは政治家としての家康や秀忠の学問の面での欠落部分を補ってくれ、永代政権の基盤を作るに役立ったという感謝こそあれ、その否定面を衝く者はいない。

徳川権力の、仏教願望は、裏を返すと、宗教的弱さというしかない。

亮賢と隆光はスクラムを組んで、徳川政治の奥へ入りこんでいった。

もしも男子出生祈願などが、実際に功を奏するものなら、桂昌院の今度の願いも、霊験はあらわれたろう。

いくら権僧正隆光が祈願しても、まるきり、綱吉の愛妾たちには、そのきざしがあらわれなかった。

あまり効果がなさすぎると、権僧正の地位も危くなる。

そこで隆光はこう弁じた。

「これは畢竟、将軍家が前世に殺生を重ねたゆえではございますまいか」

むろん、当人に言ったのではない。

桂昌院に、固く口禁めを誓わせた上での言葉であった。

「すべて人には因縁がござる。前世の因果は今生に於て浄めねば、後生は望めますまい」

「では、どうすればよいのですか」

桂昌院は身をふるわせた。

多くの人間は、〝後生〟に弱い。地獄の業苦という威かしが、宗教の威力だ。

隆光は、

（馬鹿な婆ァめ）

と、蔑みながら、表情はもっともらしい権僧正になった。

「左様……これは殺生の報いゆえ、まず、今生に於て、殺生をなさぬこと」

「はい、それはもう」

「人間でだけではありませぬぞ、生ある者すべてに、恩恵を施さねばなりませぬ。ただちに左様に申し上げて、畜生鳥類、すべての殺生を禁じなさるがよい」

政治は、女に容喙させたところから崩れはじめる。

その典型であった。女の弱さが、隆光の口車に乗って、政治に反映させた。結果は、犬猫の方が、人間の生命よりも大事にされることになったのである。

動物の中で、殊に、犬を大事にさせられたのは綱吉が戌歳生れのためだった。いまから思うと、無知も甚しいが、当時はとにかく、その出鱈目が罷り通ったのである。

こうして、綱吉の悪政がはじまったのだが、その張本人たる隆光は、この知足院の広大な境内に、

伽藍を充実させ、着々と、地歩を築いていった。

（おれの目的は大僧正だ。これだけでは満足せぬぞ）

隆光は、爪を磨いた。

（まず、寺号を改める。知足院では、何やら小寺の感じだな。亮賢は護国寺などと御大層な寺号をつけおった。国を護る、か、ふん……それなら、こっちは護持、護持寺ということはないな、護持院……悪くないな）

そして、綱吉を参詣させて箔をつける。新義真言の僧録所たらしめる。

それらの目的に近づけるのは、何といっても、大奥の女中を動かすことだった。

その尾上は、綱吉の愛妾お伝ノ方の右腕だった。

尾上の口からお伝を動かす。愛妾お伝の言うことなら、綱吉は耳をかたむける。

桂昌院はもう色気がないから、そちらは専ら、仏の功徳と口八丁でまるめこみ、こっちは手八丁で、自在にする。

両者を巧みに操って、目的をとげようというのである。

むろん、それだけではない。隆光は、側用人の柳沢吉保や、勘定奉行の荻原重秀などとも手を結んで、利権を増やしていった。

たとえば、紀国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門らに各寺院の建築や修復を請負わせて、莫大なリベートをとる。

「有難きみほとけに、近づくのでござる」

といえば、桂昌院も綱吉も一ころだった。

殆ど無制限に伝票を切った。こんな会社は、いつか潰れる。会社ではない、役所だから潰れないが、財政は左前になっていった。そんなことは隆光の知ったことではない。

その日も——

尾上が髪の乱れを侍女になおさせて帰っていったあと、殆ど入れ違えのように、奈良茂がやってきた。

いつもこの男は夥(おびただ)しい進物を持ってくる。

たいてい四ツ手駕籠に山のように盛りあげて、反物(たんもの)や、珍しい香炉や、紫檀の机や置物や、鼈甲(べっこう)細工や、時には千両箱を菓子箱に外側に桐の箱を作らせて運びこんだこともある。

「いつぞやのお話、もうそろそろ……」

と、奈良茂は促した。

この男は、金儲けと色話しか念頭にない。

「おお、寛永寺の根本中堂創建の話じゃな」

「はい、是非とも、この奈良屋に」

「困った」

と、顔をしかめて見せた。

こういうところは隆光は、天性うまい、売僧(まいす)なのである。

「わしだけならよいが、柳沢さまがな、紀国屋を御ひいきときている」

「もし、それではお話が違いまするぞ」
「あのことよ、あのことが、確実になれば、わしの方から強引に左様に申し入れることができるがのう」
「長崎から需めまする麝香も、このせつずんと減りましてなあ」
「そのことは去年から、耳にタコが出来るほど聞いているわい」
ぷいと、隆光は横を向いた。
「それゆえ、大丈夫かと聞いたのじゃ。もし奈良茂がならなんだら、いやでも紀文のほうへゆく」
「それは殺生……」
「やむを得まい」
「それに就いて、お願いがありまする。門外不出と仰せられた、あの秘文を、一時お貸し願えれば」
「駄目だ」
「まげて、何卒」
奈良茂は、風呂敷包みをずっと差しだした。
「――菓子か」
じろりと見て、興味もなさそうに言う。
「はい、名題のもので、千両菓子と申します」
小判千両。しかし、これも、政府御用達の大寺の伽藍、神社の社殿造営だったら巨利を摑める。
「それほど申されては、愚拙もあきらめざるを得ぬのう」

と、膝を浮して、
「だが、断わっておくが、愚僧も、全部読んだわけではないからの」
「それはもう」
「真偽もわからぬ」
「承知の上でございますよ、権僧正さま」
「それならよろしい」
隆光は立って、袋戸棚を開けた。
と、悔ッとなって、この男らしくもない叫びを洩らし、大きくのけぞった。
袋戸棚の中には、虎猫が坐っていた。
巻物を並べた上に、ちょこんと坐っていて、何気なくあけた隆光を、じろりと見た。
それから、身を起して、ひらりと、飛びおりた。
「なんじゃ、こやつ……」
そのとき、ふっと、予感に似たものが、背を寒くして通りすぎたのである。
かれは、巻物を見た。次々に手にとって見た。
狼狽が、顔を歪め、眼を剝かせた。
「無い！」
「え！　なんと……」
奈良茂も腰を浮せた。

袋戸棚から、巻物がかき消された。舌打ちをひびかせ、呪咀の言葉を吐いて、隆光は、惑乱した。

「ええい、さっきまであったのに、ちゃんと見たのに、まさか、まさか……あっ」

思いだした。呆然となって佇んだ。

あのあとで、尾上が、ふっと呟やいたのだ。

「――濡れている」

それが、何を意味するものか、放ち果てたあとの虚ろな気持では判然としなかった。

「足あとのような……」

とも言った。

が、それも、狂態を示した尾上の放心のはてのうわ言としか聞えなかったのである。

虎猫の足あとであろう、と漠然と思っていた。

尾上のからだに溺れて、いつになく虚脱した隆光だった。

奈良茂に見せた顔は、蒼ざめていた。

(嘘ではないか)

演技ではないかと思ったが、隆光はその疑いの眼をはねのけるのも、もの憂げに見えた。

「誰かが、盗んでいった」

「しかし、いつ？　さっき見たと仰せられましたな」

「尾上どのが来る前じゃ……あっ！」

尾上と殆ど入れ違いのように、奈良茂は来た。

そのときはすでに盗まれていた。ということは、二人が裸身をからめ、汗にまみれているとき、盗人は入ってきたのだ。

（見られた？）

隆光がおそれたのは、そのことである。

裸や痴態を見られた羞恥ではない。知足院隆光が大奥高級女中と淫猥な行為にふけっているのを見たやつがいる、ということであった。

いうまでもない。

このことが公けにされたら、隆光は、目的をとげるどころか、首が飛ぶ。

破れ寺の名もない僧ですら、破戒のむくいは、裸で傘一本足駄一つで寺を放逐されるのだ。

江戸では曝しの上に、遠島だ。なまじ将軍家祈願所に指定された以上、その反動は大きいはずであった。

3

研鎌が帯のうしろにある。

男は小走りにゆく。神田橋から東へ——河岸をゆく。このあたり、いわゆる鎌倉河岸になる。

湯女風呂が多い。たらりと長い暖簾がかかって、白い顔がちらちらする。

暖簾には、その見世の紋が大きく染め抜いてある。家紋からはじまったものであろうが、家号であり、風呂屋の名称になる。

輪違屋、桔梗屋、花菱屋、というふうに。その一軒、房紐のついた大きな瓢箪を白抜きにした柿色暖簾の前に来た男はひょいと、背後を振りかえった。

素早く、眼を八方にくばってから、暖簾をはねて入った。

ほかの湯女風呂は、たいてい、女たちの顔があった。

湯女風呂の御禁止は、枚挙にいとまないほど出ている。

夜鷹狩り、岡場所つぶし、と同じように、吉原の要請で、検挙された当座は、自粛しているが、ほとぼりがさめると、またぞろ顔を出す。

客がいるから、その商売がある。権力でおさえても、圧しきれるものではない。

町奉行所のほうでも、命令がないかぎりは大目に見ている。

客を呼び込んだり、往来の者の袖を摑んで引いたり、二、三人で、無理矢理、ひきずりこみ、押しこんでしまうなどということさえなければ、見て見ぬふりをする。

といっても、そこには、たいてい袖の下が動いている。上層部には、多額の金がゆき、岡っ引や下廻りは、いやがらせにのぞいては、酒代にする。ときには、タダで女を抱く。

すべては納得ずくの社会だった。

ところが、つい先日出来たばかりの「ひさご屋」では、ほとんど客をひかない。

新しい見世は、それなりに流行るものだが

「あそこは、醜女ばっかりだ、あんなのとするくらいなら、豚を抱いたほうがマシだぜ」

そんな酷評をした者がある。

あながち、その男がモテなかったせいではないらしい。
たしかに美女がいないのだろう、そのうえに、もてなしが悪いのだろう。さらに高い、となれば、客の入る道理がない。
「ひさご屋かえ、せいぜい保っても半歳だろうねえ、三月も危いかもしれないよ」
桔梗屋の女など、ちゅっと酸漿を鳴らして毒吐く。
その瓢箪の暖簾が、まだ揺れているのを河岸の柳の陰から見ていた武士がいる。
浪人者らしい。深編笠をかぶり、袴はない。黒の紋服の着流し、博多の葵献上をきりりっとしめた腰は、まだ二十代の感じである。
(あいつは、たしか……)
と、ひとり頷くと、浪人者は、その見世へ近づいた。
紅殻格子のうちにも、女の顔は見えない。
これでは、まるきり開店休業ではないか。女のいない湯女風呂など、そこらの銭湯よりも始末に悪い。
だが、暖簾をはねて入ると、肥った女が上り框に坐って煙草を喫かしていた。
じろりと、斜めに見上げたものである。こういう見世の、客を迎える態度ではない。
「——あがるのかえ」
不愉快げである。
「いい妓はいないよ」

「……」

「病気でね、ほかの妓もね、お客の金を盗んでね、それから、鼻っ欠けの病気持ちがねえ、困ったものさ、もう見世はたたもうと思っているところさ」

べらべらと暗記したように饒舌った。

煙管の雁首をやけに吐月峯に叩きつけたり、まるきり、不愛想なのだ。これではどんな客でも帰ってしまうだろう。

「湯女を買いに来たのではない」

編笠はかぶったままである。

武士は、ぬっと何やら突きだした。

「これを、いま入った男にやってくれ」

「いま入ったって？」

「背の低い、横の張った……腰に鎌をさしていたろう」

「ああ、小天馬さんね」

小天馬！

やはり、そうなのか。

似ているとは思ったが、あの斧の天馬に由縁の者であろう。

「そうだ、その小天馬だ、間違いなく渡してくれ」

「はい、それであなたさまは」

「なに、渡してくれればよい。よく知っているのだ」
「そうですか」
不満そうな女将の顔を、笠の裡から見て根子間左近は外へ出た。
(吃驚するだろうな、彼奴め)
知足院の傍から尾行してきた左近であった。
隆光のことは、霊光院浄光の線から狙いをつけたのである。まさか、大奥女中と深い関係にあろうとは、左近は知らぬ。
もともと固物の左近なのだ。
だが、左近にとっての僥倖は、この小天馬を見つけたことだ。
もしも他の者だったら、それとわからなかったろう。
天馬によく似すぎていた。むさい五分月代といい、ひしゃげたような顔といい、寸足らずで横巾のある肩の張った男、歩きぶりまで天馬に似ていた。
一方——
女将から渡された小さな包みをひらいた小天馬は、
「げッ!」
と、とびあがった。
「どうした」
と、のぞきこんだのは猫目幻十郎である。

「や！　それは……」
「麝香猫の首！」
仰天した。ほかにも三人ほどいたなかまも、息をのんで、刀を摑んだ。
「彼奴だ！」
「うぬ、根子間か」
「追え、斬るんだ」
文字通りのおっとり刀であった。どかどかと二階から駈けおりた。
この湯女風呂「ひさご屋」が、タタリ屋敷を出なければならなくなったかれらの、次の隠れ家であったことまでは、根子間左近は、まだ感づかなかった。
〝小天馬〟が馴染の湯女でも抱きに来たのであろうと思ったのだ。
「逃すな、役人のところに駈けこまぬまえに」
「斬ってしまえ」
だが、さすがにそのまま飛び出せなかったのは、まだ陽が高いことだった。
白昼、それも、繁華な鎌倉河岸だ。
そうでなくても、役人の目をおそれる連中のことだ。こんなところで騒ぎを起しては、自ら、お縄になるようなものだった。
「急くな」
と、あとからおりてきた幻十郎が言った。

「小天馬が尾けたであろう、大丈夫だ、あいつなら見失いはせぬ。すぐに行け。三日月を目印にして行くがよい」

まだ白昼、三日月とは異様である。が、誰も、不審に思わぬ。一揖して出て行った。

「小天馬め、秘巻を渡さずに行きおったが」

それだけが残念なように、幻十郎は呟やいた。

秘巻。

あの隆光の屋敷から盗み出してきた巻物であろう。

「落さねばよいが……」

左近の入ってくるのが早かったのだ。ちらっと、幻十郎が感じた不安は、麝香猫の首を渡して、あの巻物をとりかえすつもりではないかということだった。

が、その考えは打ち消した。あまりにもタイミングがよすぎる。

事実、左近が麝香猫の頭を持っていたのは、隆光にぶつかってみるつもりだったのだ。

いまをときめく怪僧隆光に体当りするには、それくらいのショックを与えないと、位負けしてしまう。

さらでだに追われる身なのだ。

「偶然か……ついていない」

ほんの一弾指の差だった。

小天馬は懐中から巻物をとりだそうとした。

「麝香谷秘巻、手に入れましたぞ」
と、言ったときだったのである。
麝香谷秘巻――
幻十郎は二階に戻ると、大きな仏壇の奥から、やはり巻物をとり出した。
その題簽には、
「根子間家系図」と、ある。
根子間左近の妻が惨殺され、奪われた系図とはこれではないか。
紐を解いて、ばらりと投げ展く。するするっと伸びた系図を凝っと見つめた幻十郎は、大きく頷いて、さらに文箱から、数葉の書き付けを選びだした。
びっしりと細字で埋められている。朱点や書き入れがほどこされたものであった。
系図と照合するように目を走らしていたが、
「むう……やはり、あれがなければ」
と、呻いた。
「麝香を手に入れねば、麝香木はできぬ」
「やはり、至難でしょうか」
いつの間に来たか、部屋の隅に、一人の女が坐っていた。そして、そのうえに、一匹の大きな犬。
むく犬である。あの黒主と呼ばれていた犬であった。
「おお、これは猫女さま」

幻十郎は居ずまいをなおした。
「どうか、そのままに」
「は、おそれ多うござる」
「いいえ、もはや、主従ではありませぬ。そのように固くならずともよい」
「しかし、われら猫一族は、未来永劫、主従の契りは変改すべからじと、血盟いたしておりますれば」
「その心根は、嬉しいけれども」
〝猫女さま〟は、寂しげに微笑む。線の細い美しい女性であった。
臈たけた女性というべきであろうか、年齢はすでに二十歳半ばになっていよう、透きとおるばかりの蒼白い皮膚に、仄碧色の眼をしている。小さな唇は、花びらを二つ合わしたようだ。女性を、あるいは唇を、花にたとえるのは陳腐であろうが、事実この女性には、俗世間とは隔った美しさがある。俗塵をまるきり知らないような気高いものだった。が、この女性は、かつて、卑俗な名前で呼ばれる湯女だったのである。
といっても、誰も信じられない。百人が百人嘘だとしか思わない。その肌には、数十人の男の手のあとも、かげも残してはいないのだった。
それはどういうことであろうか。心映えが俗を遠く離れているがために、俗に触れても、それの痕跡をとどめていないのだろうか。
「麝香木は駄目なのでございますね」
「いや、まだ、望みはありまする」

「では望みは捨てませぬ」
と、素直な返事だった。
「麝香を焚きこめた麝香木で造った御殿に住めば不老長寿、三百歳の寿命を保つとさえ申しまする。われらとしては、もしもそれが成るならば、姫を、猫女さまのお住いとしたい思いでやまやまでございますが」
「いいえ、わたしのことなど」
ゆっくりと、猫女さまはかぶりを振って、
「一族の再興のことを考えたらよい。百年の夜が、漸く明けるかどうかというときですもの」
「寛永寺根本中堂の御造営、日光の神廟修復、その他、伊勢神宮、熱田神宮などいずれも、麝香材を必要とするとのこと、奈良茂どののもとめに応じることができれば一族の再興は、ゆめ疑うことはない」
麝香猫の陰嚢といわれるその秘香をもとめて、多くの猫を犠牲にして、人工的に、それを作り出そうとしたかれらのこころみの裏には、きわめて現実的な仕事があったのである。
檜の白木を密閉した小屋に立てて麝香を焚く。三年三カ月三十三日、ひたすらに、香りが絶えぬように焚きつづけることで、その材木は、百年間、麝香を保つといわれる。
すなわち、麝香木である。
それだけに、不老長寿を信じられるのも、無理はない。
奈良茂と隆光、の密談は、このことだったのだ。かれらの様子では、猫一族がたとえ、それをやり

とげたとしても、はたして、約束を守ってくれるかどうかは、怪しいものなのだが。

百年、と猫女さまは言った。

百年とは、どういう意味であろうか。この元禄八年から、百年を遡れば、すなわち、文禄四年——この年のもっとも大いなる出来事は、太閤秀吉の全国検地がほぼ終り、養子にして関白を譲った秀次を高野山に逐い、自刃せしめたことであるが。

そのことに関係があるのか、どうか。

ともあれ、猫一族とは、何処より出たか。正史には、その名は、探すべくもないのだが。

そのとき、突然、びくっと、黒主は、耳をふるわした。

そして、ぬうと、身を起した。

「あれ、黒主、なんと」

猫女さまは驚いて、その頭をなでようとした。

とたんに黒主は歩きだしたのである。

「まあ、どこへ」

黒主は低く唸った。窓から、ぱっと、板廂へとびおり、さらに地上へおり、おそろしい勢いで走りだした。

「幻十郎、あれは、何として」

「不幸なことが……」

と、幻十郎は、唇をへの字にまげて、

「小天馬の身に異変が起りました」
「では？……」
「小天馬の五体から血を噴きましたぞ」
血噴は宙に飛沫き、瞬時にして、黒主の嗅覚に何かを訴えたのか。
「彼奴が……左近めが斬ったか」
きゅっと、おのれの膝をつかんで幻十郎は呻いた。
「愚かな左近め、一族たることにまだ気づかぬか！」

妖異猫一族

1

（三日月を目印にして行け）

猫目幻十郎は輩下にそう言っている。

白昼である。三日月とは何をさしてのことか、昼の月か。だが、うつろな昼の月を頼りにして、左近の行方をつかめるか。

追ったのは七、八人である。

むろん、すでに小天馬の姿は見えぬ。

「どっちへ行ったか」

見まわした眼に、湯女風呂の出窓格子の角に、ざくりと、切りこまれた新しい傷口があった。

白く切口を見せているのが、三日月形（なり）。

鎌の小天馬は、その鋭利な研鎌で、サクッ、サクッと傷を作ってゆく。

柳の幹にもあった。

家の脇に積まれた材木にあり、両替屋の軒にぶら下った銭の看板にあった。

この三日月のあとを辿って、小天馬のあとを追う——

小天馬が、もう少し慎重だったら、そして兄天馬が斬られた仇討ちを、という気負いがなかったら、悲惨なことにならなかったかもしれない。

根子間（ねこま）左近に小天馬が追いついたのは柳原のあたりだった。

〔ひさご屋〕の女将に風体を詳しく聞かなかったので、発見が遅れたのである。同じ道を往復して、三日月傷をつけた。

なかまが追ってくるのはわかっていたのだし、麝香猫の生首を届けるという左近の大胆で、烈しい挑戦ぶりを思うと、その行動は軽率の譏（そし）りは免れない。

柳原まで追って来て、姿を見失った。

黒の紋服の着流しで、深編笠をかぶっていたのだ。目立つはずであった。

「畜生！　どこへ行きゃアがったか」

狼狽して、眼をきょろきょろさせながら小走りに、そこらを走ってゆくと、

「小天馬」

ふいに背後で声がした。

ぎょっとなった。名前を呼ばれたことでも、意外だったのである。

「あっ！」

振りむいた眼に、柳の幹にもたれて、腕組みした左近の姿が見えた。

「泡を喰って何処へ行く？」

「う……う……」

「麝香猫を探しにか」
左近の声は笑みを含んでいる。
「そっちに行ってもいないぞ」
「う、うぬ！」
小天馬の手には研鎌がある。使い馴れた鎌である。兄の天馬が斧を使うように小天馬は鎌を使う。得物を手にしているとき、人間は奇妙に自信に満ちてくる。
平常のとき以上に、おのれを恃む力が強く作用するものだ。
「じゃ、麝香猫の首を……」
研鎌をかまえて、じりじりと近寄った。
左近はその姿勢を変えぬ。深編笠をかぶったままである。
「そうだ、おれが斬った」
「うっ！」
「お美津の首を斬ったのはうぬか」
「あ、あれは……」
「天馬だな。斧で……むごいやつだ。何も知らぬお美津の首を斧で斬るとは、天馬が生きているならば、伝えろ、根子間左近は、生かしておかぬ、とな」
「じゃ、麝香猫を」
「たわけめ、麝香猫だろうと、シャムロだろうと、たかが猫ではないか」

「大事な猫を」
「人間の首を斬るのは、かまわないのか」
「麝香猫のほうが大事じゃわい」
もとより、当初から異常さに気がつかぬ、天馬兄弟である。
その異様な風貌といい、生れ育ちも常人とは違うのであろう。理屈が通らない。
「兄貴の仇じゃわい」
小天馬の鎌が飛んだ。斬りつけると見せて、投げたのである。するどい鎌の先端は、左近の胸にざくっと入るかに見えた。
左近の袖が翻った。
鎌は刺さった。かれの胸ではない。柳の幹に——
身を躱した左近が抜き打った一刀は、小天馬の右の脇腹から、胸を掬いあげるように裂いて斜め上に走っていた。
血——
凄まじい噴血。
夜気を染めたこの血は、数町の距離があったにも関らず、むく犬の黒主の嗅覚に感応したようである。
ただ、血を嗅ぐのに、敏いというのではない。このむく犬と、天馬兄弟の間には、何か通じるものがあったのではないか。

いや、幻十郎との間とも異常に通じるところを見ると、この〝猫一族〟には、犬猫と相呼応するものがあるのであろう。

小天馬のからだから噴いた血によって、むく犬は、湯女風呂「ひさご屋」を飛び出している。

疾風のように、黒主は走った。

街から街へ、迷うことなく走った。

だが、黒主が柳原へ着いたときは、すでに左近の姿はなかった。

群衆だけが、まわりを取囲んでいた。

小天馬はかっと瞠目したまま、血まみれで草むらに横たわっていて、時々、びくっびくっと、手足を痙攣させているだけだった。

その眼は、柳の幹に突き刺ったおのれの鎌を見ていた。

未練気な眼は、そのまま極楽往生できないにちがいない。

黒主が走ってくると、

「うわっ、嚙み殺されるぞ」

「お犬さまだ」

「でっかいお犬さまだ、徐け徐け」

群衆は道をあけた。

そして、追われるように、その場を離れたのは、この事件に誰も関りたくないからだった。

歩きながら、左近は返り血を拭った。

まるで、かれ自身が斬られたように、胸にさっと一線を引いている。
手拭いで拭うと、何気なく捨てた。
その血を嗅いだように、むく犬はこちらへ走ってきた。
左近は露地へ駈けこんだ。
その露地では子供たちが遊んでいた。が、左近の姿に畏怖したように、わっと逃げた。
(あれは?……)
左近が足を止めたのは、むく犬が咥えているものに気がついたからだった。
生首ではない。
が、血塗れている。巻物らしい。
明らかに、小天馬の懐中から引き出したものだ。
「おい、こっちに来い」
物蔭に片身隠れして、左近は招いた。
むく犬は巻物を咥えたまま、近寄ってくる。が、二間ほど近くまでくると、つと足を止めた。
双眸だけは、凝っとこちらを向いている。怪しんでいる。濡れた鼻が、ひくひく動いていて、何やら訴えるような眼差しだった。
が、このむく犬は、かれらの一味にちがいないのだ。妻のお美津の首を咥えて走ったのもこの犬だ。
訴えるというより、その眼は、かれを責めているのではないか。
「もっとこっちに来い」

左近は静かに促した。

露地の奥へひきこんでから殺らないと、人目に立つ。白昼なのである。柳原では樹々がかれの行為を多分にカヴァしてくれたが、往来では、そうはいかない。左近の優しい声につられたようにむく犬は巻物を咥えたまま、一歩、二歩、寄ってきた。

「そうだ、もう少しだ」

視線が宙で火花を散らしている。左近の殺気を黒主は敏感に感じているのだ。利口な犬だ。うかつには近寄らない。左近はそれと気づいて、つと、はずした。眼をはずしたのだ。殺気がそれた。

「う、う……」

黒主が近寄る。

眼をそらしたまま、左近は見当をつけた。もう一歩だ。もう一歩——そこだ。とう！　と身をひねって抜き打っている。ぎゃおん！　と、黒主は咆哮した。手ごたえがあった。黒主は飛び上り、どさっと倒れた。

が、次の瞬間、ぱっとはね起きている。凄い眼で、左近を睨んで吼えたてると、さっと身を翻した。たしかに斬った。手ごたえはあったのだ。が、浅傷だったのだろうか。走り去る姿は、やはりよろめいている。あとに巻物が落ちていた。

題簽には、

〔蛇甲谷襍記〕と、ある。

一見、何やらわからない。

が、これが小天馬の懐中にあり、むく犬が咥えてきたことを思うと、大事なものにちがいなかった。左近は懐中にした。ともかく、早く姿を晦ますことだ。かれは露地から露地を抜けた。

(血の臭いを消さねばならぬ)

古着を買うか。そう思ったとき、

「もし……」

と、呼止められた。刀に手をかけて振り向いた。はげしい表情になっていたはずだが、これを微笑が迎えている。一軒の戸口に女が立っていた。

「もし、お着物に血が……」

「なに!」

「袖のところに」

あわてて見ると、たしかに血糊がべっとりついている。

「拭いて進ぜましょう。お入り下さいまし」

女の言葉は優しかった。

そのときになって気がついたのだが、家の軒下に湯気が流れている。湯気は何かを物語るようであった。溝をお湯が走っている。銭湯だろうか。すい風呂で湯を取り換えているのか。

女が、垢ぬけした肌をしているのを見ると、

(湯女風呂だな)

と頷いた。湯女風呂の裏口だった。

「どうぞ、中へお入りになって」
女の微笑には他意がなかった。
その血がどういう種類のものか、詮索もしなければ、頭から嫌いもしない。
ただ、血を附着させたまま、急いでいる男に、厚意を示しただけであろう。
湯女のような職業には、尋常の社会と違うものがある。
正業ではないという負け目があるのか、また身を落した職業の意識があるのか。
逆境にある者への、同病憐れむ気持が先に立つのか。
正常を誇る社会にはない、温かいものが、面識もない仲で流れるのである。
「忝けない」
左近は裏口から入った。
湯女の派手な浴衣が干してあったり、鑵焚きが、山のような薪を、焚口に突っ込んでいたりした。
その女は、湯を汲んでくると、左近の袖の血を拭いてくれた。
よく見ると、裾にもついている。
いずれも、黒主を斬ったときのものであろう。
気のつく女だった。
左近は、紋服の血を拭っても、小天馬や黒主の血の臭いが、からだに残っているような気がした。
「そうだな、ついでに、湯に入らせて貰うとするか」
「まあうれしい」

と、女は大仰に言って、
「でも、よろしいんですか？　なんだか、無理にお誘いしたようで」
「嬉しいのだ。そなたの厚意は忘れぬ」
むろん、計算もはたらいている。
ここに入っている間に、敵の目をくらませる。
まさか、こんな近くで、悠々と、湯に入って、女に垢をかかせているとは思うまい。
だが——
その考えは甘かったようである。
かれが裸になっているとき、その裏口から入ってきた女があった。

2

「——ここで使うて下さいまし」
その女の口から、そのような言葉が出るとは思いがけないほどだった。見るからに品のいい、高貴なばかりに楚々たる女性だったのである。
湯女は〝なまめきたる女の、優しき手にて客の垢をかく〟といわれるように、無骨な男のような手では感興が沸かないし、なまめきたる女であることも、要求される。
この女には、その男心をそそり立てる濃艶さというものがない。
が、そう申し出をうけて、〔やなぎ風呂〕の亭主は、

「そうですかい、はたらきたいというのなら、まあ、やってみなせえ。それァ、銭にはなるが、思ったより難しい仕事ですぜ」
「――以前、おぼえがありまする」
「へ？　おまえさんが、へえ、そうですかねえ、湯女をねえ」
とても、そんなふうには思えない。百人が百人、否定するだろう。
（わからねえもんだ）
と、亭主は首を振った。
（これだから、女はわからねえ）
こんな淑やかな女の前身が湯女とは。
湯女風呂の亭主が首をかしげるくらいだから、たしかに、意外すぎる。
（どこかのお大尽に囲われたのか、それでこうお上品になったのか。で、そのお大尽が死んだ、で、またもとの湯女へ逆戻り……そんなところかえ）
かもしれぬ。でないかもしれぬ。
どちらにせよ、客が惚れて通ってくれさえすれば、商売は繁昌するのだ。
したがって玉さえよければ、こういうところでは、素姓など詮索しないし、面倒な手つづきをとらない。
すぐさま、その場で、話が成立する。
「まあ、やってみなさるか」

「おねがいします」
と、立って、女は帯に手をかけた。
湯女は派手な模様の浴衣を、裾みじかに着て、赤い襷をかける。
中には、腰のもの一枚で、客にサービスするところもある。
「名前は何だね。都合が悪かったら、こっちでつけてやってもいいんだがね」
「はい……めめ」
「めめ？　この目が二つかえ」
「いいえ、木の芽が二つ」
女は微笑した。
芽々と名乗ったのが、あの不思議な女性〝猫女さま〟であることは、すでに読者は気がついておられよう。
左近が〔やなぎ風呂〕に入ったのを、傷ついたむく犬が戻って告げたのか。
猫女さまが、自分から、この行動に出てきたのは、たまたま湯女の経験があったからである。
「わたくしでできることは、それくらいのこと」
と、微笑んだ。
「しかし、それではあまりにも……」
と、幻十郎がためらうのを、
「いいえ、わたくしがやります。みんなにばかり苦労をかけてはいられませぬ」

と、猫女さまは出て来たのだった。

湯女に垢をかいて貰うには、まず蒸風呂でからだを温める。

猫女さまが洗い場におりていったとき、丁度、左近も蒸れたからだから、ぽっぽっと湯気をたてながら出てきたところだった。

「お世話させて頂きまする」

洗い場にしゃがむと、左近のために湯を汲み、ざあっとかける。

それから、指を背中にあてて、つるりとこすってみて、

「よい加減にござります」

その馴れた指先は、この女に疑いを抱かせなかった。

強いていえば、身ごなしや顔立ちに湯女らしからぬものを感じただけである。

垢をかく——というが、爪をたてて掻きとるのではない。爪は使わない。指の腹でこすり、縒りだすのである。

ここのところ、念入りにこすったことがないので、面白いほど垢が剝けるようであった。

左近は、そのうちに、この湯女のことが気になりはじめた。

背中、腕、腰から、大腿部へと、手を這わせてくるのだが、その白い手が、内腿のあたりを入念にこすりながら、指先は、すべったように、かれの恥部に触れてくる。

(この女が……)

湯女は必ずしも売春はしない。

だが、売春する者が多い。珍しく清潔な感じだと思っていたところに、誘いかけてきたのだから、意外に思ったのだ。

「そなたの名は？」

「芽々……」

「……」

「ここの名です」

「いつからいる？」

「今日から」

正直な答えが、かえって、左近を戸惑いさせた。

「――客をとるのか」

「あなたさまなら」

即座にかえってきた。

「本名もお教えします」

関心のない女なら、本名を聞いてもしかたのないことである。

この湯女が、なぜ、そんなことを言いだしたのか。

垢かきが終って、湯をかけたあと、〝芽々〟は、妖しい媚笑を投げて上っていった。その謎めいた笑いの意味を悟ったのは、すい風呂と呼ぶ、普通の湯槽に入って、さっぱりしたからだで脱衣場にあがったときだ。

「あ……おれの着物は」
籠の中は空だった。
左近が狼狽したのは、大小と巻物まで、紋服、編笠などとともに消えてしまっていたことだった。
「一体、誰が盗んだ」
「おほほほ、芽々さんのお部屋でしょ」
掃除、走り使いをする中年の女が、変な笑いかたをして、
「お客さま、芽々さんは、今日が口あけ、一番客は情夫になるといいますからね、うまくおやんなさいよ」
「余計なことを申すな、情夫になる気はない」
「ほほほほ、そんなこと言ったって駄目ですよ、あんな綺麗な湯女なんて、あたし、長いこと、見ていますが、はじめてですよ」
「……」
「お客さまだって、そう思ったでしょうに」
たしかに、その通りだった。だが、それだけではない。いまは、女への興味は二の次の左近なのだ。
その部屋は、六帖に満たない、妙にせまい部屋だった。
日ごろは、その中年の女たちの寝起きに使っていたところなのだが、〝芽々〟の急な申し出で、あけた。
だから、板戸の中には、女たちの私物や、汚れ物などが突っ込んである。

花鳥の屏風や、厚くふんわりした夜具や煙草盆、煙管、それから、香炉など、雰囲気を嬌めいたものにする小道具類がない。

左近は、入って来ても、突っ立ったまま、この室内をじろりと見て、

「おれのものは」

と、冷たく言った。

「こちらに」

芽々は、腰屏風のうちを手で示した。

「勝手な真似をいたすな」

「休んでいって下さいまし」

「多用だ」

甘く見るな、と左近は、芽々を強く見据えて、下帯をしめた。

むろん、女の眼の前でも平気だった。

「——抱いて下さいませぬか」

女の怨じるような声にも、素振りにも、心を動かされない。

「おれは強いられるのが好かぬ。かような真似をしなかったら、あるいは、な」

手早く、着物をまとって、帯をしめる。

献上博多のよく似合う左近であった。

芽々——猫女さまは、寂しげに微笑んだ。

「わたくしも、かような真似はしたくはございませぬ」
「……」
「でも、やむを得ませなんだ」
「なんだと」
「わたくしの本名は……」
と、問われもせぬのに、名乗っていた。
「――猫女（ねこめ）」
「なに?!」
「猫女と申しまする」
さすがに、ぎくりとしたようである。
（猫目か……）
あの比丘尼屋敷で、猫目という名を聞いた。タタリ屋敷の地下で猫目幻十郎という名も知った。さらにはない名なのだ。
猫目、猫浦……
「猫目幻十郎の……」
「いいえ、猫に女でございます」
「なるほど、猫女か」
「根子間さまは……猫に間（あいだ）と書くのでございましょう」

（おれの名を知っている！）
やはり、睨んだ通り、尋常の女ではなかった。
おれを誘いこんだのか。この女が、あの連中の一人とは。
「あいにくだ」
と、突っ放した。
「根子間だ。大根の根に子供の子よ、お前とは関り合いはない」
「ございます」
きっぱりと、その女らしくない口調だった。
「でなければ、かようなものを御所持になることはありますまい」
猫女がつかみ出したのは、あの秘巻。
〔蛇甲谷襍記〕
だった。
「やっ、盗ったな」
「いいえ、戻して頂いたまで」
いうまでもなく、小天馬の懐中にあったものだ。
これは小天馬が、知足院の隆光の戸袋から盗んで来たものである。
何が書いてあるのか。
〝蛇甲〟というのがひっかかった。

蛇の甲。
これは関係がない。
湯の中でも、左近は考えていた。
(蛇の甲ではない、じゃこうか？　麝香の隠語か)
あとでゆっくり読もうと思っていたのだ。
「かえせ」
「お返しせねばならないのは御家の系図の方でございましょう」
平然として言う猫女であった。
「やはり、うぬらが……」
「一族の再興のためには、やむを得なかったのでございます」
「詭弁を申すな」
「貴方さまの、そのかたくなさが、かようなことに……事態を難しくしてしまったのでございます」
猫女は、巻物を手にしたまま、凝っと上眼つかいに視線を合わせたまま言った。
左近は、目の前が靄がかかったような妖しい気に囚われた。
(眠術か？)
切れの長い一眼ながら、男の心を囚えて離さぬ猫女の眼には、常人にはない妖気がこもっている。
「――御覧なされませ、もはや、貴方さまは助からない」
猫女は、無双窓を開けた。

外をのぞいた左近はあっと、思わず、身を退いた。
ものものしく身支度した町奉行所の役人たちが、この家を囲んでいるではないか。

3

「さ、急いで」
と、猫女は、つづらの中から、女小袖を出して、左近に着せかけた。
「これをお召しになって」
「女ものを？」
「捕まるよりは、マシでございましょう」
偶然に役人が来たのか、
(呼んだな)
と、思ったが、しかし、それも判然とはしなかった。
捕まれば、猫女だって、無事に済まないのである。
「さあ、早く、お寝り下さいまし」
夜具は客のためのものではない。したがって、うすく、垢じみている。いわゆる煎餅蒲団で、左近は女小袖を着せられて、そこへ寝かされた。
腰屏風をたてまわして、ちらりと見えるようにした。
「ものを言ってはなりませぬ。あとは、私にまかせて下さいまし」

天馬の策略にかかって、左近は上役杉岡を刺殺した濡れ衣を着せられている。
ここで捕まってしまっては、申し開きがたたなかった。
偽証した多部源次郎は死んだし、左近の立場は誰も理解してくれる者はない。
ここは、猫女のいう通りにするしかなかった。
すぐに、足音がした。
一部屋一部屋、虱つぶしに探してくるらしい。
がらっと、障子が開いた。
「おい、お改めだ」
威たけ高な声は、町奉行所の権威に反抗させない、牽制だった。
「——御苦労さまでございます」
猫女は、顔色も変らずに挨拶した。
「どのような方をお調べでございましょう」
「根子間左近と申してな、お尋ね人だ」
「——その御方は、もし捕まれば？」
「打ち首さ」
無雑作に役人は言った。
「公金横領の上、多勢を殺傷している。まず打ち首は間違いない」
「……」

「その女は、病気か」
「はい看病しているのでございます」
「下の病いか」
役人は下卑た笑いを洩らして、
「おまえも罹らぬようにするんだな」
それで去っていった。
ほっとした左近は、唇を噛んで女小袖を脱ぎ捨てた。
「くそっ、どうして、見つかったか」
「ほほほほ、町奉行所に告げた者がいます」
「なに！」
「わたくしでございます」
澄まして、猫女は言った。
「なんと！　密告者が、そなたか」
「はい」
きっぱりとした返事だった。
「もはや、左近どのが、昔に還れぬことを、認識下されたく存じまして」
いつか、湯女に扮したことも忘れて、猫一族の女当主の威厳を見せている猫女だった。
「左近さま、何とぞ……」

ぴたりと両手をついて、猫女は言った。
「一族のもとへ還って下されませ、一族の百年の怨みが、いまこそ、消滅できるときがまいったのでございます」
「……」
「根子間左近さま。根子間の字が違うために一族と無関係にお思いでしょうが、もともと根子間は、猫間でございます」
「……」
「われらの一族にまがうことなきは、系図を見れば瞭然たること」
「――ううむ、それで系図を盗んだのか」
「たしかめるためでございました」
「だが、なぜ、妻を惨殺した。あのような、むごたらしい殺し方を……」
「天馬が顔を見られたからでございます」
「じゃとて」
「一族の興亡が、この秋にかかっておりまする。甘い考えは……」
「だが、如何なることがあろうとも、あのような酷い殺し方は許されぬ。おれは許さぬ」
「そのお詫びは私がいたします」
「……」
「一族の百年の望みがかなえられれば、わたくしのいのちなど、要りませぬ」

「死んで詫びるか」
「御手にかかって」
と、猫女は、まじろぎもせず、左近の怒りを正面から受けとめた。
「死にます」
「――おれは、そのほうたち、すべてをみな殺しにせねば、妻は浮ばれぬと思うた」
「かれらの罪も、全部、わたくしが……それが一族の長の責任でございましょう」
到達した心境が、苦悩を超越させているのか、猫女の態度は静かだし、口調も淡々たるものだった。
「そのことは、しかと約定しておく。だが、いったい、その猫一族とは」
実際に、左近は何も知らない。
タタリ屋敷における麝香猫の実験のことは目のあたりにしたが、その野望の奇嬌さのために、百年の積怨とつながっているなどとは考えられなかったのである。
「これが、その謎をとく手がかりになりまする」
窓の外には、すでに役人たちの姿はなかった。左近を発見し得なかったので、あきらめて、去っていったのであろう。
一般からの密告には、かなりいい加減なものがあることを当局では知っている。
猫女の巧みな行為は、たしかに、左近の立場への認識をあきらめさせたようである。
「まず、御覧じなされませ」
巻物の紐をとくと、さっと繰り展げた。

蛇甲谷襍記——

それは、いうまでもなく、

〝麝香谷〟を隠した言葉であった。

一巻の中味は、どこやらの地図が、簡単な線と点で描かれたものである。

不思議なのは、字が少なく、奇妙な絵が描いてあることだった。

小さなコマ絵で、それは点綴されていた。

「——何だこれは？」

左近は首をひねった。

「おわかりになりませぬか」

猫女は微笑んだ。

「わからぬ。どこかの山らしいが……おかしな絵が描いてあるな」

猪の絵や、城の絵や、丸い輪などがあるかと思えば、松の木か何かの根っこ、鼠の絵もある。おもちゃの馬の絵もある。

「判じ絵か？」

「はい」

「絵を文字代りにしたのか」

「——お読み下さいまし」

そう言われても、急には、読み下せない。

もともと固い一方の左近だった。この種のものは、草紙などにあるようだが、左近はそうしたものは目を通したことがない。

「判じ物は、不得意だ」

「……」

「おれの頭は、こういうことに向いていないからな」

判じ物や謎ときに、得意がる者が多い。一種の頓智だが、空想力というよりは卑俗な生活の反映というほうが近い。

左近は秘巻から目を放した。

「一体、こんなものが、どうして、大事なのだ」

「わたくしたち一族は、百年の間、陽の目を見ないで、過してきました」

「……」

「それが、漸く、今日、世の中に出ることができる。その、これは大事な道しるべになるのです」

他人事ではない。この〝わたくしたち〟の中に、左近も入っているというのである。

軽格ではあっても直参として、御金奉行の職にあるかれは、いままで日蔭の身だとは思ったことはない。

この〝一族〟という言葉も、まだ実感がないのだ。

「――もし、芽々さんえ」

唐紙の外で老婆の声がした。

「燈芯を足しましょうかえ」
中の様子をうかがいながら聞く。当時の湯女は、燈芯の燃えつきるまでが、一ト切の時間だった。
左近は立とうとした。
そっと、その膝を女の手が圧抑えた。
「ええ、そうして下さんせ」
と、唐紙のそとへ言い、しなやかなからだを崩れるように左近へあずけてきた。
そのまま、老婆が去ってゆく足音に耳を澄ましていたが、猫女は、左近の内腿に手を這わせて言った。
「このまま、ここを出ては」
「……」
「つまらない……ねえ、左近さま」
女の眼が誘っている。妖しい眼だった。そこには、虚ろなものと、烈しいものとが、まざりあって、異様なかがやきを見せていた。
女のからだから甘い匂いが、ふいに左近をとらえた。猫女という名前の持つ不思議さが、女に動物的なものを与えていたのかもしれない。
なぜか、そのとき、左近は、それまで、まるきり考えもしなかったのに、女体を抱きたい衝動にかられたのである。
荒々しい感情が盛りあがり、かれは女のからだを抱き寄せていた。

「いいのか？」

それは、問いかけるというよりは、囁きにすぎなかった。

一族と聞いたことが枷になって、左近は、猫女を湯女と見なかった。

情慾は、その女の媚によって引きだされたようである。

猫女のほうでは、左近に抱かれ、口を吸われても、それ以上の昂ぶりや、情愛を示そうとしなかった。

すでに濡れていた女の秘所が、かれを容易に許している。それを〝弛み〟と感じるには、女の表情や姿態の妖艶さがかれをうつつにしたのである。

左近をうけ入れた女は、微かに眉根に皺を寄せたが、苦痛というよりは、まじわりのための礼儀だったようである。

二つのからだが一つになっても、しかし、猫女は両手を投げだしているだけで、自分の方からは、左近を抱こうともしないのだった。

その容貌の妖しさがなかったら、そして、その肌の抜けるような白さがなかったら左近は挑まなかったろう。

反応のない相手ではあったが、その異様さが、かれを快楽に導いた。

放ち終ると、女はゆるやかに身を起して、かれを念入りに始末した。

そこには、恋慕という情は見られなかったが、といって商売のためでもないのだった。

「これで、契りは済みました」

と、静かに微笑んだのである。
「もう、二人は離れませぬ」
「……」
「根子間左近さまは、猫女のもとへ還ってきました、そうですわね」
否やを言わせぬ勁さが、その笑顔の底にある。
それは性格の強さとか、ある意図から出たわけではなく、宗教的な、信仰じみたものだった。
「もう、猫の猫間さま、とお呼びした方がいいかもしれませぬ」
そういう間、しなやかな指は、柔らかい紙で、そこを拭い浄めている。
指は、ただ拭うだけではなく、かれに快い刺激を与えているのだった。
すぐに、その効果はあらわれた。左近の若さだろうか、むくむくと頭をもたげると、それを愛しげに見ながら、
「猫女と猫間……わたくしたちは、永遠に離れられませぬ」
そういう唇が、弛んで、皓い歯のうわべにじわりと光るものが滲み出てきた。
女は、そして、それが当然のことのように顔を股間に伏せた。
赧らみ、屹立したものを含むのも、自然の動作だった。唇も舌も、狎れ狎れしく、そこに戯れている。
それは、まるで旧知にめぐりあったかのような親しさで、まつわりつき、吝みない愛撫を与えてくる。

まるで、唇も舌も、それ自体、何かの先約のように、かれの情感をそそり、昂ぶりへ導くのに、渋滞がなかった。

いま放ったばかりというのに、左近はその快感の急激な刺激に負けて、

「いいのか、猫女」

と、呻いた。

男ののぼりつめようとした動きは、ふぐりに添えた手にも、握りしめた掌にも、敏感に反応したはずである。

が、いつかな放そうとしない、掌であり、唇であった。

「……」

咥えたまま、女は頷いた。

大きく顔を上下し、髪をふりみだすようにして、それを促している。

女の乳色の肌や、幽艶な姿態が、男を頂点に導くには不足がなかった。

左近がそこに到ったとき、女は、さらに強く、口をすぼめた。

眉根にタテ皺が寄り、強く吸いながら、舌はあざやかに動いた。かれが放ったものを次々と嚥下していった。

ごくごくと、咽喉が動き、女は低く呻いている。まるで、かわいた咽喉に甘露な神水を飲み下すかのように。

そして、そのあとも、いつまでも、舌と唇を駆使して、浄めるのだった。

（この女は……）

頭の芯まで痺れた快美感は、かつてない強烈さだった。不思議な気持で、左近は、猫女を見守っていた。

こういうことをしながら、しかし、猫女の態度には微塵も、卑屈さや、下司なところがないのだった。

「――よろしかったかしら」

暫くして、猫女は顔をあげ、静かに言った。

「うむ……」

「これで、一族の固めの式は終ったのでございます」

にこりとして、腰をあげた。

「なに、何と言った」

「猫一族の固めでございます。貴方さまは、系図を下さいました」

「いや……」

「それから、左近さま、血を……貴分さまの血は、わたくしのからだの中に入りました」

「……」

「もう、この血のつながりは、切ろうにも切れませぬ」

血盟ということも知らぬではない。

古えは、お互いの腕を傷つけあい、傷口をすり合わせて、血を混ぜあわせ、交換したものだ。

また盃にしたたらせて、これを混じ神水でうすめて、義兄弟の誓いをしたともいう。
だが、いま猫女がとった血盟の方法は、珍奇といわねばならない。
他に聞いたことがないだけに血盟の強さもまた、あるのかもしれなかった。
「さ、まいりましょう」
と、猫女は自分の着物を着終ると、左近を促した。
「何処へ？」
「旅に出るのです」
女の手は、あの蛇甲谷襍記一巻をつかんでいた。

4

「猫一族の悲願がどんなものであれ、おれはお美津を殺されたことを忘れぬ」
はっきりと、根子間左近は言った。
「このことが一族を救い、百年の苦しみから脱けさせるものだとしても、お美津をあのようなムゴイ死なせかたをしたことは許せぬ」
「……」
「このことははっきりと言っておく」
左近は、一同の顔を見まわしながら、言明した。
猫女の案内で、鎌倉河岸の「ひさご屋」に乗りこんで来た左近は、猫目幻十郎や、刑部らとはじめ

て、膝を接して、坐った。
「おれをおぬしらが必要としたことが、おれに罪を被せ、妻を惨殺してよい理由にならぬ」
「済んだことだ、左近」
と、幻十郎は手を振って言った。
「おぬしは直参、その固い御金奉行を、目ざめさせるのは容易なことではないと」
「そうだ、もしも、おぬしの望むような、静かな話し合いで、申し出たとしよう」
と、火傷に顔半面が爛れた男が言った。
「おぬし、話に応じたか」
「……」
「応じはすまい、耳を傾けはすまい」
「だが……」
「われらも考えたさ、一族のおぬしの女房どのは、いうならば、やはり一族、殺すのはよくない、とな」
「なれば、なぜ」
「時間がない。もはや、のんびりと問答している時間ではない。急がねばならんのだ」
「そういうことだ、左近、このことは忘れて一族の再興に力を貸してくれい」
幻十郎は片手をついて、大仰に頭を下げた。
「いやだ」

左近は妥協せぬ。
「おれは忘れぬ」
「あくまでも」
「妻のことを忘れぬ」
「……」
「一族再興には力を貸す。が、ことが成ったとき、仇を討つ」
一瞬、さっと、険悪なものが流れた。
この場にいたのは、領袖六人である。
左近の言葉が、天馬の死を要求しているのは、疑いもなかった。
が、天馬だけだろうか。
幻十郎や典膳に向ける左近の視線には、ゆるぎがない。憎悪を秘めた、兇々(まがまが)しいものがあった。
刑部は典膳にちらと、目を投げた。
(面倒だ)
(殺るか?)
という合図だった。
この殺気を削いだのは、猫女の笑い声だった。
「ほほほほ、一体、どうなされました」
猫女は、しなをつくって、坐りなおした。

すると、その甘肌と香料が、悩ましい女の匂いを室内に漂わして、矛先(ほこさき)を、はぐらかしたのである。

「左近どのは、われらが一族」

「……」

「この場の人々は、みんな同志ではありませぬか、え？」

微笑が、その言葉を裏書きしている。

猫女の言葉が何を意味しているか、知っている者は、知っている。

〝同志……〟

猫女のからだの妖しいゆらめきと、そのきれ長の焦点の定まらぬような灰色の眼は、微笑の謎を自ら解いている。それがわからぬ者がこの中に何人いようか。

幻十郎は、唇を曲げて眼を伏せ、典膳はあわてて眼をそらした。刑部は、うすい笑いで応えた。

「そうだ、お互いに、同志だ。目的をとげることが先決だ」

こう怒鳴るように言ったのは猫矢甚内という管槍(くだやり)つかいの達人だった。

管槍というのは、特殊な構造から成っている。詳細は後述する。

「そうじゃ、まず……」

「まず事が成らねばな」

「そうだ、左近らのことは、あとからゆっくりと、相談しよう」

みんななだめ顔になった。

「よかろう、だが、おれの気持は変らぬ。それだけはおぼえておけ」

左近は、毒々しく笑った。
それは、自分が、この異様ななかまに落ちこんだということを否定しながら、かれらの設けた罠に、結果として入ってしまったことの自嘲の笑いだった。
（おれがなぜ、入ってきたか、こやつら、誰も知るまい）
ただ、天馬だけを憎んでいるように思わせておくことも、この場合、必要であった。
（直接手を下したのは、天馬だ。天馬が斧でお美津の首を斬った……が、命じたのは、誰だ、この連中みんなか）
だとすれば、仇は、六人ぜんぶだ。
内部の事情がわかってくると、天馬などは所詮、愚かな殺し屋にすぎないことが判然してくる。
（殺るときは、一度に、だ）
左近は独り、肚裡で笑った。

猫一族の目的とは何か。
猫女や幻十郎たちから聞いたかれらの怨みとは、異様なものだった。
その話を聞いたとき、
（まさか？）
と、疑ったほどである。
百年前とは——

すなわち文禄四年。

前にも述べたように、この年の重大事項といえば、

二月七日　蒲生氏郷歿す。享年四十四。

四月十五日　豊臣秀吉病気、臥床。

六月二十六日　秀吉、石田三成らを聚楽第に遣わして、豊臣秀次に七枚の誓詞を捧げしむ。

七月十五日　秀次、配所高野山で切腹を命じられる。享年二十八。

八月二日　秀次の妻妾ら三十八人を京三条河原で殺戮。

八月中　秀吉、聚楽第を破壊せしむ。

――だいたいこういうところである。あとは朝鮮関係の問題があるくらいだ。

この年に、猫一族の上に何が起ったのか。

異常な事件が起っている。

もともと、東北の雄葦名一族から出て、葦名氏の内部抗争から山中に隠れ住んだ者たちを称い、その系譜は、遠く遡って、ペルシャからの移住民族ともいわれている。

その是非は、なにしろ古い昔のことだから判然しないが、この猫一族が放浪によって生活を立てていた者であることは事実らしい。

その生業とする芸は、猫を数十匹ひき連れて、もろもろの芸をなさしむ、と、あるお公卿さんの日記にある。この猫の芸というのは、珍しく、猿をまわし、鳥を飛ばせ、犬を使う、などの人々と一脈通じていることは事実だ。

それらの人々と別れて、葦名氏と結びついた理由も、事情もわからない。

戦国乱世にも奇怪なことが多い。そういう猫の芸だけでは、生活ができなかったのか、または、諸国流浪の経験が、戦国武将にとっては、大いに利用価値があったか、あるいはペルシャ系の音曲と、その舞いなどをする女たちに、美女が多く、寵妾となってのちに一族を定着させたか。

いろいろに考えられるのだが、それらを証明する資料に乏しい。

ともあれ、猫一族は、会津磐梯山一円を領有して、いわゆる山岳武士として、蟠踞していたらしい。

葦名氏が滅亡したのは、いうまでもなく、伊達政宗に攻められてのことだが、ここで猫一族は、政宗に返り忠をしたとも、その以前から、葦名義弘に反逆していたとも伝えられる。

その伊達政宗も、秀吉の奥州征伐で、この地を返上させられ、あとに封じられたのが、蒲生氏郷だった。

氏郷の治政の間、猫一族は、郷土としての存在を認められていた。

その理由は、世間には知られていない。

謎はここにあった。

単なる山岳武士の一族が、山間にひっそりと肩を寄せあって暮している。

その排他性は、その谷に近寄る者は、いずれも、変死したと庄屋文書にあるのを見てもわかる。

刀で斬られた者はない。

いずれも、谷から落ちたり、けものに噛み裂かれたり、血反吐を吐いて死んでいたり、どこも無傷なのに、息をひきとっていたりした。

そうしたことが、

「あの谷に近づくでねえぞ」

と、城下や猪苗代の人々を恐れさせることになっていた。

その谷の集落は——

したがって、誰も実際に入って見た者はない。が、伝わった話では、冬でも花が咲き、その辺一帯には、雪が積らないという。

春は梅と桃と桜が一度に咲き、杏(あんず)がこれを追い、夢のような桃源郷になる。

この谷だけ、雪が積らないとは、どういう理由であろうか。

そこだけ地熱があるのか？　ともあれ、不思議な谷であった。

この谷が滅んだのは、その年七月晦日のことであった。

突如、蒲生家から武装の兵数千が、闇夜に乗じて、谷を襲った。

蒲生氏の死後、名目的には倅秀行が十三歳で、あとを継いだばかり。僅か十三歳の凡愚な少年に、どれだけの威命があったのか。

もとより、猫ノ谷の人々は、驚愕し狼狽し激昂した。青壮年はむろん、老人も、子供も女も、武器をとり、闘った。

就中(なかんずく)、異様なのは、その人間以外のけものであった。万に垂(なんな)んとする軍勢が、このせまい谷に殺到したのだ。

谷はたちまち、阿鼻叫喚の修羅場となり、血が噴き、手が足が、首が、飛んだ。

殺戮は三日三晩、行われた。

この大軍でもって、暗夜の奇襲をこころみたにも関らず、勝敗の決着がなかなかつかなかったのは、闇に眼を光らした無数の猫が、そこここから飛び出し、牙をむき、爪を躍らせて、寄手に襲いかかったからである。

するどい爪は、眼玉をえぐり、顔に夥しい傷を与え、手を裂き、足に喰いついた。

「猫股じゃ」

「化け猫だぞ」

雑兵たちは仰天した。

泡を喰って逃げだす者もいた。刀や槍で斬り、突きまくろうとしても、ひらりひらりとこれを避けて、ぎゃおッと、飛びかかってくる。始末に悪い山の猫であった。

ために、あるいは岩から落ち、谷底へ転落したり、咽喉を食い破られた者は数知れずという。

凄惨な一夜が明けたあと、夥しい死体は、みんな眼玉がなかった。

むろん、寄手の死体にかぎってのことだが、刀で斬られた者も、鉄砲玉を喰って即死した者も、槍で串刺しになった者も、一様に両眼がなかった。

「猫股に食い荒されたのじゃ」

「眼玉を食われると、来世には、盲いてこの世に出るというぞ」

寄手は戦慄し恐怖し、それは、怒りとなり憎しみとなって、

「草の根を掘りくりかえしても、一人残らずぶち殺せ、猫股も、一匹なりと逃すまじ」

「谷から一人も出すな、生きているやつは、人間もけものも、すべて息の音を止めろ」

蟻の這い出る隙もなく、周辺を固められ、勢子に駈り立てられる虎や鹿のように、岩蔭や樹上や窪地や穴蔵に潜んだ人々も追い出され、引き出されて、なぶり殺しにあった。

「谷の者は、魔性ぞ、仮借すな」

女も子供も、幼児も、一切容赦なく惨殺されている。

ために、この谷は血で染まり、死体に群る山犬や禿鷹が、数日、喜悦の声をあげていた。

むろん、死体は放置されたのである。

死臭が谷をこめ、それは樹々や草花を染め、土壌に滲みて、年月を経ても、死臭は去らず、山賤などが道に迷ってこの谷に一歩踏み込むと、あきらかにわかったという。

臭気が充ちているばかりではなく、踏み込んだ者は、迷って出られなくなる。

そんな話が、真顔で囁かれ、それは、幾つもの実例があることだと、人々はしたり顔に囁いた。ために、

〝死の谷〟

と呼ばれるようになった。

いつごろからかは判然としない。会津風土記には、詳記してはいない。話をすることさえ禁忌とされたかのように、人々はこの谷のこととなると首をすくめ、

「くわばら、くわばら」

と、手を三度顔の前で振った。

会津富士と称される磐梯山の連峰にして、磐梯山頂より西に隔ること、ほぼ一里。厩岳、古城ケ峰、雄国山の群峰を南北に従えて、突兀と聳える猫魔ケ岳の北壁、清水沢に近い峡谷——

それが猫股伝説を残す、

〝死の谷〟——であった。

5

「——異常な話だな。奇怪というしかない」

左近はこの話を聞いて、吐息とともに言った。

「その谷でみな殺しにあったのが、われらの祖先だというのか」

「はい、僅かに、身をもって逃れ出た者も後難をおそれて、ちりぢりになりました」

「……」

「その数、三十人を出まいといわれまする。苗字に猫がつくのを手がかりに永年、探してまいったのも、一族の再興のためでございます」

それで根子間左近の苗字に、一族の匂いを嗅いだという。

猫間が、世を憚って、根子と変えたのではないか。系図を調べる必要の一つは、それであった。

たしかに、系図にはそれらしいふしがある。四代前まで、左近の家は旗本ではない。旗本になったのは、四代前に家から将軍の寵妾を出したからである。お湯殿の係り女中で、身分は軽いものだったが、美貌が将軍を欲情させた。

お湯殿で手がつくのは、あながち珍しいことではない。

寵愛の期間は短かくはなかったが、子が生れないため、お腹さまとしての出世はできなかった。

が、兄弟縁者が世に出る効果はあった。

左近の家ばかりでなく、ほかの猫一族にも百年の間、変化があったろう。

「――だが、猫という字が頭につく苗字の家が、すべて一族というのではあるまい」

「はい、違う御方もございます」

はっきりと猫女は言った。

「何度か、ええ、何人か、そういう方にお逢いしました」

それだけ、よく調べたのだという。

「もう一つわからぬことがある。一族を蒲生がなぜ、みな殺しにしたか、だ。確執があったにしても……秀行は当時十三歳とすれば」

「はい、それには、深い理由がございます。一族が、あの谷へ住みついたことも、そのことに関りがありまする」

猫女が示したのが、あの秘巻だった。

「蛇甲谷……つまり、麝香猫の棲む谷だったのでございます」

「まさか！」

麝香猫は天竺とか、南蛮のみ棲むという。

本邦に生息するなど、考えられない。

だからこそ、高価であるし、長崎からの輸入を人々は渇仰しているのではないか。

「……いつのころより、棲みついたかは定かでありませぬ。が、年のうち半分は雪に埋れるという山中で、あの谷には、なぜか、雪が積らない……地熱があるのでしょうが、樹々も、雪山とは思えぬばかりの緑に埋っているし、花々も、みごとな大輪が多く、色のあざやかさも、さながら、南国に遊ぶの心地がするほどとか」

磐梯山の奥にそのような桃源郷が存在するということ自体が、すでに不思議なのである。

地熱とは、磐梯が火山であるからか。

谷間は風の影響を受けず、地熱が地表を温めて、その一円だけ、別天地の樹木などを繁茂させ、雪害も受けぬとすると、あるいは、あり得ることかもしれない。

「いつのころより、どのような経路で、麝香猫が棲むようになったのやら、あるいは、猫一族が、麝香猫を育てる場所として、探しあてたものか……そのあたりのことになると、一切、わかりませぬ」

——だが、麝香猫は存在し、繁殖していた。

猫一族の主なる生活の資となったのを見てもわかる。

いわゆる安土桃山の文化は、長い戦国の時代を経てきた人々の、秩序の恢復とともに、贅沢へ向おうとする過渡期ともいえる。

その絢爛たる中で、香料がもとめられたのはいうまでもない。

蒲生氏郷が、かれらの保護に手を尽くしたのも、望外な〝小物成り〟（五穀以外の産物）に驚嘆随喜してのことだった。

氏郷は、天下への野心があったことは多くの史家の指摘するところである。

氏郷が石田三成と組み、関白秀次と三者の秘密提携によるところの次代を狙う計画も、淀君に秀頼が生れたことで、大きく狂うことになった。

秀吉にとって、急に秀次は邪魔者になってきたのだ。

氏郷は、この危機を見て、早急に事を起す必要を感じたという。

だが、冷刺な三成は、

(天、われらに組せず)

これをもって天命なりとして、ふいに背反した。

秀次の不人気を知り、氏郷の病気(胃潰瘍だったらしい)が兵を起すのを無理と見た。

あたかも秀吉も病んでいる。

事を起すには、あるいは、適していたかもしれない。が、如何にせん、氏郷が健康でないことは致命的だった。

三成は、背反するや、これまでの計画の、こんどは抹殺に専念せねばならなかった。

氏郷を毒殺した。

戦前にヨーロッパをふるえ上らせた〝青髭〟という殺人鬼がいる。金持の未亡人と結婚しては、毒殺するのだが、かれは捕まったあとで、こう言っている。

「どんな人間でも、病気をすることがある。ナニ、ちょっと頭が痛いだけでもいいんです。そいつに乗じて、投薬すればね、誰にも疑われずに済みます」

氏郷の病気は、三成が、毒殺の手を伸ばすのに丁度よかった。

その一方、秀吉に、秀次の陰謀を告げさせた。

「関白に不穏の噂がござります」

すなわち、聚楽第で、秀吉を暗殺するという。それも、刀槍や毒薬でもってするのではない。

奈良朝のころ、ひそかに行われたという、

〝楽死〟

あるいは香薬死、ともいう。

名香を一室で焚き、その中で魂を中天に遊ばさせ、虚ろの快感のうちに、安らかな死を迎えるという。

それが政治闘争がはげしくなると、他動的に、屢々、行われたという。

三成が口にしたのは、それであった。

「聚楽第の一室で香木で作り、極楽ノ間と称して、上様のお運びを願っております」

そう聞いたのは、年のはじめのころで、秀吉も、病気本復のあと、そこへ招じられることを楽しみに思っていた。

なんと、それが、秀吉の棺作りだったとは。

「ぬッ、痴れ者め！」

痩軀が折れるのではないかと思われるばかり、秀吉は激昂した。

秀次が高野山に謫せられたのは、その数日後である。

いうまでもなく、その極楽の間は、氏郷が麝香谷から香木と香料を運ばせて、完成したものだった。

秀次の切腹と妻妾の処刑を聞いた蒲生家では驚愕した。当時、家中は、幼年の主君をはさんで、老臣重臣らが二手にわかれて抗争をはじめていたところだった。

田丸中孫太輔具忠と蒲生備中守郷成との対立が、家中を争わせていたが、田丸は、

「御家の安泰のために、麝香谷を抹殺してしかるべし」

と、提言して、あの夜の急襲になったのである。

香木香料の提供者たる事実は隠しようもないが、領内にそうした特殊な地帯が存在することは、痛くもない腹をさぐられることになる。

いまとなっては、聚楽第のその特殊設計がほんとうにあったかどうかは、さぐるに手がかりもない。が、その風評は、猫一族にとって、決定的だった。

権力者が政治を握っている時代、疑わしきは、すなわち、罪なのである。

田丸が抹殺を策したのも、後顧の憂いをなくすためだった。

しかし、そうした政治の御都合主義で、一族みな殺しになるほうはたまらない。

「なるほど、どうやら、わかりかけてきた」

と、左近は頷いた。

「あのタタリ屋敷での麝香猫の験し交合なども麝香によって、一族を甦らせるためか」

「丁度百年目でございます。百年目に、再興の機運がめぐってきたのも、御先祖さまのお導きでございましょう」

「どうかな」
「いいえ、何事も、必ず、因果があるもの」
と、猫女は、狂信者の口吻になっていた。
「人間の因果というものは、避けられませぬ。丁度百年目なのでございます」
「……」
「寛永寺根本中堂の御造営や日光の神廟修復そのほか、御香木も望まれています。奈良茂さまより、麝香が大量に入るなれば、いかようにも一族の再興に御助力下さろうという話ゆえ」
奈良茂と紀文は、幕閣の要人に食い込んでいるのは、誰でも知っている。
元禄という時代の豪奢さは、政治の腐敗と相まって、物価を高騰させていた。
「——檜一寸の重さを以って金の重さをくらぶるに、その価は金に倍せしなど申し……」
と、新井白石の随筆の中にもあるように、檜材は豪華な建造物に欠かせない。ために高騰をつづけ、奈良茂たちを肥らせていった。
政治との結びつきはいうまでもない。知足院隆光のように、寺院の修復建造を大奥へ提案して、奈良茂に請負わせるという、巧妙な儲け方をしている奴もいれば、小判の改鋳で儲けた勘定奉行荻原重秀のような役人もいる。
政界と政商との黒い取引は、いまもむかしも変らない。
一族の再興には、そうした顔と力を借りるほかはなかった。
「——でも、麝香猫の牡の陰嚢にできるとやら、普通の猫にかけ合わせても、とてもできるものでは

ありませぬ」
「おれが大事な、たった一匹の麝香猫を斬ってしまったしな」
「いいえ、前から、危うんでおりました。やはり、わたくしども先祖の谷へゆかねばと、思うていたのでございます」
その麝香谷の所在を示す秘巻が、知足院隆光の手に入っている、という話を、奈良茂がちらりと洩らしたのである。
奈良茂にしてみれば、材木商特有のカンでその麝香谷に行き、材木を買い占めれば巨利を博すると考えたのだろう。
隆光の機嫌を見はからって、巻物の中味を見ようとした。
その矢先に、小天馬が盗み出してしまったのである。
「あれから百年、おそらく、血の臭いも消え、谷は緑の樹々が生え、花が咲き、麝香猫が繁殖していることでございましょう」
「――そうであろうか」
「あちらでは、死の谷と申して、誰も近寄らぬそうな、麝香猫のことは、もはや、他に知る者はいないと思いまするが」
「その秘文を、どうして読む？」
奇妙な絵文字なのである。
才槌頭が書いてあるかと思えば、鼠の絵や猪、それから、大きな二重丸。それから城。俵があるし、

あくびしている男の絵などもある。
全く、これを字として読むのは頓智がなければ、ならない。
「いろいろと考えてみました、考えてみると楽しゅうございます」
猪、輪っぱ、城——
これを、猫女は、
「い、わ、しろ……岩代のくにのことでしょう」
「なるほどな。その伝でゆくと、この浴衣の絵」
藍染めの浴衣の絵だ。その次には魚屋の盤台の絵があり、戸の桟、それから大きな松の根っこ、それから将棋の駒。その次は孟宗の太い竹の絵であった。
「こいつは……ばんだい、だ、すると、上の頭、その上の浴衣は、会津磐梯、とも読めぬことはない」
「間違いございませぬ、桟は山……根っこはね、で将棋の駒は、駒、ねこま、そして竹が岳——会津猫魔岳……と読めまする」
面白くなってきたようだ。
岩代国会津猫魔岳……
また桟が書いてあり、その下の鼠は、つづけて、さんちゅう、山中、と読むのに、それほど、無理はなかった。
この絵文字通りに道を辿ってゆけば、その麝香谷へゆける。
だが、それだけでは不分明のところがあるようであった。

ところどころに、猫の目が描いてあったり、一本の矢が書いてあるかと思えば、小さな山のかたち、車井戸などもあった。

それが、どういう意味かわかったのは、会津のその山中に分け入ってからであった。

(おれは、何のために？)

と、道中も左近は疑問に思った。

(この連中と麝香谷にゆくのか？)

あっと、その不審が胸をつつんだ。

〝猫一族〟

その一族のために——一族の再興のためにというが、一体、それは何のためか、それが誰のためになるというのだろう。

百年前の一族、その恩讐が、今日のおれたちに、どれだけ関りあっているのだ。

左近が、こういう疑問を起すのも、しかしかれの場合は、幸運だったからなのだろうか。

浪人して父子代々漂泊を重ね、ほとほと生きるのに疲れた者にとっては、昔の名分を認められ、士分に取立てられることが、唯一の希いなのか。

(その通りにゆくならば)

それでもよい。

だが、すでに、世は元禄。

幕府でも財政的にゆき詰ったからこそ、重秀が、小判改鋳——改悪をやっているのだ。

突然、

〝由緒ある葦名の一族――〟

としてかれらがあらわれても、その名跡を立てさせるということの裏付けが、あくまでも仕官にある以上、幕府が、どんな誠意を見せてくれるだろう。

奈良茂の周旋が、どれほどの力を持つか。

それらのことを考えれば、幻十郎や猫女の希望は、幻影にすぎないのではないか。

(そして、麝香猫が繁殖していたら)

それなりに、金にはなる。

その地で、先祖のように住むのもいい。だが、いくら山中でも、会津藩の領内だ。松平家に願い出なければならない。

拒まれたら、それきりのことである。

かれらの顔を見ていると、そうしたことも考えずに、夢中になっている。

(こんな奴らに、お美津は殺されたのか……そして、おれの一生も)

もう取りかえしはつかないのだ。

たとえ、罠にはめられたことが、立証されたとしても、多勢を殺傷しているし、世間はかれを迎え入れてはくれまい。

(――おれに残された道はこやつらをみな殺しにする。そして、系図をとりかえす。せめてものお美津への供養だ)

左近はふと立ち止って、冷たく光る眼で、一行を振りかえるのだった。

6

一行、三十六人。

むろん、ばらばらにゆく。三、四人、あるいは四、五人ずつ一組で、前後して奥州路を辿った。

江戸から会津へ行く道は、大まかにわけて三本ある。

日光街道を、鬼怒川から、川治を抜けて、山王峠を越え、田島経由で大川沿いにゆく道と、奥州街道、白河から左へそれて、赤崩山を通って、塩生で、大川道へ出るか、郡山までいって、堀ノ内を猪苗代湖畔へ出る。

後者だと、会津若松の城下へゆくより、早く、磐梯へ出る。

白河まで同行したかれらは、ここで二手にわかれた。

一方は若松城下を経由して——というのは、城下の旅籠に一応腰を据えて、入山をあらためて考えるという典膳たちとなんでも早く行きさえすればいい、という幻十郎らと、意見が食い違ったせいであった。

「左近、おぬしは」

「そうだな、早く行くほうがいい」

と、左近はにやりとして、

「会津若松の城下は、風紀がきびしいというぞ、一緒に寝てくれる飯盛り女なんぞはいまい」

ほんとうに、麝香猫が棲息しているのか、それとも死の谷か、どっちか早く知りたい気持が先に立っていた。

それから、考えねばならないのだ。

「私も、左近さまと御一緒に」

と、猫女は言った。

そんな女を、典膳は睨みつけるようにして、

「猫女さまに妙な真似をすると……」

「そうだ、幻十郎どの、気をつけて貰おうかい」

と、甚内も口添えした。

そっちのほうに、天馬が入っている。

かれはまだ重傷の身だったが、歩ける、と言い張って、繃帯のひどい姿なのに、一行に追いついてきている。

「妙な奴さ、人間か何かわからん」

と、猫井源助という男が、天馬兄弟を評した。

「ときどき、熊と一緒にいるのかと思ったり、かと思うと狼と一緒のような気がしたりする」

祖父から三代にわたる放浪性が、容貌まで変えてしまったのだろうか。

左近は、天馬兄弟の姿を目前にすると、憎しみがふつふつと湧いてくるのだ。

かれらが別の道をとったので、ほっとした。

その上に、あのむく犬だ。
悧口であることはたしかだし、だから、一層、許せない気がした。
（この犬が、お美津の首を咥えて、往来を浅草まで走ったのか……）
黒髪を曳きずり、血と埃りにまみれて、これ以上の恥しめはない。
（この犬も、許せぬ）
そう思って見ると、敏感に、きっとなってこちらを睨む。
ときどき、ぐわッと、歯を剝いて、ううと、威嚇するかと思えば、べろりと、大きな舌を出してあくびをする。
小面憎い犬だった。
猪苗代にも城がある。会津若松城の支城の一つだった。ここは福島や二本松城下からくる道の要衝になっている。
この猪苗代に泊った夜、猫女のほうから忍んできた。
そっと深夜に足音もなく近寄ってきたのだ。
その影が猫女だと思ったとき、左近は緊張を弛めた。
（この女が……）
まさか刺しに来るのではあるまい。
いまは、どちらにせよ、左近を殺すわけにいかない。
まるで猫そのもののように寄ってきた猫女は、左近の足もとのほうへゆく。

淫らなところなど、片鱗も見せないこの女が、大胆にも、左近の夜具の下へ手を突っ込んできたのである。

かれのものをかなり的確に摑んだ。摑んだとたん、熱い息が洩れた。あのときのことを思いだしたのか。吐息とともに、掌は、やわやわと、かれのものを揉んでいる。

久しぶりにめぐりあった。貴重なもののように、その手つきは、懐しさと愛がこもっているのだった。

それは、ぎこちなくはあったが、惹かれる心が、はっきりと掌の温みに感じられたのである。

木石ではない左近は、しだいに硬みを増してくるのをおぼえた。

勃起に耐えようと思えば耐えられたかもしれない。が、男の気持は、こうしたとき、奇妙に雄偉なおのれを望むものらしい。

大きくなると、彼女の細い指では、まわりきれぬほどだった。

「……」

何か、ほとんど無意識に呟やいた。

夜具をそっとめくる。その間、片手は、握ったままなのだ。

そして、夜気にそれをさらすと、まるで、そのままでは空気に耐えられないものを、保護するかのように、つと唇を寄せたのだ。

熱いものがつつんだ。

女の口の熱さが——それは想いのほどをあらわしていたのであろう。猫女は、口を動かし、舌を動

かした。

技巧というのではない。なぜか、そうしなければならないように、からだの底から噴きあげ、促すものがあったのだ。

猫女は、かれを愛撫しながら一方では、おのれを慰めていた。この女がなぜ、こういう態度にでたのか、左近はむしろ不思議に思い、声をかけるのをためらっていた。

かれは眠りを装ったまま、女の口中にたかまりを放った。同時に、女のからだは、瘧にかかったように顫え、がばっと、夜具の裾に突っ伏した。

あるいは、口中にかれの放ったものを含んでいなかったら、声を出していたかもしれぬ。

声を出さないためのそれなのか。

このあと、左近は尚、眠った姿態を崩さなかった。

せめて、そうしていてやることが、このひそかな楽しみをもとめてきた猫女へのいたわりなのだ。

猫女のプライドは、左近に求愛できないのであろう。

他人目をおそれるものもあったろう。

こうすることで、他者の目をさまさせず、自分も満足する。そのために、そっと忍んできたのだ。

どの程度、しかし、猫女自身が満足したかわからない。

暫く、その場に突っ伏していたのは快感を愉しんでいたのだろうか。

やがて、膝を起して裾をかきあわせると、面を伏せるようにして、出ていった。

猫一族の、女当主としての立場にある彼女は、左近だけを特別の男に持つことはできないのか。

最初、みんなにひき合わしたとき、
(おかしい)
と感じたのだが、あのときの言動を、かれらの反応を思いだすと、
(六人とも、みんな彼女の肌を知っているのではないか)
その時期に別はあれ、彼女はそれを匂わせるような言い方をした。
あるいは、かれらの間に、一種の不文律があるのではないか。
猫女さまに交わるのは一度、と。
お情けを受けるのは、と言い直した方がいいかもしれない。その行為を平均化することで、六人の領袖を平等に扱おうというのか。
猫女が姿を消してから、左近はけだるい眠りに落ちた。
左近たちが、〝麝香谷〟に近い吊橋のところまできたのは、その二日後である。

7

猫魔岳という名は、この山塊の奇怪な姿からきた呼称らしい。
南から見れば、怒った猫に見え、東から見れば温和しく、北から見れば、泣いているが如く、西から見れば狂った如く見える。
その他のどんな角度から見ても、一つということはない。そして同じ角度から見ても、春夏秋冬、それぞれに違うし、曇天でも、また違った。

西陽を受けたときの微妙な変化も、この山の凹凸と、襞の多い姿体のせいであろうか、千変万化の姿態と感情の激動は、まさに猫魔岳の名にそむかない。かれらは、磐梯の南麓伝いに、西へ向った。葦名氏の積怨をとどめる磨上原である。戦国のむかし、仙台の伊達勢がここまで押寄せて来て凄絶な死闘を展開したところという。

磐梯と猫魔の間の沢をのぼってゆくと、両峰をつなぐ丸山の峰がある。

その間を、北へ尾根を越えると、ふいに展望がひらけた。

現在、この地に立てば、檜原湖やその他の大小無数の湖が望めるが、これは明治の磐梯の噴火によって生れたものにすぎない。

一行が漸く、

〝麝香谷〟へ辿りついたのは、もう暮れ方だった。

「明日は麝香猫にお目にかかれるのか」

幻十郎は、漸く、ほっとしたように言った。

「だいたい、この檜原というのは、檜木谷地といったところでな、檜の産地じゃ。ここに麝香猫が群棲しているとすれば、檜は自ら、麝香に染まっているわけじゃ」

麝香猫の牡の陰嚢から分泌した成分が、香嚢と称される部分に溜る。ここから、少しずつ、外へ分泌されるのだ。

一説によると、牡がこの秘香を有するのは、牝を呼ぶためという。その自然の分泌が、牝を惹きつけるのだ。

「左近、おぬしの系図だ、これは」と、幻十郎がはじめて、被いて見せた。
「お美津を殺して奪ったものだな」
「そのように一々申すな、耳にタコができる」
「タコで済まぬぞ、いのちがあるだけ有難いと思え」
「執こいの。ともかく、教えて貰いたい。おぬしの系図と、この絵図を組み合わせてみた。こちらに、天に堂の絵がある、道が尽きたところよ」
「……」
「おぬしの曽祖父は、天堂となっている」
「なるほどな」
「したがって、この天堂のところから三人子が生まれたしるしがあるが、その中の子が、家を継いだのだな、喜右衛門とある」
「おれの祖父だ」
「うむ。これをあてはめると、ここから左の道をとることになる」
驚くべき推理だった。系図と組み合わせることで、谷へゆく道を教えている。系図だけでも役に立たぬし、絵言葉だけでも、道はわからない。組み合わせることで、そこに至る秘密の道を教えるというのは、その組み合わせを持つ者が、この麝香谷へ入る資格があるということではないか。
「――よし、これでわかった」幻十郎は大きく頷いた。
「ははは、明日は麝香猫の群れに逢うことができようか」

そして、そこに野宿したのだが、その夜明け、左近が目をさましてみると、猫女さまはじめ、一人も、周囲にいなかった。

「やつ……置き捨てにしたか」

左近は愕然となって身を起そうとした。その両手と両足は固く蔓で縛られ、頭の芯が痛かった。

「うぬ、計ったな……」

何か飲まされたようだった。幻十郎が、薬草だとか言って採取していたが、毒薬だったのかもしれぬ。

どれくらい経ったろう。異様な声に呼びさまされた。

「ううう……」唸り方は狼のようであった。狼が襲ってきたのかと思った。が、違った。あのむく犬の黒主ではないか。

傍に小天馬が鎌を持って立っている。

「ふふ、もう用無しというわけじゃい」

「ここで殺るか」典膳が言った。

「やるなら、おれにさせろ」

甚内が、待っていたように管槍をしごいた。

管槍というのは、一種の仕掛け槍で、どこかを押すと穂先がふいに、二倍にものびる。

「芋刺しにして、崖へぶん投げてやる。おれは、こやつ、はじめっから気にくわなかったのじゃ」

「まあ待て、あとの楽しみにしろ、それより猫女さまはどっちへ行った」

「あの木の下の道だ、しるしの赤い布がある」
赤布を小さくひき裂いて、小枝に結びつけていっている。
むく犬は、なおも左近を牙にかけたいように凄い唸りを洩らし、歯を剝いていたが、刑部に促されて、木の下の道を走っていった。
「黒主がいれば、道しるべなぞ不要なのじゃがな」と、誰かが言った。
かれらの姿が木の下へ入っていってから、どれくらい経ったろうか。左近は、何かどろどろという音を聞いたように思った。どこかで音がしていた。何の音か、判然とはしなかった。
空は青く、雷鳴でもない。それは、はじめ遠雷のように聞えたが、しだいに、大きく、かれの全身を揺すぶるようにして、高く響いてきた。雷鳴は空で聞えるものだ。雷鳴ではなかった。海鳴りでもなかった。それは、もっと低く深いところで、強い意志を持った音をごろごろと立てていた。
やがて、かれの周囲に小石が転ってきた。そのあたりの岩も揺れ、立木は幹や根を大きく揺すり、廂になった土が崩れ、ばらばらっと、雪崩れ落ちてくる。
おそろしい地鳴りであった。立木に一端を縛った蔓が、かれの四肢の自由を奪っている。
「くそ！」
左近は焦った。こんな目にあうくらいなら、早く、やつらを斬ってしまえばよかった。もがいた、が、手足は自由にならない。
「ぬ！　地震が……」
なんという不幸だ。

ますます地動は大きく、猫魔岳全山が、大きく震え、それは、猫が胴ぶるいするのに似ていた。

轟！　轟！

何の音か。岩の呻きか、樹々の叫びか、風の喚きか、それとも、谷へおりていったかれらの恐怖の叫びであろうか。鳥という鳥が飛び立ち、はげしく啼きたて、騒ぎながら、空中に舞っている。

かっと目を開いた左近は、遠くの崖の上に帆柱のように突っ立った巨岩が、大きくかしいで、ぐわっと、大音響を立てて倒れ、凄まじく咆哮しながら、転り落ちるのが見えた。

その巨岩は、そこらの岩という岩を、土の凸起を削り、押し潰し、夥しい石を散乱させながら、急斜面を転ってゆく。

まるで、〝麝香谷〟は、そのはざまをこすりあわせるように、揺れるたびに、老木巨木をばりばりと折り飛ばし、悲鳴をあげさせている。その中におりていった人々は、一体どうなったろう。小石か、一本の草よりも無力に、ばらばらにされているかもしれない。

樹が揺れたせいで、蔓が弛んだ。左近は、いましめを漸くほどいて立ち上った。

と、また震動が来た。両足を踏んばって立つのも難しいほどの揺れかただった。

「猫女！」

大声で呼んだ。が、その声は、むなしく轟音にかき消されてしまい、あとには、人間の小ささを嘲けるような落石と、樹々の落下だった。

「――死んだか、奴ら……」

天馬も、小天馬も、幻十郎もそしてむく犬の黒主も――

猫の一族は、まるで、この日〝死の谷〟へ死にに来たようなものだった。いや、

「そうではあるまい……」

巨木に摑まって、振り落されるのを防ぎながら、左近は呆然となって見まもっていた。

「彼らが入っていったからではないか、死の谷へ……」

麝香猫が棲息していたかどうか、知る由もない。

かれの眼下にあるその谷は、凄まじい青嵐だった。そこには、人間の欲望を許さぬ巨大な自然の懐(ふところ)ろがあった。そこに何が秘められているか、知っているのは、

「猫魔岳だけに……」

麝香猫がいようといまいと、自然にとっては、何らの意味はあるまい。

左近の目の中で、やがて、大きな波の揺れは、静かになり、地動の音は、嘘のように消えていった。

そうして、あとには、巨岩が大きな裂け目を見せ、樹々がむざんに折れ、根をむきだし、地形をすっかり変えた猫魔岳が、傲然と聳えていたのである。

猫魔岳ノ北壁ニ秘境アリ、土俗称シテ蛇甲谷ト言フ。元禄年中鳴動シテソノ地形ヲ変フ、蛇甲谷ノ伝フルトコロノ奇聞、真ヲ探ルヲ得ズ、と。会津岑々(しんしん)録に数行あるのみで他には、このことを書いたものを未だ見ない。

元禄秘帖

昭和四九年一一月二五日　印刷
昭和四九年一二月五日　発行

著者　早乙女　貢

編集人　桑原隆次郎

発行人　朝居　正彦

発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒460　名古屋市中村区堀内町

印刷　共同印刷

製本　田中製本